青藍

藍野大学年報 2025



藍野大学

青　藍　【2025年　巻頭言】

学長　佐々木　惠雲

学長として任期最後の年にあたり、未来に向けて藍野大学への提言の場とさせていただきます。

急速な少子高齢化と社会構造の変化が進む中、1つの専門性では解決が困難な課題が山積しています。特に医療・健康分野では地域医療体制の維持困難、医療人材の不足と地域偏在、そして多職種連携の必要性が高まっています。また、慢性疾患や認知症の増加により、病院完結型から地域完結型医療への転換が求められる一方、医療のデジタル化やAI活用の進展により医療・健康分野に必要なスキルも変化しています。

藍野大学では、これからの未来を見据え、人がその生涯を通じて尊厳を保ち、健康に生きることができる社会の実現を目指すべきと考えます。そのために、人のLife（ライフ）、すなわち生きることを「生命」、「生活」、そして「人生」という3つの側面から『TriLIFE』として捉え、その全てが豊かに調和した状態〈TriLIFE well-being（トライライフ・ウェルビーイング）〉の実現が求められます。その達成に向け、教育力・研究力・連携力の一層の強化が必要でしょう。

また、医療・健康分野における人材育成拠点かつ地域の健康増進の中核として、3つのラボを地域に開かれた医療・健康に関する教育・研究・地域貢献のHub（Aino Life Support Hub：AiLiS）として機能させ、多様な他者と協働しながら、医療・健康分野の未来を切り拓く人材を養成し、持続可能な地域医療・健康の実現に寄与していくことも大切だと考えます。

１．これからの未来を切り拓く人材育成【教育力】

- 学生が主体となって学ぶ地域健康共進化型分野横断教育の推進：医療・健康分野を軸に、データサイエンス、社会科学、人文科学を横断・融合して学べる学習者中心の教育を展開します。そして、学生が主体となって地域の医療や健康に関する分野を超えた課題解決的な学びを行うアクティブラーニング型授業を推進し、教育の質向上と地域貢献を相乗的に目指します。
- ICT・AI技術を活用した教育と多様な学習の支援：LMSや電子教科書などのICT技術を活用した教育のデジタル化や生成AI技術を活用したアカデミック・アドバイジングを推進します。また、大学院博士課程の設置構想、オンライン・夜間・リカレントプログラムの拡充により、社会人を含む多様な学習者を支援します。

２．研究力の強化と社会実装【研究力】

- 研究機能の強化と社会実装：中央研究施設などの施設を共同利用できる研究拠点として機能強化を図るとともに、3つのラボを活用した、研究の社会実装に向けた取り組みを支援します。
- 外部資金獲得と研究支援：科研費など外部資金の採択数向上と女性研究者や教員の博士号取得に向けた支援を行います。

３．地域社会との共創・共生【連携力】

- 地域健康共創拠点の形成：自治体・企業・住民と協働し、多文化共修の学びや地域健康課題解決と価値創造を目指す「地域健康共創拠点」と「地域共創拠点センター」を構築します。
- 包括連携協力協定による連携力の強化：地域の医療・健康分野の発展に寄与することを目的とした包括連携協力協定の拡充を図り、教育・研究・地域貢献における連携力を強化します。

４．教職協働のデータ駆動による教学マネジメント改革

- ガバナンス体制の強化：学長を中心とした、意思決定の迅速化と教学・経営の一体運用を推進します。教員と職員がそれぞれの専門性を発揮しながら対等の立場で協働し、教育改善のサイクルを回す、時代に即した教育組織改革を実現します。
- IR データの活用と出口における質保証の推進：MLST、学修行動調査、GPA、国家試験合格率、卒業後アンケート調査など、入学前、在学中、卒業後の IR データを活用した、教育改善と学習成果の可視化を徹底します。さらに、オープンバッジの導入による学習歴のデジタル化を推進し、社会に対して出口における質保証の機能を強化します。

これからの大学運営はますます厳しさをましていくと考えられます。藍野大学が一体となってこの難局に立ち向かって頂きたいと思います。最後に改めて 4 年間本当にありがとうございました。皆様のご活躍とご発展を心より願っています。

2025 年年報　発刊にあたって

副学長・中央研究施設長　栗原秀剛

2025 年は藍野大学にとって大きな変化の年となりました。看護学科が看護学部として独立し、医療保健学部に健康科学科が加わり、2 学部 5 学科体制となりました。さらに、新たな施設として誕生した Fitness　Lab、AinoSimulation Lab に加えて先に開設された Clinical Skills Lab を統合した Aino LifeSupport Hub (AiLis)が完成し、施設での教育、研究の活動は言うに及ばず、地域との結びつきを強化する拠点としての利用が期待されます。また、新入生を対象として電子教科書が導入されました。電子教科書は多くの学生に好評ですが、教員の対応には改善の余地がありそうです。健康科学科の入学生(1 期生)は、この新しい学科の歴史を自ら作っていくという気概を持った学生達が集まってくれました。今後、どのように育っていくのか楽しみです。

社会全体に目を向けると、前評判はネガティブなものが多かった大阪万博が 4 月から 10 月まで開催され、最終的には黒字化し、かなりユニークな造形をしたマスコットのミャクミャクは、万博終了後も人気が続いており、何がウケるかの読みの難しさを感じています。また、今年のノーベル賞には日本人研究者が 2 名（大阪大学の坂口志文氏と京都大学の北川進氏）選出されました。お二方とも長年の研究成果が評価されたもので、経緯を知るものとして大変喜ばしく、また、誇らしく思います。受賞後の会見では、そろって日本の研究活動の問題点を指摘されています。それを受けてか次年度の科研費は若手を中心に大幅な増額が予定されています。若手研究枠は現在も採択率は高いのですが、これに応募できるのは年齢ではなく学位を取得していることが前提となります。それ故、大学としては学位取得のための支援対策を考えていくことが科研費採択率を上げることにつながると考えています。

佐々木学長のもと、新たな委員会組織を構築して第 3 期認証評価を受審し、基準に適合していると認定されました。第 4 期認証評価もすぐにやってきます。第 4 期では、改革の具体例が必要となるため、準備には時間がかかります。来年度からの新体制で、新たに設けた中期計画にそって教職員一丸となったスピード観のある活動が必要となりますので、ご協力お願い申し上げます。

目　　次

Ⅰ　大学および学科便り

2025 年度　藍野大学医療保健学部の歩み　…… 1

2025 年度（令和 7 年度）看護学部の取り組み

2025 年度（令和 7 年度）看護学科の取り組み

2025 年度の理学療法学科の取り組み

2025 年度の作業療法学科の取り組み

2025 年度の臨床工学科の取り組み

藍野大学医療保健学部健康科学科の 2025 年

2025 年度　看護学研究科の取り組みと今後への課題

2025 年度の健康科学研究科の取り組み

藍野大学　中央研究施設

2025 年度のキャリア開発・研究センターの取り組み

2026 年度に向けた新体制整備に関する取り組み報告

本年の中央図書館の活動

新施設「フィットネス・ラボ」完成記念イベント

Ⅱ　2025 年度の出来事　…… 31

特集 1　2025 年の FD・SD 推進活動

特集 2　新たな認証評価制度がもたらす「大学間比較」にどう向き合うか(教学 IR 室)

特集 3　〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について

１．卵巣がん早期発見プログラムの開発

－婦人科系サイレントキラー特性の撲滅に向けて－

２．中高年の社会貢献に関する心理的要因の検討：

未来時間展望と社会参加動機の関連

３．アカデミック・ライティングにおける論証の「型」の特徴と可能性

４．加齢による脳内ネットワークの変化－fMRI を用いた脳イメージング研究

５．iPS/ES 細胞由来内耳オルガノイドの内耳移植による内耳再生研究

特集 4　〈令和 7 年度藍野大学優秀研究賞〉

一塩基多型とアスリートの腱・靭帯損傷：系統的レビューとメタアナリシス

特集 5　2025 年度　看護研究会（ANA 会）の実践報告

特集 6　医療法人恒昭会藍野病院 実習指導者対象の研修会実施報告

特集 7　令和 6 年（2024）度看護学科卒業生のための看護技術演習実践報告

特集 8　AinS-Lab.完成内覧会および看護学部開設記念イベントの開催

特集 9　反復末梢磁気刺激（rPMS）の導入によるパーキンソン病患者の QOL 向上と
地域連携構築への試み

特集 10　藍野大学医療保健学部臨床工学科における模擬手術室を活用した実習の取り組み

特集 11　臨床工学技士職業体験 in あいの祭

Ⅲ　学年暦・学生の状況　……　75

Ⅳ　研究業績と社会貢献　……　83
科学研究費助成事業について
教員研究業績・発表等
編集後記

大学および学科便り

2025 年度 藍野大学医療保健学部の歩み

医療保健学部長　後藤昌弘

2025 年は、日本社会にとって大きな節目の年であった。大阪・関西万博の開催は、世界から大阪、日本へと再び注目が集まる契機となり、未来社会の在り方や健康・医療の価値を改めて問い直す機会となった。また、我が国では初の女性総理大臣が誕生し、多様性と包摂性を基盤とした新たな社会像が示された一年でもあった。変革と挑戦が同時に進行するこの時代背景の中で、医療人材を育成する大学の社会的責任は一層重みを増している。

一方で、大学を取り巻く環境は依然として厳しさを増している。18 歳人口は長期的な減少局面にあり、2025 年には約 106 万人とされ、今後も減少が続く見通しである。大学進学率は 60%前後で推移しているものの、大学数の多さと地域間格差の影響により、大学入試は「全入時代」から「選ばれる大学」への転換を迫られている。こうした状況下で、各大学は教育の質保証、特色の明確化、社会的要請への迅速な対応を通じ、生き残りをかけた入試・広報戦略を展開している。

このような環境の中、2025 年度の藍野大学医療保健学部における入学状況は、各学科の特色が一定程度評価された結果であった。理学療法学科は入学定員 80 名に対し 105 名、作業療法学科は定員 40 名に対し 39 名、臨床工学科は定員 30 名に対し 18 名の入学者を迎えた。また、2025 年に新設した健康科学科は定員 30 名に対し 11 名の入学者数であった。理学療法学科および作業療法学科では安定した志願動向が見られるものの、臨床工学科および健康科学科においては課題を残したため、学部定員 180 名に対して入学者 173 名、定員充足率 96.1%という結果であった。

とりわけ臨床工学科および健康科学科については、学科の魅力や将来性が十分に受験生・高校現場へ伝わっていない点が課題として浮き彫りとなった。今後は、臨床工学技士が担う高度医療機器管理、集中治療や在宅医療分野での役割拡大といった社会的需要を明確に打ち出すとともに、病院・企業との連携による実践的教育や資格取得支援の充実を通じ、職業イメージとキャリアパスの可視化を図る必要がある。

また、健康科学科においては、予防医療、健康増進、データヘルス、地域包括ケアといった幅広い進路可能性を強みとして、高校生や保護者に対し「医療×健康×社会」を横断的に学べる学科であることを積極的に発信していく必要がある。具体的には、他学科との横断型教育プログラムの構築、地域・自治体と連携したフィールドワークの充実、卒業後の進学・就職実績の丁寧な提示などを通じ、学科の独自性と将来展望を明確にしていく方針である。「少人数だからこそ実現できる丁寧な教育」という学科の強みを前面に打ち出し、志願者増加につなげていきたい。

2025 年度（令和 7 年度） 看護学部の取り組み

看護学部長　本多容子

1. 看護学部スタート

2025 年度(令和 7 年度)4 月より、看護学部看護学科としてあらたなスタートを切ることととなり、第 1 期生・128 名の新入生を迎えた。看護学部の 1 年間を表 1 に紹介する。

表 1.　看護学部看護学科の 1 年間の出来事

月	行事等	備考
4 月	入学式 新入生歓迎会 ※歓迎会	
5 月		
6 月		4 年生 統合看護学実習
7 月	臨地実習指導者交流会 ※納涼会	4 年生 公衆衛生看護学実習Ⅰ Ⅱ
8 月	AinS-Lab. 完成内覧会・看護学部開設 記念イベントの開催 ※本誌報告参照	3 年生 領域実習（7 領域）
9 月		1 年生 基礎看護学実習Ⅰ(見学) 4 年生 教育実習 4 年生 養護実習
10 月		藍野祭
11 月		
12 月	病院説明会（就職支援） ※忘年会	2 年生基礎看護学実習Ⅱ
1 月		
2 月		保健師国家試験 看護師国家試験 1 年生 基礎看護学実習Ⅰ
3 月	祝卒業フォローアップ研修 卒業式 ※送別会	

2. 研究活動

本年度も多くの教員が科学研究費助成をうけ研究に取り組んでいる。その他、学内外の研究助成金の獲得など研究活動に意欲的に取り組んでいる。若手教員の活動の一部を紹介する。

◇前川麻記

2025 年度日本公衆衛生看護学会　学術奨励賞（優秀論文部門）

受賞論文「乳幼児を子育て中の共働き夫婦のワーク・ファミリー・コンフリクトに関連する要因
―ソーシャル・キャピタルに着目して―」日本公衆衛生看護学会誌 13 巻 1 号 p.2-12

◇三宅光代

日本健康行動科学会第 24 回学術大会　優秀発表賞

受賞発表「DLB カフェの取り組みから生まれた学生ボランティア活動」

◇卒業生の学会発表

第 30 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会　講演発表

発表テーマ「20 歳未満発症の 1 型糖尿病患者の成人期医療への移行の実態とセルフケア能力」

発表者：梅田英子、矢代かん奈(大阪府済生会野江病院)、榮口響大、神田栄美子



卒業生の学会発表



三宅光代
日本健康行動科学 24 回学術大会
優秀発表賞 受賞



前川麻記
2025 年度日本公衆衛生看護学会
学術奨励賞 受賞

3. 実習協力病院への臨床研究支援

①医療法人恒昭会 藍野病院

・研究方法の講義
・グループ別の研究指導(研究計画立案～まとめ、学会発表まで)
・学会発表
　第 56 回日本看護学会学術集会　口演発表
　　発表演題：車椅子で過ごす高齢者の下肢浮腫に日中の臥床は有効か？
　第 33 回日本慢性期医療学会　ポスター発表
　　発表演題：チーム医療推進の一環として介護福祉士による介護教育体制が組織化されるまで

②社会福祉法人恩賜財団 京都済生会病院

・グループ研究指導(研究計画立案～まとめ、学会発表まで)
・学会発表

③社会福祉法人 京都社会事業財団 京都桂病院

・研究方法の講義
・グループ研究指導(研究計画立案～まとめ、学会発表まで)
・学会発表
　第 56 回日本看護学会学術集会　口演発表
　　発表演題：病棟看護師の各勤務状況と病棟間における歩数の比較検討

④社会医療法人東和会 第一東和会病院

・個別研究指導(研究計画立案指導)
・研究方法の講義

4. 社会貢献活動

今年度も多くの社会貢献活動を実施した。学生も参加した活動の一部を紹介する。

◇「親子 de Aino かふぇ」
　内容:「出会いの」と「藍野で」を掛け合わせたネーミングの親子カフェ
　日程:毎月第 3 木曜日　11:00～13:00
◇「レビー小体型認知症カフェ」
　内容:レビー小体型認知症のご本人とご家族対象の認知症カフェ
　日程:毎月第 3 土曜日　13:00～15:00
◇ダウン症親の会「でんでんむしの会」
　内容:託児ボランティア
　日程:6 月、9 月開催
◇レビー小体型認知症勉強会/ご本人とご家族の交流会
　内容:レビー小体型認知症の講演会と当事者・家族会
　日程:6 月、10 月
◇藍野病院「まちの保健室」
　内容:転倒予防のための足指力測定と転倒予防指導コーナー出展
　日程:5 月
◇高槻市立三箇牧公民館「こどもまつり わくわくこどもひろば」
　内容:子ども向け看護体験「おしえて！ナースせんせい」
　日程:11 月
◇高槻市立今城塚公民館「こどもまつり」
　内容:子ども向け看護体験「おしえて！ナースせんせい」
　日程:2 月
◇「ハミング・オアシス」
　内容:在宅で過ごす病気や障害のある子どもたちへの器具や便利グッズの展示会運営ボランティア
　日程:8 月
◇「スペシャルキッズサポーターの集い」
　内容:ボランティアスタッフ
　日程:3 月
◇藍野大学・太田地区福祉委員会・さんすい学園運動・健康の実践講座　第2回
　内容:いま聞きたい！　乳幼児からの性教育を助産師の立場からこどものなぜ？なに？に、どうする？
◇ユース保健室
　内容:若年層対象の相談支援活動

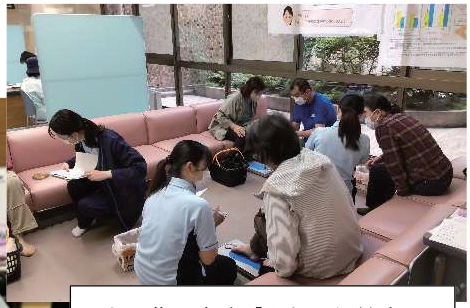


「こどもまつり」の様子



左：「親子 de Aino かふぇ」





上：藍野病院「まちの保健室」
左：「ハミング・オアシス」

2025 年度(令和 7 年度)看護学科の取り組み

看護学科長　西田 千夏

1. 学修への支援について

2025 年度(令和 7 年度)は看護学部看護学科としてあらたなスタートを切ることととなり、看護学部看護学科第 1 期生・128 名の新入生を迎えた。新入生が安心して大学生活を送れるよう、入学後早期（4～5 月）に個別担任面談を実施した。学習支援も早期から開始し、基礎学力の定着に向けたミニ講義や基礎部分の解説等を行った。実習では基礎看護学実習Ⅰを 9 月・2 月に終えて、看護職の責任とやりがいを臨地で学ぶことができた。

2 年生にも、時間割の空き時間に学習支援を行った。知識だけではなく技術の振り返りも実施し、根拠と技術をつなげることを学ぶことができた。12 月の基礎看護学実習Ⅱでは、看護計画を立案し、対象者の健康回復に向けた看護実践の基礎を修得した。

3 年生は、領域実習を 8 月下旬～2 月下旬で実施した。地域・成人看護学実習Ⅰ（3 週間）、地域・成人看護学実習Ⅱ（3 週間）、地域・老年看護学実習（1 週間）、老年看護学実習（3 週間）、母性看護学実習（2 週間）、小児看護学実習（2 週間）、精神看護学実習（2 週間）、在宅看護学実習（2 週間）を履修し、看護職に求められる基礎知識、看護技術、態度を身につけていった。

4 年生は、6 月に統合看護学実習（2 週間）、保健師課程選択学生が公衆衛生看護学実習Ⅰ、Ⅱ、教職課程選択学生が教育実習を履修し、看護管理や各専門職における基礎的能力を修得した。国家試験対策では模擬試験の成績が年間を通じて昨年を下回っていたが、個別指導に力を入れた結果、最後の模擬試験では昨年の成績を上回った。2025 年 3 月には卒業フォローアップ研修を実施し、2026 年 3 月も実施予定である。他大学学生にも参加周知を行い、同じ看護職を目指す仲間と共に学生生活最後に学び合うことで、関係構築や基礎技術の修得を目指す。

今年度完成した AinS-Lab.（Aino Simulation Lab；環境型シミュレーションラボ）は、様々な授業で活用した。一例として、地域で生活する難病療養者を招き、学生との実際の関わりを通した対象者理解の授業を展開した。実践する学生は限られているが、ラボの映像システムを利用することで、全学生が対象者と学生の体験を身近に感じられる授業展開ができた（写真 1）







写真 1　地域･在宅看護学援助論　AinS-Lab.での授業

2. 学生生活への支援について

新入生歓迎オリエンテーションでは、学科紹介、学習方法、上級生からのアドバイス等の後「玉入れ大会」を開催し学生間の親睦をはかった。

オープンキャンパスには学生が多数参加し、大学や看護の魅力を伝えた。オープンキャンパスに参加した高校生や保護者から、学生や教員の活気や温かさが感じられたという声が多数あった。

10 月のあいの祭では、昨年に引き続き看護学科教員による模擬店の出店や仮装コンテストへの参加など、教員・学生が協働して盛り上げた。(写真 2)





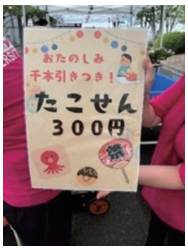


写真 2 あいの祭

3. 実習施設との連携について

7 月に実習委員会による実習意見交換会、12 月に就職指導委員会による就職説明会を本学で実施した。

実習意見交換会では大学から全体での実習総括を説明した後、領域ごとのグループに分かれて、実習目標達成に向けた課題と協同方法を話し合った。実習施設間での話し合いが活発に行われ、臨地では新人教育等の現状も踏まえて基礎看護教育に必要な知識や技術について意見交換した。実習意見交換会の終了後に、看護学部開設と AinS-Lab.完成を記念した交流会を行い、親睦の機会となった。(写真 3)

12 月の就職説明会には 30 の実習施設がブースを設置し、説明を実施した。1 回の説明時間が短いという意見からは、施設側の本会への期待が窺えた。学生の第一希望を優先したスケジュールに沿って多くの学生が集中して聞く方法での実施は、例年通り好評であった。学生も真剣に説明を聞いており、就職に直結し有意義であったという意見が多数挙がっていた。(写真 4)

終了後の参加施設へのアンケートでは、両会とも、開催時期や場所、方法についての満足度が高かった。

4. 2026 年度に向けて

看護学部看護学科として、学生の知的好奇心を高め、地域のニーズに応えられる能力を育成するための教育実践に取り組む。卒後を見据えた質の高い教育を実践するために、教育カリキュラム・評価基準の見直し、実習施設との連携、学生個々への支援、教員の教育力の向上を目指したい。



写真 3 実習意見交換会



写真 4 就職説明会

2025 年度の理学療法学科の取り組み

理学療法学科　学科長　寺田　茂

2025 年度の理学療法学科の取り組みについて「学生教育」「社会貢献活動」「学術活動」の 3 点から 1 年間を振り返り報告します。

「学生教育」では、学年担任・副担任を中心とした学生に対する年 2 回の個別面談を通して、学業、学生生活全般に対する課題や問題点をいち早く把握するきめ細やかな対応を実践してきました。また、単位認定試験における成績が低迷している学生を対象にして、少人数制による支援を実施し基礎知識の底上げと勉学に臨む姿勢の定着に努めてきました。特に 4 年生については、国家試験対策としてグループ学習を中心に、学生がグループ内で自らの役割分担や学習目標を定め、自律的に学習するような働きかけを行いました。それと同時に学習の進捗状況が遅れている学生に対しては、対象を選別し、教員による個別指導も実施し、また、対策全般を通して、模試などのデータ管理を行い、適宜学生に対してフィードバックを与えることにより、効果的な学習となるような働きかけも実施してきました。これらの取り組みが実を結び、第 61 回 理学療法士国家試験に全員が合格することを期待しています。

「社会貢献活動」については、藍野大学の認知度向上と帯同する学生の実践教育を目的に、茨木市との連携事業を推進しました。また、貢献活動の一環として様々な領域における講演が 29 件、役員・委員の就任が 22 件と幅の広い活動を展開することができました。

「学術活動」については、大学の認知度向上、若手教員および学生に対する研究指導の強化を目的に、個々の教員が各専門分野で積極的な研究活動を行いました。その結果、科研費の採択件数は新規 3 件、継続 7 件の計 10 件となり、また学科教員が著者の掲載論文数は 8 本（英語論文 7 本。日本語論文 1 本）となりました。学会発表は、24 演題（国際学会 2 題、国内学会 22 題）と活発な活動であったと思います。

その他の取り組みとして、卒業生や臨床実習関連施設のスタッフを対象とした「藍野理学療法学科卒後研修会」を表に示す日程で 2 名の講師を招き、脳血管障害分野と運動器分野の研修会を各 2 回、合計 4 回/年実施いたしました。また、理学療法学科の臨床教授に登録されている理学療法士に講師を依頼し、基本的な知識から現場での治療技術などをご講義いただきました。

次年度以降も「学生教育」「社会貢献活動」「学術活動」の三つの領域において、所属教員が一丸となって取り組み理学療法学科のさらなる発展・向上に努めていきたいと考えています。

表1　2025年理学療法学科卒後研修会のスケジュールと参加者

分野	回	日　付	時　間	参加人数
脳血管	第1回	11月5日（水）	19時00分ー20時30分	13
	第2回	12月10日（水）	19時00分ー20時30分	33
運動器	第1回	11月13日（木）	19時00分ー20時30分	33
	第2回	12月4日（木）	19時00分ー20時30分	20

■　脳血管

講師　　君浦隆ノ介先生　　藍の都脳神経外科病院

テーマ　　脳卒中運動麻痺回復と歩行再建のリハビリテーションー痙縮治療・デバイス併用療法・歩行再建ー

第1回タイトル：MRI画像の見方と脳の構造と働き

第2回タイトル：デバイス併用療法（痙縮治療・rTMS・装具療法）

■　運動器

講師　　森英人先生　　河内総合病院

第1回　　人工骨頭置換術後の歩行・ADL獲得における治療戦略とリハビリテーション

第2回　　大腿骨転子部骨折術後の歩行時痛に対する治療戦略とリハビリテーション

2025年度の作業療法学科の取り組み

作業療法学科　学科長　尾藤　祥子

2025年度の作業療法学科新入学学生数は39名となり、定員まで1名が届かずであったが前年度の24名から増加した。在籍学生は151名となる。

1. 学生募集、広報活動について

昨年度同様に、ほぼ専願で定員を満たす必要があり、作業療法士の魅力とともに藍野大学の作業療法学科の魅力を効果的に広報する必要性は高い。

作業療法学科では保育士の国家試験受験を支援する取り組みを開始し、該当学年の2年生が次年度1回目の筆記試験を受験する。筆記試験対策として「保育学入門」を選択授業として設定し、作業療法学科発達領域の担当教員で試験対策に取り組んでいる。（写真1）併行して保育所、子育て広場の見学体験も設定しており保育士とのダブルライセンス取得に対してのサポートを充実させている。（写真2・写真3）



写真1　保育学入門の授業風景





写真2・写真3　子育て広場と保育所での見学体験

独自に作成したリーフレットを持参して大規模な高校訪問を行うと共に、高校ガイダンスについても保育とのダブル

ライセンスの周知を行った。また、作業療法の説明においては「心理」「保育」「支援」「子ども」「学校」といったように高校生の世界観に合わせた言葉に置き換えた。そのことで身近で明るい、未来や希望が想像でき、「人と関わる時間が楽しそう」というイメージを与えた。また AI に取って代わられない職業としてのアピールも行った。

オープンキャンパスにおいては引き続き 4 ブース形式とし、保育・心理・認知スポーツ・運動・子ども・作業などからテーマを選択して実施した。その中では在学生や教員との交流機会を増やし、体験を通して藍野大学作業療法学科の魅力を伝えた。

オープンキャンパスの高校 3 年生の参加者は昨年度よりも延べ 47 名増加している。また、入試では他の中堅大学が更に苦戦するなかで、定員を超えるまでの入学予定者数となった。

今後は、そうして入学した学生が、確実にダブルライセンスを取得し、発達支援の領域で活躍できるようなクオリティの高い学びを提供し、この領域は藍野大学作業療法学科の右に出るものがない、という評判を作り上げていきたい。

2. 社会貢献活動

⑴ 茨木市 CSW 協議会主催の福祉活動交流会

3 年生の学生 40 名で参加した。茨木市の福祉委員や公民館、自治会、相談支援事業所やユースプラザ、地域包括支援センター等の関係機関スタッフ、地区保健福祉センター、市役所関係課の市の職員、茨木市 CSW と、色々な立場の方々が集まる中に学生も参加し、地域でどのようなことが受け継がれてきて、今後どのようにすれば誰もが住みよい街にできるのか考えた。また地域の方との対面での交流を通して「人とのつながり」の大切さ・楽しさを実感でき、非常に良い学びとなった。(写真 4・写真 5)





写真 4・写真 5　福祉活動交流会の様子

⑵ 茨木市食育推進月間イベント

11 月 14 日～15 日に茨木市食育推進月間イベント「食で創るこころとからだ」に作業療法学科で出展した。社会貢献活動としても、作業療法士の職域を知ってもらう啓蒙活動としても、また藍野大学という同じ地域にある大学をよく知ってもらう広報としても有効であった。(写真 6)



写真６　食育推進月間イベントの様子

3. 研究活動について

４名の教員が科学研究費助成を受け、研究に取り組んでいる。その他学科教員研究活動も論文、学会発表と意欲的に行っている。また助手の教員２名が藍野大学の健康科学研究科の修士課程で今年度修了予定である。

また４年生学生３名が教員の指導の下、大阪府作業療法学会で演題発表を行い見事「学生賞」に選ばれた。



写真 7・写真８　大阪府作業療法学会での発表

4. 国家試験対策

国家試験対策プログラムを改訂して３年目となるが国家試験合格率 100%となった。今年度は結果が待たれるところであるが、現在のプログラムに加えてその年度ごとの集団の特性、個々の学生の特性を分析し、調整をしていきたい。また国家試験合格に向けての個別支援対象が増加していることから、低学年からの学習指導も充実させ、国家試験の全員合格を実現していきたい。

2025 年度の臨床工学科の取り組み

臨床工学科　学科長　五十嵐　朗

2025 年度の臨床工学科の取り組みについて，この 1 年間を振り返り報告いたします。

まず教育については，臨床工学技士のタスクシフト／タスクシェアに対応するため，旧カリキュラム履修者である 4 年生および既卒生を対象とした告知研修に参加してもらい，制度変更の趣旨，求められる能力像，学修内容の変更点を共有しました。また，2024 年度に構築した臨床実習体制，早期臨床体験実習（Early exposure）の拡充，学習支援の取り組みを継承しつつ，2025 年度は「基礎力の底上げ」と「国家試験合格に直結する学習習慣の確立」を柱として推進しました。

学習支援を要する学生の把握については，アチーブメントテストの結果に加え，不合格科目数や GPA を指標として学年ごとに対象者を抽出し，主として基礎科目（例：数学・物理，医学系基礎等）の補講を計画的に実施しました。補講は単なる再説明ではなく，演習を中心に到達度を確認しながら段階的に習得レベルを引き上げることを目的とし，学科全体で学修の遅れを早期に把握し是正する体制を強化しました。

国家試験対策については，前年度の合格率低迷を受けて，従来の全体演習・個別指導の枠組みを見直し，学修効果の向上を狙い，理学療法学科で実施されているグループワーク型の学習方法を取り入れました。具体的には，少人数グループを基本とし，学生が主体となって課題に取り組み，グループ内で他者に説明する過程を通して理解を深める形式を重視しました。加えて，欠席が続く学生には個別面談を行い，体調不良等の事情がある場合には，必要な出席要件や学習環境を調整するなど，学修継続を支える支援体制を整えました。

学生募集については，2024 年度にオープンキャンパス参加者増および SNS による到達拡大が得られた一方で，参加者増が出願増に直結しない課題が残ったことを踏まえ，2025 年度は「実践的学びの魅力を一貫した導線で伝えること」を重視し，オープンキャンパスで学科体験・説明を実施しました。具体的には，模擬手術室および実習室を統合したクリニカル・スキル・ラボ（C-Lab）を中核として，手術室から集中治療室（ICU），病棟・透析室へと続く患者治療の流れに沿って，臨床工学技士の役割を理解できる体験型プログラムを整備し，学内実習から外部実践実習へと接続する教育の強みを明確に提示しました。さらに，在校生の学びや成長を具体的に示す発信を組み合わせることで，受験生の理解を深め，進路選択の後押しとなる情報提供を強化しました。

高校訪問については，重点地域を定めて効率的に展開しつつ，説明内容を学科内で統一し，教育の特色（実践力，学修支援，国家試験対策）を一貫して伝える体制を整えました。

臨床工学専攻科については，対象者に応じた情報提供と説明機会の確保を進め，生体医工学関連の研究室がある大学や連携病院看護部等を主な対象として，1 年間で国家資格取得を目指せる点と，医療機器に強い人材の臨床的必要性を具体的に提示し，学生募集活動を展開しました。その結果，工学系学部からの入学予定者につながりました。

2025 年度は，定員充足に向けて，オープンキャンパスにおける C-Lab を中核とした体験型プログラムの整備，在校生の学びや成長を示す情報発信，高校訪問の重点化，ならびに臨床工学専攻科の周知強化等の諸施策を実施したものの，学生募集を取り巻く環境は厳しく，結果として厳しい状況が続きました。2026 年度は，本年度の検証結果を踏まえ，オープンキャンパス参加から出願に至る導線の強化を図るとともに，実践的臨床教育と学修支援・国家試験対策の強みをより分かりやすく伝える取り組みを一層進め，所属教員が一丸となって局面の打開に取り組んでまいります。

藍野大学医療保健学部健康科学科の 2025 年

健康科学科　中井良育

1.　藍野モデルと健康科学科

本学では、医学モデルと社会モデルの視点から共生社会を目指し、誰一人取り残されない社会を実現するための藍野モデル（図 1）を提唱しています。現代社会は、糖尿病や心臓病、高血圧など多く人が何らかの疾患や、気分の落ち込みや不安感など心身の問題を抱えています。そのような人々の中には、健康の不安を解消するために適切な医療を受ける必要がある人もいれば、未病の状態ではあるが、悪くならないための軽い運動などが必要な人もいます。また、大人だけではなく、子ども達においても、スマホやゲームへの依存、遊び場所の不足や運動不足といったことが要因で心身の発達に少なからず影響する可能性のある環境の問題も指摘されています。このように現代社会には、子どもから大人まで健康増進を必要とする人がたくさん存在しています。藍野モデルは、地域医療を支える人材育成を行うとともに、人々の地域生活と健康増進の支援を目的として、「身体づくり」、「心づくり」、「関係づくり」を通じて、子どもから大人まで、誰一人取り残さない地域全体の Well-being に貢献していくこと大学であることを示しています。

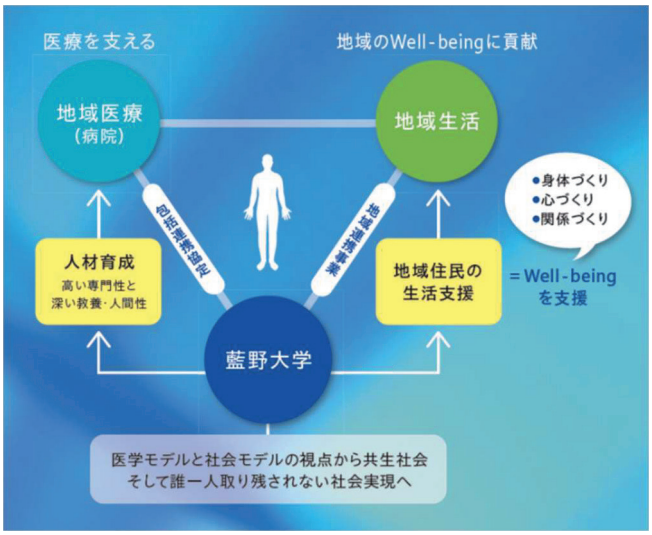


図 1　藍野モデル

人々が心身ともに健康になるには、現在の状態から少しでもプラスの状態をめざすことになります。そのためには、個人または集団を対象に、ニーズを掘り起こし、問題を解決し、また周囲の環境を変えるなど、健康な状態に導く人が必要になります。そこで、本学は 2025 年 4 月に、医療系大学という特徴を生かし、「身体づくり」、「心づくり」、「関係づくり」を通じて人々の健康増進を図り、「地域全体の Well-being に貢献」できる人材を養成することを目的とした健康科学科を新たに開設しました。健康科学科は、医学知識、トレーニング科学、心理学、社会科学を学び、パーソナルトレーナーや社会教育士などを取得し、一般企業、病院、行政などで活躍をめざす学科です。

2.　健康科学科の学び

開設年度である今年度は、11 名の新入生を迎えました。少人数制による実践教育ができるという強みを活かし、医学知識を基盤とした、「身体づくり」に必要なトレーニング科学、「心づくり」に必要な心理学、「関係づくり」に必要な社会科学のかかる基礎科目や専門基礎科目を中心に学びを深めてまいりました。また、2025 年 4 月に完成した学内トレーニングセンター「フィットネス・ラボ」（以下「F-Lab.」という。）に配置された最新のトレーニング機器や計測装置をはじめ、ダンスやピラティスに使えるスタジオを活用した実践授業を開講し、多くの学生が実践的に運動指導方法を修得しています（図 2）。さらに、学外実習・インターンを通じて社会の課題を発見し、問題解決について考え、より深く学ぶ機会も設けています。なお、一年次における各学問領域、学外実習・インターンの学びは以下のとおりです。

(1)　医学

健康増進を必要とする人を支援するうえで医学知識は不可欠です。一年次は解剖生理学Ⅰ・Ⅱ、バイオメカニクス、救急救命学、運動生理学、整形外科学Ⅰ・Ⅱ、公衆衛生学、医学概論、栄養薬理学といった対象者のライフステージに応じたサポートを可能にするための幅広い医学知識にかかる学びを深めました。



図２ F-Lab.を活用した運動指導

(2)　トレーニング科学

レジスタンストレーニング、コンディショニングトレーニングを科学的根拠に基づいて実践するとともに、トレーニングの成果をデータ化して測定・分析できる能力を養います。一年次は主に体力測定論を学びました。

(3)　心理学

対象者のモチベーションを引き出すために、臨床心理学や社会心理学、スポーツ心理学といった心理学科目を学習します。一年次は医療心理学、臨床心理学など、運動指導に欠かせない対象者との信頼関係の構築にもつながる学びを深めました。

(4)　社会科学

身体と心の学びに基づく運動指導のスキルを社会で実装(展開)するために必要な学びです。一年次は社会共生論や社会福祉論といった対象者が属するコミュニティや置かれた環境といった社会的な背景を理解した上での関わりを考察する視点を養いました。

(5)　実習・インターン

多用な実習先での実習を通して、社会で活躍するための素養を身につける実践的な学びを深める科目です。一年次は、健康科学実習Ⅰを履修し、健康に関することを中心とした社会の問題に興味を持ち、各現場で働く人々の専門性がどのようなものであるかを幅広く知るための実習に取り組みました。

3.　地域健康共創拠点「F-Lab.」の地域開放

地域社会に貢献すると同時に、藍野大学の認知度向上を帯同する学生の実践教育を目的に、フィットネス・ラボを活用した取り組みを行いました。具体的な取り組みは以下のとおりです。

(1)　中学校・高等学校部活動の支援

茨木市立の中学校陸上部、京都府内及び滋賀県内高等学校陸上部の部員を対象とした運動機能の測定と評価

(2)　地域住民の健康増進

社会貢献事業の一環として実施している「子育てサロン」や、茨木市在住者の健康寿命延長を目的とした「Aino de まちトレ」におけるトレーニングや運動体験の環境として活用

次年度以降も「身体づくり」「心づくり」「関係づくり」の中心とした学びを深めるための取組みや、地域健康共創拠点としてのF-Lab.の地域開放に取り組み、健康科学科のさらなる発展・向上に努めてまいります。

2025 年度　看護学研究科の取り組みと今後への課題

看護学研究科長　齋藤 祥乃

2025 年度の看護学研究科は、6 名の入学者（うち 1 名は年度途中退学）を迎えてスタートし、在籍院生数は 15 名となった。また、2026 年 3 月には本年度修了生 9 名を送り出す予定である。

本研究科は、高度な専門性を備えた医療職養成に対する関連病院および医療・福祉施設からの強い期待を背景に、変化の激しい社会的要請に応えつつ、研究的思考能力を有する高度専門職としての看護職育成を目的として 2015 年に設置された。本年で設置 11 年目を迎え、教育・研究体制のさらなる充実を図っている。

そのような中、2025 年度より教職課程（養護教諭）専修免許課程の認可を取得した。これにより、本学看護学科卒業生に対する養護教諭養成の一層の充実を図るとともに、既に養護教諭免許を有する者に対しても、より高度な専門知識および実践的能力の向上に寄与する教育を推進していく。さらに新たな取り組みとして、近年、妊婦の高齢化、合併症妊娠の増加、不妊治療の普及などを背景に、妊娠・出産を取り巻く医療的リスクは年々高まっている。このような産科医療の高度化に伴い、専門的知識と高度な臨床判断能力を備えた助産師の養成が社会的に強く求められている。そこで、本研究科では、単なる資格取得にとどまらず、「医療の質の向上」「地域医療への貢献」「女性支援の充実」「看護職のキャリア多様化」といった現代社会の多様なニーズに応えることを目的として助産師課程の設置を計画し、認可申請を行った。その結果、2026 年度より課程設置の認可を得ることができ、助産学領域第 1 期生として 4 名の入学を予定している。

看護学研究科は設置から 10 年が経過し、現在は発展的充実を目指す第 2 ステージの段階に入っている。近年、看護学大学院を取り巻く状況として、全国的に進学動機の低下、臨床現場における人材不足、学費負担の問題などが重なり、入学者確保は多くの研究科に共通する課題となっている。このような状況に対応するためには、広報活動の充実のみならず、「進学するメリットの可視化」「社会人が進学しやすい制度設計」「臨床現場を巻き込んだ人材育成体制の構築」といった多面的な戦略が重要である。本研究科ではこれまでに、夜間・土曜開講、ハイブリッド授業、集中講義化、3 年間の長期履修制度の導入、ならびに自動車通学の許可など、社会人学生が学びやすい環境整備を進めてきた。一方で、多くの看護師においては「修士課程へ進学する意義が十分に理解されていない」という課題も指摘されている。今後は従来の研究志向型の学生募集に加え、キャリア形成支援を重視した「キャリア開発型大学院」への方向性を模索し、「キャリアを発展させたい」と考える看護職を支援する教育体制の強化が求められる。さらに、入学者確保に向けては臨床現場との連携強化が最重要課題である。特に実習病院との連携を基盤とし、「個人の自己研鑽としての進学」から「組織的な人材育成としての大学院進学」へと認識を転換するための働きかけを一層推進していく必要がある。また、内部進学の促進も重要な取り組みである。今年度の修了生には、初めて学部からの内部進学者が 1 名含まれており、さらに次年度開設予定の助産師課程においても 2 名の内部進学者を予定している。今後は学部教育との接続を強化し、内部進学者の継続的な確保に向けた取り組みを推進していく。

大学院教育のさらなる発展に向けて、本研究科では修士論文成果の社会的発信、すなわち学会発表および専門誌への論文投稿を重要な教育目標として位置づけている。今年度は、日本災害看護学会第 27 回年次大会、日本看護科学学会第 45 回学術集会、日本透析医学会第 70 回学術集会・総会、ならびに Japanese Society for Bacteriology The 98th Annual Meeting において研究発表が行われた。今後は、修了生がこれらの研究成果を基盤として継続的に研究活動を発展させ、学術的知見の蓄積および看護実践への還元につなげていくことを期待している。

2025 年度の健康科学研究科の取り組み

健康科学研究科長　酒井 浩

2024 年 4 月，念願であった健康科学研究科が開設となった。「認知健康科学領域」と「身体健康科学領域」の 2 領域から構成され，10 名の特別研究指導教員が 1 学年 6 名の定員に対して修士課程の指導を行う体制を構築し、2 年間が終了した。本研究科は，国の重点施策である健康増進を総合的かつ多角的に捉える知識・技能・態度を身につけ、健康づくり・生涯スポーツの実践と継続を推進していける人材を養成することが健康科学研究科設置の主な目的となり，そのために必要な基本的、応用的知識を身に着け，地域の場において実践していける基盤を学ぶことができるよう設計されている。

その初年度となる 2024 年度の入学者数は 6 名（認知健康科学領域 3 名，身体健康科学領域 3 名）であり，２つの専門領域でバランスの良い配置となった。翌年の 2025 年度入学者は認知健康科学領域が 6 名、身体健康科学領域が 3 名の 9 名であり、2 年間の定員 12 名に対して 15 名が在籍するという大所帯となった。

2026 年度には，身体健康科学領域において特別研究指導教員を 2 名増員，認知健康科学領域については特別研究指導教員を 3 名増員することとなり，これまでよりも幅広い研究指導領域に対応できることが期待される。

【2026 年度　指導および指導補助教員】

（認知健康科学領域）

酒井　浩（領域代表），安藤　卓，五十嵐　朗，宮本年也，岩村真樹，宮本陳敏，高畑脩平，林部美紀，林　拓世

（身体健康科学領域）

栗原秀樹（領域代表），後藤昌弘，寺田　茂，山科吉弘，森田恵美子，田中貴広，大和洋輔，青山宏樹

また，2026 年度入試においては，医療系国家資格有資格者でなくとも入学することが可能となり，医療保健学部健康科学科を卒業する学生のみならず，多様な方々を受け入れることになる。

このことで，さらに幅広い人材育成を行うことができ，健康増進・健康寿命延伸に向けた多様な人材の輩出，多様な研究成果の蓄積をもって社会における役割を果たしていくことが望まれる。

【2025 年度　活動実績】

（広報活動）近畿作業療法学会において大学院ブース出展
奈良県作業療法学会にて大学院セミナー開講
オンラインでの大学院分野説明会開催

（教務実績）2025 年 9 月 18 日　中間報告会開催　　14 名が中間報告を行った
2026 年 2 月 17 日　修士論文発表会開催　4 名が修士論文発表を行った

藍野大学　中央研究施設

藍野大学中央研究施設　施設長　栗原秀剛

人的構成

構成員	氏名
施設長	栗原秀剛（副学長、健康科学科、特任教授）
学内研究員	山田義博（理学療法学科　教授） 田浦晶子（臨床工学科　教授） 稲盛修二（臨床工学科　教授） 山崎康祥（臨床工学科　准教授） 林拓世　（臨床工学科　講師） 山本祐輔（臨床工学科　助教） 宮本陳敏（作業療法学科　准教授） 塚越千尋（作業療法学科　准教授）⇒2025 年 3 月末まで 林部美紀（作業療法学科　准教授） 横山雛子（看護学科　助手） 三木志帆（実験補助技術員） 藍野大学の学生：臨床工学科 10 名
客員研究員	井出千束（中央研究施設客員研究員） 山田久夫（中央研究施設客員研究員） 中野法彦（びわこリハビリテーション専門職大学　教授） 兼清健志（びわこリハビリテーション専門職大学　教授） 玉地雅浩（中央研究施設客員研究員）

研究活動

中央研究施設は、藍野大学を中心にびわこリハビリテーション専門職大学を含む学校法人藍野大学全体の研究活動を推進・発展させる拠点として活動している。藍野大学中央研究施設は医学部を除いた医療系大学では珍しく電子顕微鏡など大型の機器が充実しているのが特徴である。開設から経年劣化が進む設備について継続的な使用を可能とするためのインフラ整備を行っている。本年度は開設当時から使用している電子顕微鏡が駆動用コンピューターの故障のため使用不能となり、コンピューター部分の修理により、使用可能となった。電子顕微鏡は極めて高価な機器であり、今後も大切に使用していく。大学全体の研究活動の拠点として中央研を明確に位置づけるため、学内教員、客員研究員との共同研究はもとより、学部学生の卒業研究指導等を積極的に行った。

(1)共同研究施設としての体制の整備と機能の推進

中央研究施設は、大学で唯一の実験研究施設として本学並びに関連施設の教員・医師および学部学生に実験の場と研究機器を提供し、優れた研究成果を生み出すことを目的として活動している。また、共同研究を推進しており、学会や国際雑誌も含めた論文発表、科研費も含めた競争的資金の獲得、産学連携も含めた外部資金の導入、特許取得などの成果をあげている。

(2)研究施設独自の研究の推進

研究に関する今後の展望としては、臨床に直結したトランスレーショナルリサーチを推進し、国内のみならずグローバルに通用する最先端の研究を実践している。

主な研究内容

(1)オルガノイドを用いた内耳再生に関する研究
(2)Lmo2 転写因子複合体による血管新生制御
(3)腎臓に発現する新規分子の解析
(4)脊髄損傷モデルラット、マウスを用いた神経再生治療法の確立

「2024 年度　中央研究施設シンポジウム」 開催

日時:2025 年 3 月 3 日
場所:MLC　F201 アクティブコモンズ

2022 年度より設けられた「優秀研究賞」「研究奨励費」の採択者、および科研費新規獲得者を中心に 8 名が講演を行った。学長、学部長も出席され、ご挨拶をいただいた。長時間に渡り行われたが、総勢 22 名の来場者があり、質疑応答が行われた。

榎井 縁	科研費	往還するネパール人:家族の生存戦略と教育課題
山科 吉弘	優秀研究賞	水中歩行が高齢者の呼吸筋力に与える影響とその持続効果
高畑 脩平	優秀研究賞	教育現場における書字困難児の困難度に影響を与える包括的評価指標の探索
岩佐 美香	優秀研究賞	「Examining the Effectiveness of Using Disaster Scenarios in Health Care Education ―看護学生の災害時の避難所での健康管理―」
杉山 芳生	科研費	初年次教育科目「学びの基盤」における教育実践研究
郡 慎平	優秀研究賞	送・脱血流量が静脈リザーバ内薬液濃度変化に与える影響
兼清 健志	科研費	新規足場材料 LASCol による脊髄神経再生効果
中田 裕二	研究奨励費	薬剤耐性菌の分子疫学的手法による年次推移解析

研究成果　（抜粋）

論文

・Koike T, Oe S, Hirahara Y, Hayashi S, Seki-Omura R, Nakano Y, Sato Y, Iwashita H, Maeda M, Kataoka Y, Tanaka S, Mori T, Yamada H, Kitada M. Morphological Characterization of Glial Cells Surrounding Cajal's Initial Glomerulus of the Dorsal Root Ganglion Neurons Revealed Myelinating Schwann Cell Production. Glia 73(9):1883-1898, 2025

・Kurebayashi S, Aoki R, Yamada H. An Investigation of the Angular Velocity of Finger Joints during origami. Proceedings of International Conference on Technology Education (ICTE) p87-p96, 2025

・Tanabe A, Harachi K, Yamamoto Y, Muramatsu A, Nagahara H, Takemura N, Shimojo S, Furihata D, Mizuno -Matsumoto Y.　Brain Function Assessment of EEG in Mild Cognitive Impairment using Timelag Analysis. IEEJ Transactions on Electronics, Information and Systems 145(4) 467-473 2025

・Ohgita H,　Taura A, Nishimura K,　Development of the New Rotarod Treadmill Test of Guinea Pigs. AINO JURNAL: Vol.22:49-52 2025

・本田浩也、兼清健志、寺井淳、丸山泰弘「専門職大学・理学療法学科学生における国家試験の得点と科目成績および学修行動の関連性の検証」びわこ健康科学科 4 巻 p. 9-16 2025 年

・田邉晃史, 原地絢斗, 山本祐輔, 村松歩, 長原一, 武村紀子, 下條真司, 降簱大介, 水野(松本)由子. 軽度認知障害における脳波の timelag 解析による脳機能評価　電気学会論文誌 C 145(4) 467-473 2025 年 4 月

・坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 奥谷研, 平上尚吾, 水野(松本)由子. ヘッドマウントディスプレイを使用した運動イメージ時の脳波の機能的結合性の評価　作業療法 44(5) 504-512 2025 年 10 月

・坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 奥谷研, 平上尚吾, 水野(松本)由子. 心電図および光電式指尖容積脈波を用いた Virtual Reality 環境下における運動模倣が自律神経活動に与える影響の評価　日本バーチャルリアリティ学会論文誌 2 163-172　2025 年 6 月

・宮本陳敏, 尾藤祥子, 徐磊, 楊文貴, 酒井浩. 中国成都市におけるリハビリテーション学術交流 藍野大学紀要, (37),59-6 2025

学会発表等

・An Investigation of the Angular Velocity of Finger Joints during origami
Kurebayashi S. Aoki R, Yamada H.　Proceedings of International Conference on Technology Education (ICTE) 深圳(Shenzhen City Polytechnic, China) 2025.12.10-2

・Taura A. [The Challenge of Inner Ear Regeneration]　“Possible application of regenerative medicine to vestibular disorders”　52nd Congress of the international Neurootological & Equilibriometric Society KAWAGOE, JAPAN　2025.8. 27-29

・Matsumoto A, Kishino K, Tamachi M. and Wesugi S. Design of a Rigidity-adjustable Tensegrity Structure to Develop an Exoskeleton that Supports Knee Joint Stability and Mobility in Gait. (Best Student Paper Award) ICDES 2025: The 6th International Conference on Design Engineering and Science, 2025.8.

・Wakuda T, Iizuka S, Tamachi M　and Wesugi S. Development of a Cover-Type Tensegrity Structure Considering Connectivity Through Tension With the Upper Limb ICDES 2025: The 6th International Conference on Design Engineering and Science, 2025.8.

・田浦晶子、扇田秀章、大森孝一 、伊藤壽一 Lyl1 過剰発現マウス蝸牛の血管構造と低酸素応答についての検討 2 第 126 回 日本耳鼻咽喉科・頭頸部外科学会総会、横浜、2025.5.28.
・田浦晶子(座長) 第 2 群 臨床研修医・学生セッション 2 第 87 回耳鼻咽喉科臨床学会, 奈良, 2025.6.26
・田浦晶子、吉川弥生、扇田秀章、大森孝一 、伊藤壽一 前庭血管ペリサイトについての検討 第 84 回日本めまい平衡医学会, 横浜, 2025.11.28.
・扇田秀章、田浦晶子、伊藤壽一、 モルモット前庭障害モデルに対する内耳オルガノイド移植 ― 自作ロータロッド装置を用いた前庭機能評価 第 84 回日本めまい平衡医学会, 横浜, 2025.11.28.
・田浦晶子(座長) シンポジウム 1「医工学との接点」第 84 回日本めまい平衡医学会, 横浜, 2025.11.28.
・玉地雅浩 カンファレンスや会議におけるコミュニケーションのあり方を再考する －各専門職それぞれが、他職種の専門性に関心を寄せながらのやり取りを目指して－ 第 44 回日本医学哲学・倫理学会、神奈川大学, 横浜 2025.9.13
・玉地雅浩(座長) 2-10 神経筋疾患歩行(ポスター)第 23 回日本神経理学療法学会学術大会、石川県立音楽堂/ANA クラウンプラザホテル金沢, 2025.11.1
・坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 田邉晃史, 小林隆司, 水野(松本)由子 作業療法介入による課題遂行時における心理状態および脳波変化の評価 第 47 回 Fmθ 研究会, 2025.3.22
・坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 田邉晃史, 平上尚吾, 奥谷研, 水野(松本)由子 脳波の機械学習を用いた映像デバイスの違いによる運動イメージ内容の判別の比較 第 55 回日本臨床神経生理学会学術大会, 2025.11

著書
・田浦晶子、平衡機能検査:耳鼻咽喉科・頭頸部外科レジデントマニュアル 第 2 版
監修:伊藤 壽一 / 大森 孝一 編集:楯谷 一郎/東京/医学書院/2025 年/73-82 頁
・田浦晶子、固視抑制検査:「イラスト」めまいの検査
日本めまい平衡医学会: 東京/診断と治療社/2025 年/54-55 頁

中央研究施設管理運営委員会

構成(令和 7 年度)
栗原秀剛、中田裕二、山田義博、宮崎浩、田浦晶子、宮本陳敏

令和 7 年度 委員会開催日

	開催日	審議事項
第 1 回中央研究施設管理運営委員会	2025 年 5 月 13 日～5 月 16 日	・藍野大学中央研究施設細則の別紙1(第3条関係)「藍野大学中央研究施設 利用登録申請書」の書式変更について
第 2 回中央研究施設管理運営委員会	2025 年 11 月 25 日～12 月 5 日	・2026 年度(令和 8 年)中央研究施設の予算案について

動物実験部会

構成(令和 7 年度)
栗原秀剛、中田裕二、山田義博、田浦晶子、林部美紀、兼清健志

令和 7 年度部会開催日

	開催日	審議事項
第 1 回動物実験部会	2025 年　5月 13 日	2024 年度動物実験結果報告書および自己点検票について（13 件）【報告事項】
第 2 回動物実験部会	2025 年 11 月 26 日～12 月 1 日	新たに提出された「動物実験計画書」について（1 件）

2025 年度　承認された研究課題（全 12 件）

承認日	研究課題名	実験責任者	備考
2025 年 3 月 25 日	脊髄損傷モデルラット、マウスを用いた神経再生治療法の開発	兼清健志	更新
2025 年 3 月 25 日	腎臓に発現する新規分子の解析	栗原秀剛	更新
2025 年 3 月 25 日	生化学的解析による脊損度別機能的電気刺激の神経再生促進のリハビリプロトコル策定	宮本陳敏	更新
2025 年 3 月 25 日	終糸上衣細胞の培養方法の確立と移植効果の検討	井出 千束	更新
2025 年 3 月 25 日	内耳再生に関する研究	田浦晶子	更新
2025 年 3 月 25 日	骨髄間質細胞をはじめとする体性幹細胞由来の神経突起伸長因子の解析	中野法彦	更新
2025 年 3 月 25 日	Lmo2 転写因子複合体による血管新生制御	山田義博	更新
2025 年 3 月 25 日	ラット体外循環での長期生存モデルの確立と体外循環での炎症反応抑制に向けた検証	山崎康祥	更新
2025 年 3 月 25 日	体外循環・補助循環における生理的拍動流発生装置の開発および拍動効果の検証	稲盛修二	更新

2025 年 3 月 25 日	スタチンによる耳石硬化療法についての検討	田浦晶子	更新
2025 年 3 月 25 日	多チャンネル生体信号測定によるマルチモーダル感覚情報処理機構の評価	林拓世	新規
2025 年 3 月 25 日	Lmo2 転写因子複合体による頭頸部の血管新生制御に関する研究	田浦晶子	更新

動物使用数（2024 年度実験報告書による）

年度	ラット	マウス	合計
2024 年	57 匹	125 匹	182 匹

動物実験講習会の開催

第 36 回 動物実験講習会
開講日:2025 年 2 月 17 日
参加者:18 名（教員 15 名）
第 37 回 動物実験講習会
開催日:2025 年 12 月 8 日
参加者:6 名（学生 6 名）

実験動物慰霊祭の挙行

昨年に引き続いて実験動物慰霊祭を挙行した。
挙行日:2025 年 11 月 5 日
出席者:佐々木惠雲学長、栗原秀剛施設長、山田義博教授、稲盛修二教授、林拓世講師、山本祐輔講師、山田久夫客員研究員、林部美紀准教授、横山雛子助手、三木志帆実験補助員、臨床工学科 4 回生 8 名

一、　開式の辞
一、　学長挨拶　藍野大学 学長 佐々木惠雲
一、　学長による読経
一、　黙祷
一、　慰霊のことば　藍野大学中央研究施設長 栗原秀剛
一、　献花
一、　閉会の辞



2025年度のキャリア開発・研究センターの取り組み

キャリア開発・研究センター長　中野玲子

当センターは、多様な学生の就職支援を行うとともに、卒業後の生涯を通じた持続的な就業力向上を目指し、社会的・職業的自立に向けた指導などを通して、その充実及び高度化に資することを目的に創設された藍野大学内に位置する組織である。

以下に、今年度の医療従事者のキャリアアップ支援および広報活動の取り組みと今後の展望についてまとめた。

1. 医療従事者のキャリアアップ支援

研修名（時間）	日程	参加状況	講師・研修内容など
2024年度ファーストレベルフォローアップ研修	6/28（土）	修了者55名 参加者37名	新潟薬科大学看護学部教授　平山惠美子先生「看護倫理事例」
スキルアップ研修	6/21（土）	①　午前88名 ②　午後100名	①　京都大学大学院医学研究科教授 任和子先生 「どう書く？小論文レポート」 ②　美杉会グループ顧問兼看護部看護教育部長　高須久美子先生 「フレームワークをどう使う？」
セカンドレベル研修（180h）	7/3～9/20（木金土）	募集定員35名 応募者　36名 受講者36名	「ヘルスケアシステム論Ⅱ」15h、「組織管理論Ⅱ」30h、「人材管理Ⅱ」45h、「資源管理Ⅱ」15h、「質管理Ⅱ」30h、「統合演習Ⅱ」45h
退院支援研修	9/27（土）	参加者43名	在宅ケア移行支援研究所宇都宮宏子オフィス代表　宇都宮宏子先生 退院支援研修「この町で‘暮らす’そして‘生ききる’を実現するために」
認定理学療法士臨床認定カリキュラム	10/4: オンライン 5コマ 10/5～ 11/28 オンデマンド10コマ 11/30:対面講義5コマ	募集定員40名 受講者21名	必須科目15コマ・選択科目5コマ 対面講義 ①「姿勢・歩行の評価・分析と理学療法」藍野大学　田中貴広先生 ②「肩関節疾患の機能解剖と理学療法」藍野大学　熊田仁先生 ③「膝関節疾患の機能解剖と理学療法」三重大学医学部附属病院　久保峰鳴先生 ④「股関節疾患の機能解剖と理学療法」京都大学　建内宏重先生 ⑤「脊柱疾患の機能解剖と理学療法」 堺若葉会病院　増井健二先生

2024 年度セカンドレベルフォローアップ研修	10/11（土）	修了者 29 名 参加者 17 名	キャリアセンター専任教員　小砂見先生 「看護管理実践報告会」
卒業生対象セミナー	10/18（土）	あいの祭にて 参加者 13 名	看護学部看護学科　西上あゆみ先生 「災害に向けた医療職の備え」
ファーストレベル研修（105h）	10/31～ 12/21 （木金土）	募集定員 50 名 応募者 68 名 受講者 54 名	「ヘルスケアシステム論Ⅰ」15h、「組織管理論Ⅰ」15h、「人材管理Ⅰ」30h、「資源管理Ⅰ」15h、「質管理Ⅰ」15h、「統合演習Ⅰ」15h

＜スキルアップ研修＞



＜認定理学療法士臨床認定カリキュラム対面講義＞



2. キャリアセンターの広報活動

1）セカンドレベル研修受講生募集

セカンドレベル研修定員 35 名確保のため、一昨年近畿圏内 13 施設（大阪府 8 施設、京都府 1 施設、兵庫県 1 施設）訪問し、36 名の応募があった。次年度の受講生確保のため、同様に施設訪問を計画している。また、ファーストレベル研修修了者 345 名及び、近畿圏内の病院・訪問看護施設 1,208 施設へリーフレットを送付した。

2）認定理学療法士臨床認定カリキュラム受講生募集

近畿圏の病院 1,022 施設及び理学療法学科卒業生 537 名に広報資料を送付した。

3）大学院への進学者確保のためのファーストおよびセカンドレベル研修受講生への説明

4）藍野大学校友会との連携強化によるスキルアップ研修などの広報

3. キャリアセンターの今後の展望

当センターでは、質の高い組織的看護サービスの提供を目指す看護管理者育成の支援事業として、2014 年度から認定看護管理者教育課程のファーストレベル研修を実施、また 2017 年度からセカンドレベル研修も実施しており、大阪府の他、広く近畿圏内の施設の看護職が受講している。研修環境の整備、教育訓練給付制度の活用および広報活動などの取り組みを継続し、今年度セカンドレベル研修受講生が 36 名となり、開設以降初めて募集定員 35 名を充足した。しかし、現在の認定看護管理者教育制度は 2029 年度から新研修制度に変更予定であり、今後の事業計画の見直しが必要な状況である。新研修制度への移行期の対応については、大阪府看護協会と連携し情報収集を行いながら検討を進めていく。現行の研修実施に関しては、従来の広報活動を継続し、受講定員確保に努めていく。

2024 年度、認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器）を開講し、理学療法士の専門的かつ高度な実践力習得の支援に取り組んだ。初年度は、募集定員 40 名であったが、受講者は 11 名と少なかった。2 年目の今年度は、日程や研修方法をオンライン型講義（5 コマ 1 日）、オンデマンド型講義（10 コマ 55 日間配信）および対面講義（5 コマ 1 日）に変更し、受講者が 21 名に増加した。次年度の定員充足に向け、広報や研修方法など検討を進めていく。

また、人口減少や高齢化率のさらなる上昇により医療介護分野での多様な課題を抱えている現状において、高齢者看護領域の専門性の強化が求められおり、当センターの新規事業として 2027 年 4 月に認知症看護認定看護師教育課程開設を計画し教育機関としての申請準備を始めている。

今後も、本法人のネットワークを生かし、地域医療の質向上に貢献できる人材の育成に取り組み、新たな事業展開を通して地域社会に貢献したいと考えている。

2026 年度に向けた新体制整備に関する取り組み報告

大阪茨木キャンパス事務局
事務局長　小林 正明

１．改正私立学校法施行に伴う新体制の発足

2025 年度より改正私立学校法が施行され、本法人は 6 月末から理事 5 名・評議員 6 名・監事 2 名に加え、新たに会計監査人を置く体制へ移行した。

今回の改正は、「幅広い関係者の意見反映」「逸脱した業務執行の防止」を目的とし、役員等の資格・選任・解任手続、理事会・評議員会の職務・運営、特別背任等の罰則強化など、学校法人の管理運営制度を大きく見直すものである。

新体制の特徴として、大学・短期大学・高等学校の学長・校長が役員等に選任されていない点が旧体制からの大きな変更点である。そのため、役員等と学長・校長との意見交換・情報共有の重要性が一層高まっているが、現状では合同運営委員会での報告等に留まり、より踏み込んだ体制整備には至っていない。今後は常任理事会等の活用を通じ、安定した法人運営に向けた意見交換の充実を図る。

また、同法改正に伴い内部統制システムの整備が求められ、理事会にて基本方針を決定したうえで内部統制委員会を設置した。委員会では、４つの目的と６つの基本的要素に基づき、システムと運営の齟齬の有無を確認し、改善を進めていく。

２．2024 年度決算と財務状況の分析

2024 年度決算において、日本私立学校振興・共済事業団の定量的経営判断指標による区分は「A3」を維持した。しかし、経常収支差額は 2021 年度以降黒字を維持してきたものの、2024 年度は▲128 百万円の赤字となった。負債率も 25.6%と、注意が必要とされる 25%を上回った。主な要因（単年度特別支出を含め）は以下の通りである。

〇藍野大学 20 周年事業
〇大阪阿倍野キャンパス整備（2 期工事）に伴う短期大学部移転統合費用
〇借入金返済および大規模投資に伴う減価償却費の増加
〇在籍者数は全体として増加したが、学納金の高い大学・短期大学部で減少し、中等教育機関で増加した結果、学生納付金収入が減少

これらを踏まえ、2025 年度予算では 2 期連続赤字を回避するため、第一次・第二次補正予算で各 1 億円、計 2 億円の削減を実施した。その結果、今年度決算見込みは数千万円の黒字となる見通しである。

ただし、2025 年度中間決算においても、大学・短期大学部の在籍者減少と中等教育機関の増加という構造は継続しており、入学定員充足率の低下や退学者増加が顕著である。これは全国的な傾向が本法人にも強く現れてきている状況といえる。

３．2026 年度在籍者数見込みと課題

2026 年度の収容定員充足率予測は、最大 100.2%、最小 94.9%である。特に最小値は、今年度 10 月 1 日時点の充足率 94.9%（退学者 51 名）と同水準であり、厳しい状況が続く見込みである。これまで退学者・休学者対策には精力的に取り組んできたが、さらなる強化が必要となる。

４．内部監査で指摘された課題と今後の方向性

令和７年度中間内部監査では、法人全体における定員未充足の要因として「受験者数減少」だけでなく、「退学者の増加」への分析と対策が必要であるとの指摘があった。

また、法人経営改善策として、学部・学科・学校単位での「やめる・まとめる・わける」といった外科的措置の検討段階に入っているとの意見が示され、法人として危機意識を持つ必要性が強調された。これを受け、収容定員未充足の学部・学科については、改善策と今後の在り方を検討していく。

５．明浄学院高等学校との高大接続強化と募集戦略

学生募集対策として、明浄学院高等学校との教育課程の連続による一貫教育を軸とした高大接続の強化が重要となる。大阪府下の私立高等学校は、授業料無償化制度の影響により人気が上昇し、公立：私立の比率は従来の７：３から６：４へと変化している。

明浄学院高等学校はこの恩恵を受け、昨年度まで普通科単独では定員 200 名を確保できなかったが、今年度は衛生看護科とともに両学科で定員超過の見通しである。

大阪府下、全ての私学が恩恵を受けることが出来ている訳ではなく、令和７年度入学者は府内 94 校のうち定員超過は 49 校に留まり、半数は定員割れである。また、令和８年度入学試験実績において、明浄学院高等学校は専願 353 名（定員 320 名）と、92 校中 35 校のみが達成している「専願での定員超過」を実現しており、安定した募集ができている。今後も「勝ち組」としての地位を維持するためには、

〇退学者の減少（今年度１月時点で 20 名）
〇基礎学力向上のためのカリキュラム・教授法強化
〇4 年制大学進学へのシフト
〇高校生活の充実による満足度向上
が不可欠である。

一方で、藍野大学との偏差値帯の乖離が高大接続の課題であり、まずは明浄学院高等学校の偏差値向上が必要となる。現在は短期大学部３年課程との単位接続による一貫教育を先行して検討している。

また、大学・短期大学部の定員が厳しい学科については、高等学校段階からの協力体制を強化し、中学生・保護者・中学校教員へのアプローチを進めることで、大学等のブランド向上にも寄与する。

６．2026 年度の組織再編と事務組織改革

2026 年度より、各設置校の学長・校長が刷新され、新たな執行部による学校運営が始まる。また、法人事務所の所在地が大阪府茨木市から大阪市阿倍野区へ変更されることに伴い、現法人事務局を解体し法人本部として再編し、多くの事務職員が各設置校へ配属される。

前任の垣尾局長が進めた「業務の標準化」「業務の省力化」を基盤とした本部構想を実現させる。新たな体制で法人本部と設置校が横断的に連携する戦略プロジェクトを推進し、事務職員の高度化・多様化に対応できる専門知識を備えたゼネラリスト育成を目指すと共にセクト主義にとらわれない事務組織改革を進めていく。

本年の中央図書館の活動

藍野大学中央図書館長　山田義博

本年も中央図書館は限られた予算のなかではあるが、活発なそして地道な活動を続けてきた。年報に述べるのを許していただければ図書館員や関係者一同の多大な努力に感謝したい。本年の第一目標はこれまで通りに円滑に図書館業務が行えることでありそれはおおむね達成された。設備の更新については、とくに喫緊の課題であるものは、3 年計画の初年になされたので、本年はメインテナンスに心掛けた。図書館の広報活動は現在も活発で、移動図書館ではなかなか足を止めてくれる学生は少ないものの、図書館の存在を周知するために大きな貢献をしている。地域への貢献も限られてはいるが、例年どおりに行われ、地元の中学生への職業体験学習や夏場の学習の場ともなっている。データベースの活用についても図書館の教育活動は充実している。全国の大学図書館が、本当に多額の資金を学術雑誌社等のデータベース利用に支払わねばならない時代で、本学のような比較的規模の小さい大学の対応は限られてしまうが、教員の研究活動のサポートは積極的に行われている。Aino Journal や紀要の編集に加えて年報の編集も図書館で行っている。編集作業はそれなりに大変なものだが、充実した編集が維持されている。短大移転にともない活気が失われるのが心配されたが、1 階のスペースの昼食時の解放、大学関係の授業が戻ってきたこともあってかつての図書館の素晴らしい雰囲気が戻ってきた。照明等の改善がなされたらさらに明るい雰囲気が醸し出されると思われ、この点は今後に期待したい。図書館にどこまで娯楽性を取り入れるかは永遠の課題で、現館長も娯楽施設としての図書館には限定的にしか賛成できない。しかし、学生、教員にとって図書館がもっと身近な存在であるという必要性は痛感しており、さらに努力を続けていきたい。図書館の講義室は、近年短大の授業で主に利用してきたが、この冬は大学の国家試験対策や再生医療入門の授業としても使用した。久しぶりにきわめて一生懸命に、ひとことも聞き漏らさないように講義を聴く本学学生の姿に接し、日ごろは一人で研究室に閉じこもりがちの私もつかの間の幸せを味わえた。やはり図書合同教室が一番好きである。

（令和 8 年 1 月 20 日）

新施設「フィットネス・ラボ」完成記念イベント

日時：2025（令和 7）年 5 月 25 日（日）14:00～

（於　藍野大学　藍野ホール・フィットネスラボ）

2025 年度、藍野大学に新学科「健康科学科」が新設され、新施設「フィットネス・ラボ」の完成記念イベントとしてゲストになかやまきんに君を招いて、オープニングセレモニーおよびトークショーを行った。中高生や保護者等約 300 人が集まりイベントは大いに盛り上がった。

【当日の模様】









2025 年度の出来事

2025 年の FD・SD 推進活動

FD・SD 推進部会長　田中　貴広

1. 2025 年 FD・SD 推進活動の概要

2025 年の FD・SD 推進活動では、各委員会・部会の代表者より寄せられた「教育および大学運営に関わる諸課題について、FD・SD 研修を通じて共通理解を形成し、課題解決につなげたい」という要望を踏まえ、研修内容の企画を行った。

その結果、FD・SD 部会単独主催にとどまらず、ハラスメント防止部会、入学試験・学生募集委員会、研究倫理部会等と共催する形で研修を実施し、教育・研究・学生支援・大学運営に関わる多様な課題を横断的に扱う FD・SD 研修を展開した。

2025 年は、単なる知識提供型の研修ではなく、各委員会・部会が直面する具体的課題を起点とした「課題解決型 FD・SD」を志向した点が大きな特徴であった。

2. 2025 年に実施した主な FD・SD 研修

1）高等教育と生成 AI：医療分野における活用事例【FD・SD 部会主催】

講師：桜美林大学　准教授　田中　一孝　先生

生成 AI の教育利用について、禁止・容認の二分論に陥るのではなく、高等教育における適切な活用の視点や留意点を学ぶことを目的とした。医療系教育における具体的事例を通して、各学科・科目における生成 AI との向き合い方を検討する機会となった。

2）ハラスメント防止研修【ハラスメント防止部会・FD・SD 部会　共催】

講師：藍野大学　理学療法学科　教授　榎井　縁　先生

ハラスメントを個人の問題ではなく、人権および組織文化の課題として捉え直すことを目的　に実施した。無意識のバイアスや社会構造に着目した講演を通じて、教職員一人ひとりの意識改革と、組織としての予防体制の重要性を共有した。

3）高校訪問・オープンキャンパスの見直しポイント【入試・学生募集委員会、FD・SD 部会共催】

講師：株式会社　進研アド　新井　千晶　氏

高校訪問やオープンキャンパスを、個人の経験や工夫に依存するのではなく、組織的な募集　戦略として再構築することを目的とした研修である。教職員間で募集活動に対する共通理解を図り、今後の改善につなげる契機となった。

4）研究倫理コンプライアンス研修 【研究倫理部会、FD・SD 部会共催】

講師：京都大学医学部附属病院　臨床研究・研修部門　倫理支援部　森　拓也　先生

競争的研究資金の適正な申請・運用と、研究倫理・コンプライアンスの重要性を改めて確認　することを目的とした。科研費制度の理解と研究倫理教育を一体的に実施することで、研究者としての責任と信頼性について再認識する機会となった。

5）藍野大学 2030 年までの中期学長ビジョンについて【FD・SD 部会主催】

講師：藍野大学　佐々木　惠雲　学長

本学の Mission・Vision・Value を教職員間で共有し、2030 年に向けた中期的な方向性を理解　　することを目的に実施した。これまで十分に共有されてこなかった学長ビジョンを SD 研修の場で扱うことで、教職員それぞれが自身の役割と今後の行動を考える契機となった。

6）研究力アップデート研修（Ⅰ）

「無意識の落とし穴～教育・研究におけるバイアスの実際～」【FD・SD 部会主催】

講師：藍野大学短期大学部　足利　学　学長

本研修を通じて、研究や教育の過程において無意識のバイアスが生じ得ることを体系的に理解する機会となった。研究計画、評価、データ解釈の各段階で公正性と透明性を意識する重要性が共有され、教職員が自身の研究姿勢や学生指導の在り方を見直す契機となった。これにより、研究倫理意識の向上と研究の信頼性確保につながる FD 研修となった。

7）研究力アップデート研修（Ⅱ）

「文献レビューとレビュー論文作成のノウハウ」【FD・SD 部会主催】

講師：大阪公立大学　医学部 リハビリテーション学科　作業療法学専攻　准教授　田中　寛之　先生

本研修では、文献レビューおよびレビュー論文作成の基本的枠組みと実践的手法について理解を深めた。特にスコーピングレビューの位置づけや活用方法が示され、研究テーマの整理や今後の研究展開を見据えたレビューの重要性が共有された。若手研究者や大学院生への研究指導にも活用可能な知見が得られ、本学の研究力向上に資する研修となった。

3. 研修成果と今後の展望

2025 年の FD・SD 研修を通じ、教育、研究、募集、ハラスメント防止、大学運営といった個別課題は、委員会・部会を越えた連携によって初めて改善・解決に近づくことを再確認する機会となった。

特に、各委員会・部会との共催形式を採用したことで、課題の共有が進み、FD・SD 研修が「特定の部署の研修」ではなく、「大学全体の改善に向けた共通の場」として機能し始めた点は大きな成果である。

引き続き、2025 年度内に学習支援部会、ハラスメント防止部会、学生相談部会等との連携を継続し、課題解決型・継続型の FD・SD 研修を企画・実施していく予定である。今後も教職員の横のつながりを基盤とし、本学の教育力・研究力・組織力のさらなる向上を目指していきたい。

新たな認証評価制度がもたらす「大学間比較」にどう向き合うか

教学 IR 室　杉山芳生

1.　はじめに

近年、日本の高等教育を取り巻く環境は大きく変化している。18 歳人口の減少や大学の統廃合への圧力、さらには学習成果の可視化や説明責任の強化といった社会的要請を背景に、大学の教育の質保証に関する議論はますます重要性を増している。こうした状況の中、文部科学省では「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループ」を中心に、認証評価制度の抜本的見直しを進めており、大学教育の透明性と比較可能性を高める方向性が示されている。また、大学単位で実施されてきた学生調査についても、全国規模の共通指標による「全国学生調査」が本格実施へと移行し、大学間比較と結果の公表が加速する見通しにある。

このような時代の到来に向け、藍野大学では教学 IR（Institutional Research）の体制整備を進め、教育の質保証と改善を持続的に行う仕組みづくりを進めてきた。本報告では、新たな認証評価制度の動向を概観するとともに、藍野大学が取り組んでいる教学 IR の現状と今後の課題について整理する。

2.　新たな認証評価制度の動向と大学への影響

文部科学省は、「知の総和」答申（中央教育審議会 2025）を起点とし、「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループ」を通じて、大学の認証評価制度の抜本的な改革を推進している。この改革は、大学間比較を本格化させ、各大学に教育の質に対するより一層のアカウンタビリティを求めるものである。

ワーキンググループの資料（文部科学省 2025a）では、現在の認証評価制度は、「適合」か「不適合」かの判定を受ける二元的な仕組みであり、「教育の質」を十分に評価・可視化できていないという課題が示されている。この状況を打破するため、新たな制度では「段階別評価」の導入が検討された。この段階別評価の仕組みは、英国の認証評価制度（TEF）を参考に議論が進められている。TEF では、教育の卓越性を基準に大学を「金」、「銀」、「銅」、「改善が必要」の 4 段階で評価している（林 2025）。日本の新制度も同様に、大学を複数の段階にレベル分けすることにより、教育の質的な差異を明確にしていくことが検討されている。

また、この検討段階にある新たな認証評価制度の特徴として、評価結果が「データプラットフォーム」上で公開され、誰もが容易に大学間比較を行えるようになる点があげられる。これにより、これまで「適合」と一括りにされていた大学が、「金」、「銀」、「銅」のように格付けされる事態が想定される。この透明性の向上は、大学教育の質向上に寄与する一方で、大学の序列化の助長や、統廃合の加速への影響も懸念される。

加えて、多くの大学において教学 IR が実施しているであろう、学生アンケートに関しても、大学間比較へと舵が切られた。2025 年度から本格実施される「全国学生調査」は、全国共通の質問項目を用いて学生目線から大学教育の実態を把握し、その結果を大学間の比較が可能な形で公表することを目指すものである（文部科学省 2025b）。調査項目では、「理解がしやすいように教え方が工夫されていた」か、「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却」されていたか、といった手厚い教育支援や、大学全体を通して、「卒業時までに身につけるべき能力を意識して学習」しているか、「教職員が熱心に教育に取り組んでいるか」といったことが評価される。これらの調査結果は、全国平均と比較

する形でレーダーチャートとして可視化されたり、各質問項目のスコアが高かった上位大学は「ポジティブリスト」にランキング形式で公開されたりする予定である。なお、2024 年度の調査結果に基づく「ポジティブリスト」は既に公開されており、web 上ではそのリストにランクインした大学が、広報の一環として広く「おしらせ」している状況が垣間見える。調査結果の公表は任意とされているが、調査への参加および結果の公表は、基盤的経費や各種補助金事業の申請要件となる可能性が示唆されており、事実上、全ての大学が参加し、結果を受け入れざるを得ない状況になると推察される。

3.　新たな動向に対する藍野大学の教学 IR の取り組み

加速する大学間比較の時代において、藍野大学はこれを好機と捉え、教育の特色を明確化し、社会から高い評価を得るための時代に応じた戦略的な取り組みを展開していかなくてはならない。「知の総和」答申（文部科学省 2025a）では、今後の高等教育が重視すべき観点として「未来社会を担う人材に必要な資質・能力の育成」と「デジタル化の推進」が挙げられており、教学 IR 室では、これらの重点項目に対応する本学の取り組みを支援するための調査を行ってきた。

「未来社会を担う人材に必要な資質・能力の育成」に関しては、本学独自の教育である「シン・メディカルⅠ〜Ⅳ」が、第 3 期認証評価において「教育課程・学習成果」の項目で「長所」として高く評価された。教学 IR 室では、この教育成果を客観的に示すため、各シン・メディカル科目において、ディプロマ・ポリシー（DP）の共創に対応する能力の獲得感と成長感に関する学生調査を実施している。そこでは、6 件法で各項目が平均 5.0 を超える高いスコアを示しており、学生が成長を実感していることが確認された（図 1 参照）。また、各シン・メディカル科目においては、学生の発表に対し、ルーブリックを用いた重要科目での埋め込み型パフォーマンス評価（PEPA: Pivotal Embedded Performance Assessment）を導入し、アンケート調査だけでなく、実際のパフォーマンスに基づいて学習成果を多角的に評価する試みがなされている。

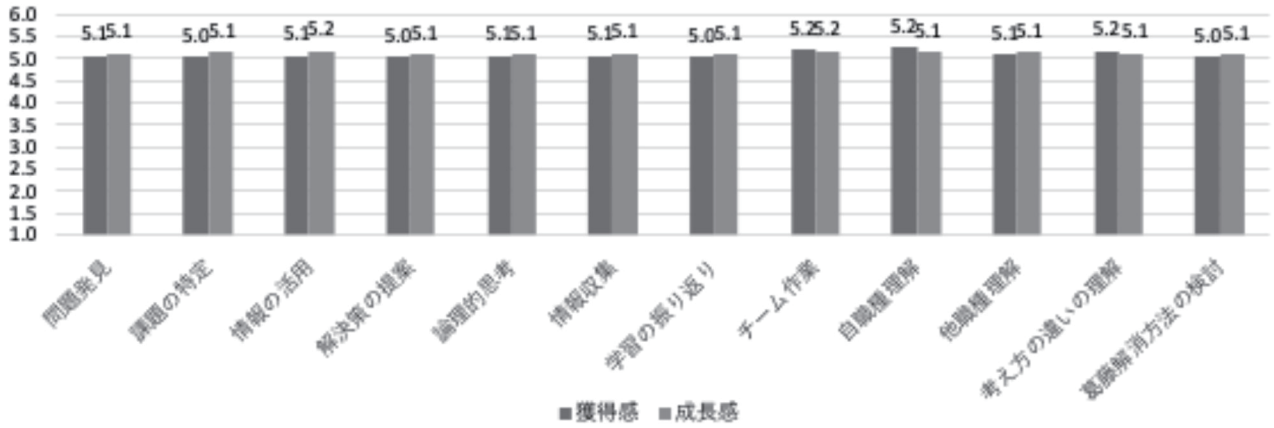


図 1 シン・メディカルⅢにおける能力の獲得感と成長感

「デジタル化の推進」に関しては、2025 年度 1 年生より、電子教科書の段階的導入が開始された。この導入に先立ち、教学 IR 室では事前調査を実施し、導入後との比較や、1 年生を対象とした調査から、その効果や課題を明らかにしている。教科書媒体に関しては、依然として紙媒体を希望する学生が最多ではあるものの、電子教科書を導入した 2025 年度 1 年生は、2023 年度の 1 年生と比較して、授業や学習に週 1 日以上 PC を活用していると回答した学生の割合が増加しており、デジタル化の推進や学生の ICT スキル向上に顕著な効果をもたらしていることが示唆された。また、本学では学習歴

のデジタル化を推進するため、国際技術標準規格に準拠したデジタル証明・認証システムである「オープンバッジ」の導入を進めている。これにより、「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」や「シン・メディカル」科目の修了バッジ等をデジタル形式で発行し、学習成果の可視化を求める社会の要請に応える先進的な取り組みとなるよう計画している。

4.　まとめと今後の課題

新たな認証評価制度は、大学間比較を加速させ、各大学の教育の質を明確に示そうとしている。18 歳人口の減少により大学の統廃合が進む中で、明暗を分けるのは教育の質であり、藍野大学はその質を向上させるための取り組みを進めている。「シン・メディカル」を核とした、未来社会を担う人材に必要な資質・能力の育成。電子教科書導入によるデジタル化の推進や、オープンバッジによる新たな学習成果の可視化の取り組みなど、教学 IR 室は、藍野大学の挑戦を支える調査を続けていく所存である。学生参画の教育改善や IR データのさらなる活用など、残された課題にも取り組み、今後の教育改革の推進とともに、本格化する大学間比較の時代において、藍野大学が「金をとれる（＝魅力ある）大学」として認知されるように努めていきたい。

付記

本報告は、2025 年 9 月 18 日に行われた、びわこリハビリテーション専門職大学・藍野大学共催 教学 IR セミナーにおける筆者の講演資料「新たな認証評価制度の動向と教学 IR」をもとに、生成 AI（ChatGPT、NotebookLM）が出力した文章を、筆者が吟味し、整理したり、取捨選択したりしてリライトしたものである。

参考文献

中央教育審議会（2025）「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」（https://www.mext.go.jp/content/20250221-mxt_koutou02-000040400_1.pdf）（2025 年 12 月 4 日アクセス）

林隆之(2025)「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループ（第 4 回）配布資料「英国における高等教育機関の質保証と TEF」」（https://www.mext.go.jp/content/20250702-mxt_koutou02-000043519_04.pdf）（2025 年 12 月 4 日アクセス）

文部科学省（2025a）「教育・学習の質向上に向けた新たな評価の在り方ワーキンググループ（第 5 回）【参考資料】参考資料集」（https://www.mext.go.jp/content/20250725-mxt_koutou02-000043975_07.pdf）（2025 年 12 月 4 日アクセス）

文部科学省（2025b）「「全国学生調査」に関する有識者会議（第 12 回）【参考資料 1 】全国学生調査に関する参考資料」（https://www.mext.go.jp/content/20250418-mxt_koutou01-000041920_6.pdf）（2025 年 12 月 4 日アクセス）

〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について
卵巣がん早期発見プログラムの開発
ー婦人科系サイレントキラー特性の撲滅に向けてー

藍野大学 看護学部 看護学科　齋藤祥乃

本研究は、卵巣がんに対する意識調査をもとに、卵巣がんの早期発見プログラムを開発し、啓発活動を実施することで、サイレントキラー特性を撲滅するために婦人科検診の受診率向上を目指すものである。

研究の背景

わが国では、2022 年にがんで死亡した人は 385,797 人（男性 223,291 人、女性 162,506 人）で、死亡総数の 24.6%を占め、1981 年から連続して死因のトップになっている[1)]。日本人が一生のうちにがんと診断される確率は、男性 62.1%、女性 48.9%であり、日本人が、がんで死亡する確率は、男性 25.1%、女性 17.5%という現状がある。国はがん研究 10 か年戦略（第 5 次）において「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す」目標達成を急務として取り組んでいる[2)]。
卵巣がんは、早期の段階では無症状のことも多く、実際は腫瘍が増大しており、腹水貯留による腹部膨満感などの症状が出現したときには既にⅢ～Ⅳ期の進行がんであり、その比率は約 40%以上とされ、別名「サイレントキラー」と呼ばれているがんである。5 年生存率においてもステージⅢの場合、子宮頸がん 64.2%、体癌 66.3%に対して卵巣がんは 45%と低い。臨床においても卵巣がんの多くが進行がんであることを目の当たりにして、早期発見が重要であると痛感していた。また、婦人科系のがんの中でも、子宮頸がんと乳がんは有効性の確立したがん検診があり「対策型検診」として推奨されていることから、受診行動に繋がっている。一方、卵巣がんは「任意型検診」のため個人が任意で受診することに加え、卵巣腫瘍をはじめとする婦人科疾患の診断に経腟超音波検査が有用である[3)]ことが知られておらず、早期発見の受診行動に繋がっていない。
以上のことから、本研究では、卵巣がんの意識調査をもとに、卵巣がんに対する知識や早期発見のための自覚症状・検査方法の啓発活動を実践することで、卵巣がんの早期発見プログラムを開発し、サイレントキラーの特性を撲滅し、卵巣がんの早期発見に繋がる受診率向上を目指すこととした。

本研究の学術的独自性と創造性

卵巣がんの早期発見に経腟超音波検査が有効であることから、婦人科検診を促す介入を実施する。その際、子宮頸がん検診とセットでの検診を推奨していきたい。子宮頸がんは、がん検診の有効性が確立しているにもかかわらず、日本の子宮頸がん検診の受診率は、43.7%(国立がん研究センター,2022)と欧米の先進諸国(イギリス・フランス・ドイツ・アメリカ)の 70～80%と比較すると低値である(厚生労働省,2023)。
本研究では、経腟超音波検査を推奨することで、卵巣がんのみならず婦人科系疾患の早期発見につながる独自性が高いプロジェクトである。また、経腟超音波の実物を直接使用しての説明はできないものの、ポッケットエコー（図 1）を使用し超音波検査が侵襲の低い検査法というイメージと伝えることで、受診行動に繋がりやすい方法に独自性があるといえる。創造性については、卵巣がんに対する早期発見プログラムを開発する事が出来れば対象者を大学関連の職域・大学周辺の地域住民から、市町村へと拡大しがん検診の受診率向上に向けた取り組みに寄与することができる。



図 1 ポッケットエコー

関連分野の研究動向と本研究の位置づけ

子宮頸がんは、今後 2000 年～2003 年生まれの女子においては、子宮頸がんの罹患者の増加は約 1 万 7000 人、死亡者の増加は約 4000 人に上る可能性があるとされている。このような日本の現状において、子宮頸がん検診についての先行研究は多数報告されている。また、有効性の確立したがん検診として推奨されていることから、子宮頸がん検診受診率の向上に取り組んだ研究はなされている 4) 5)。
卵巣がんにおいては、経腟超音波検査が婦人科検診として有用 3) なことから、経腟超音波検査と卵巣腫瘍に関連する報告はある。しかしながら、がん検診の有効性が認められていないため、検診受診率の向上を目的とした研究は見当たらない。婦人科検診により早期発見に至れば、サイレントキラーという特性を無くすことにつながり、今まで見過ごされてきた課題に取り組むことに本研究の意義がある。

本研究で明らかにすること

1．介入（啓発活動）の実施後アンケート調査において、①受診率の向上（数値目標：50%を超える）②卵巣がんに対する意識の変化（卵巣がんの検診方法と経腟超音波検査の必要性の認識）が介入前後で上回ることになったか？を母比率比較で検証し明らかにする。
2．卵巣がんに対する意識の変化と受診行動が明らかにされれば、新たな卵巣がんの早期発見プログラムを開発する。

本研究の国際性

「がん予防」という点において卵巣がんは、他のがん（子宮頸がんはヒトパピローマウイルス・皮膚がんは過剰な日光暴露・中皮腫はアスベスト）のように原因が特定されているがんではないことから難しい。さらに「がん医療」の点からもステージⅢ・Ⅳの進行がんでは有効な治療も困難をきたし医療費も高額になることから先進国の方が治療も受けやすい現状がある。本研究の取り組みは、早期発見のためのプログラム開発であり、費用対効果の面から医療資源の乏しい地域でも取り組み易く、がん検診の受診率を向上させる国際展開がしやすいと考える。

参考文献

1)国立がん研究センターがん情報サービス(2022).
https://ganjoho.jp/public/cancer/cervix_uteri/patients.html
2)がん研究 10 か年戦略（第 5 次）厚生労働省(2023).
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_231115_00001.html
3)浅田英子,早川滋彦,小林祐子(2018).女性の検診における経腟超音波検査―要精検者の年齢分布と診断・治療.産科と婦人科. 9 号.1115-1121
4)佐々木寛,小田瑞恵,光永裕子(2020).人間ドックにおける婦人科がん検診.人間ドック.35(4)540-551
5)氏原恵子(2023).20 歳～29 歳女性の子宮頸がん検診未受診理由に関する実態調査および女子大学生の参画による子宮頸がん検診等に関する啓発プログラムの開発.せいれい看護学会誌.14 号

以上が本研究の概要です。引き続き研究を進めて参ります。

〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について
中高年の社会貢献に関する心理的要因の検討：未来時間展望と社会参加動機の関連

藍野大学看護学部　看護学科　　髙橋　えり

1.　研究背景

少子高齢化の進む日本において、高齢者が健康を維持し就労やボランティア活動によって社会に貢献することが期待されている。高齢者の社会参加は生活機能の低下に応じた段階があり、ボランティア活動は就労の次の段階に位置づけられる。高齢者が社会から孤立しないためには、生活機能の低下に応じて社会参加も速やかに活動可能な段階に移行する必要がある（藤原他，2014）。ボランティア活動のような自発的に他者に利益をもたらす向社会的行動は、高齢者の自尊心や幸福感を高めると健康維持に有用であるとされるが（Midlarsky & Kahana，1994）、日本においてはボランティア活動に参加する高齢者が米国に比べて多くない（藤原他，2005）。仕事を引退した後の社会参加の移行を円滑に進めるにための支援が必要であり（藤原他，2014）、それには高齢者自身が社会参加への動機を維持すること、個人の生活機能の低下に応じた社会参加で達成される目標を再設定すること、目標に応じた活動を選びなおすことが必要である。

高齢者の目標設定と行動選択には加齢に関連した心理的要因が影響する。社会情動的選択性理論（Socioemotional Selectivity Theory: SST）では、人生の残された時間の主観的知覚を未来時間展望（future time perspective）と呼び，加齢に伴う未来時間展望の変化によって行動の動機づけとなる目標の優先順位が変わるとされる（図 1）。未来時間展望を制限されているととらえると、短期的に実現するものや幸福感を得られるものなど自らの情動に正の効果のある情動目標を優先させる。逆に、未来時間展望を機会はまだあるととらえると、将来への準備、情報収集や新しい体験、知識の獲得や人脈を広げる等の未来を見通した知識目標を優先させるのである（Carstensen，2006）。この 2 つの目標は社会参加の動機づけにも関与すると考えられる。

中年期以降の社会参加については、高齢者同士の相互扶助は地域の問題を解決する可能性をもち（高橋，2022a），ボランティア活動に参加する高齢者の社会関係を拡大する動機は高いことが知られている（Okun & Schultz, 2003）。中高年において未来に機会があるととらえることが活動動機を介して他者への援助を増やすことから（高橋・森尾，2022），未来時間展望が社会貢献行動に効果をもつ可能性が高い。一方で、高齢者は問題が顕在化するまで解決行動に至らない特性に留意する必要がある（高橋，2022b）。高齢者が生活機能の低下とともに活動内容は変化しても自分が健康でいることが社会の負担を軽減し社会貢献となると認識するのであれば（藤原，2014）、社会貢献行動として健康行動をとろうとし、未来にまだ機会があるとの認識がこれを増やすと考えられる。

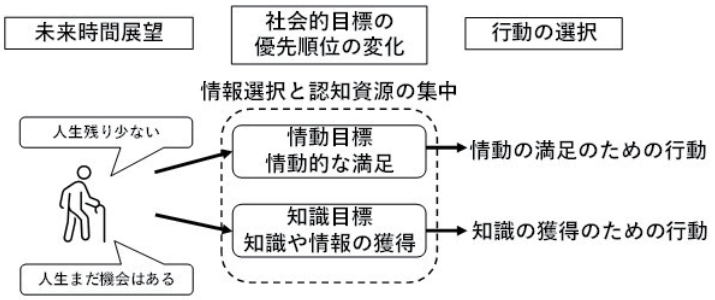


図1　未来時間展望による行動の変化

2.　研究目的

SST を理論的枠組みとし、中高年における未来時間展望が行動目標と社会参加への動機に関連し、社会貢献行動に影響することを明らかにする。

3.　研究計画

(1)　2025 年度　社会参加の情動目標と知識目標尺度の開発

未来時間展望を機会への焦点と制限への焦点の 2 因子構造と仮定し，各因子に対応する情動目標と知識目標を下位尺度とする社会参加動機尺度を作成する。研究代表者は社会参加動機の項目抽出と質問用紙の設計、研究分担者は理論的トップダウンによるカテゴリ分類を担当し、20 歳以上 80 歳未満を調査対象にオンライン質問紙調査を実施する。

(2) 2026 年度　中高年の残された時間の知覚と社会参加動機と社会貢献行動に関する調査

中高年を対象とし、未来時間展望が社会的活動への参加動機を通して向社会的行動や健康行動に関連するか検討する。50 歳以上 80 歳未満を調査対象にオンライン質問紙調査を実施する。

(3) 2027 年度　社会参加の情動目標と知識目標尺度の翻訳版の作成

（1）で作成した社会参加の情動目標と知識目標尺度の英語翻訳版を作成する。英語を母語とする一般人 60 人への調査によって理解しやすさ、認知的等価性を検討した後、英語を母国語とする地域で尺度の信頼性および妥当性の検討のための調査を実施する。

4.　期待される成果

本研究では、中高年の未来への見通しが社会貢献としての健康に関与する心理プロセスを明らかにするとともに、中高年の社会参加への心理的介入の根拠となる知見と老年期に向けての地域貢献及び健康に関する課題を明確化する。中年期以降も自分の未来にまだ機会があると考えることによって健康を維持し社会貢献行動をとろうとする心理プロセスを明らかにすることで、老年期の健康の維持増進と社会参加への介入の根拠として看護や福祉で活用することを可能とする。人生の残された時間の知覚である未来時間展望の機会への焦点と制限への焦点が、情動目標と知識目標という 2 種類の社会参加の動機へと弁別的に働き、社会貢献として向社会的行動の意図や健康行動へとつながることを示す。高齢者が年をとっても未来に機会があると考えて社会貢献行動に向かうという心理プロセスを明らかにすることで、高齢者の社会参加への介入のエビデンスを示し、介入プログラムの開発に寄与することを可能とする。また、老年学、心理学において広く研究されている Carstensen (2006)の SST を援用して社会参加の情動目標と知識目標尺度を開発することで、我が国の老年学研究に寄与し高い価値の創出をめざす。

Carstensen, L. L. (2006). The Influence of a Sense of Time on Human Development. *Science, 312*(5782), 1913–1915.

藤原・杉原・新開 (2005). ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響　地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義, 日本公衆衛生雑誌, 52(4), 293-307.

藤原 (2014). 高齢者のシームレスな社会参加と世代間交流　ライフコースに応じた重層的な支援とは, 日本世代間交流学会誌, 4(1), 17-23.

Midlarsky & Kahana (1994). *Altruism in later life*. SAGE Publications, Inc; 1st edition.

Okun, M. A., & Schultz, A. (2003). Age and motives for volunteering: Testing hypotheses derived from socioemotional selectivity theory. *Psychology and Aging, 18*(2), 231–239.

髙橋えり（2022a）「買い物の不便さと地域の相互扶助―JGSS-2015 データを用いた分析―」日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集［20］, 15-26.

髙橋えり（2022b）「高齢者が配食サービスを選択する要因―「高齢の日常生活に関する意識調査, 2014」の二次分析から―」日本保健福祉学会誌, 29（1）, 1-13.

髙橋えり・森尾博昭（2022）. 高齢者の未来時間展望の個人差とボランティア参加動機の関連. 日本社会心理学会第 63 回大会.

〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について
アカデミック・ライティングにおける論証の「型」の特徴と可能性

理学療法学科　杉山芳生

1. 研究の背景と目的

高等教育において、アカデミック・ライティングは不可欠な教育内容として国内外で広く実践されている。特に海外ではトゥールミン（Toulmin 1958, 2003）の「論証のレイアウト」が「トゥールミン・モデル」と呼ばれ、広く用いられる一方、我が国ではより対話的な論証のあり方が追究されてきた。牧野（2008, 2013）の「議論の十字モデル」や、それを松下（2021）が発展させた「対話型論証モデル」は、その代表例である。トゥールミン・モデルと対話型論証モデルの違いについて、松下（2021）は、①「問題」と「結論」を付け加えたことによって「問題解決」という軸が加わったこと、②「対立意見［ver. 3 では，対立する・異なる「主張」と「事実・データ」、「論拠・裏づけ」］」と「反駁」により他者との関係を示したこと、③「限定詞」を「主張」に、「裏づけ」を「論拠」に組み込みモデルの複雑さを減らしたことの３点に整理している。特に①と②の特徴により、対話的な問題解決能力の育成が期待され、その問題解決に必要な論証の型を学ぶため、中等教育における探究的な学習の実践（田中 2022）や、高等教育におけるアカデミック・ライティングの実践（丹原ほか 2020）で活用され始めている。しかし、これらの実践はまだ始まったばかりであり、特に、学生が有する論証の型の特徴について考慮した実践が求められる。

したがって本研究では、論証の型を学習する前の初年次学生を対象とし、対話型論証に必要な全ての要素（「問題」、自らの「主張」、自らの「論拠」、自らの「事実・データ」、対立意見の「主張」、対立意見の「論拠」、対立意見の「事実・データ」、「反駁」、「結論」）を含む記事を読み、その論の構造を説明する課題を設定した。そして、その説明に用いられた記述における各要素の量と内容の質的な差異を分析し、初年次学生が対話的な論証に必要な要素をどのように捉えているかを明らかにすることで、今後のアカデミック・ライティング実践の進展に資する示唆を得ることを目的とした。

2. 研究方法

本研究は、医療系私立大学で 2023 年度に開講された初年次教育科目において、看護学科の 1 年生 128 名（有効回答 117 名）を対象に実施した。論証の型に関する事前学習は行われていない。課題として、筆者が作成した記事「2025 年度共通テスト「情報」に様々な声」を読み、その論の構造を説明するよう求めた。事前に学習データの研究利用について学生に同意を得た上で，授業終了後にワークシートを回収した。学生は、説明のメモを記述する「ノート欄」と、実際に説明する内容を記述する「話す内容」欄が設けられたワークシートを用い、本研究では「ノート欄」の記述を分析対象とした。分析にあたり、学生の記述が対話型論証モデルの各要素にどれだけ対応しているかを集計した。その際、学生の認識の深さを捉えるため、記述を質的に分類した。記事の内容を単に転記している記述を〈１〉、記事内容を「問題提起」「主張」「データ」といった概念で一段階抽象化している記述を〈２〉、対応する記述がない場合を〈０〉とした。

3. 結果と考察

「ノート欄」に記述された対話型論証モデルの各要素に対応する記載率をグラフ化したものが図１である。〈１〉または〈２〉の何らかの要素に関する記述という点では、それぞれの「主張」と「結

論」関連の記述が 90%以上含まれており、ほとんどの学生が「どのような主張が行われ、どのような結論が出されたのか」を確認していたことがうかがえる。一方、「論拠」や「事実・データ」など、「どのように両者の主張が導かれているのか」に関する認識は比較的薄い。また、対話型論証として重要な「問題」に関しては、約 15%の学生が「問題」を確認しないまま説明を続けていたことが明らかとなった。

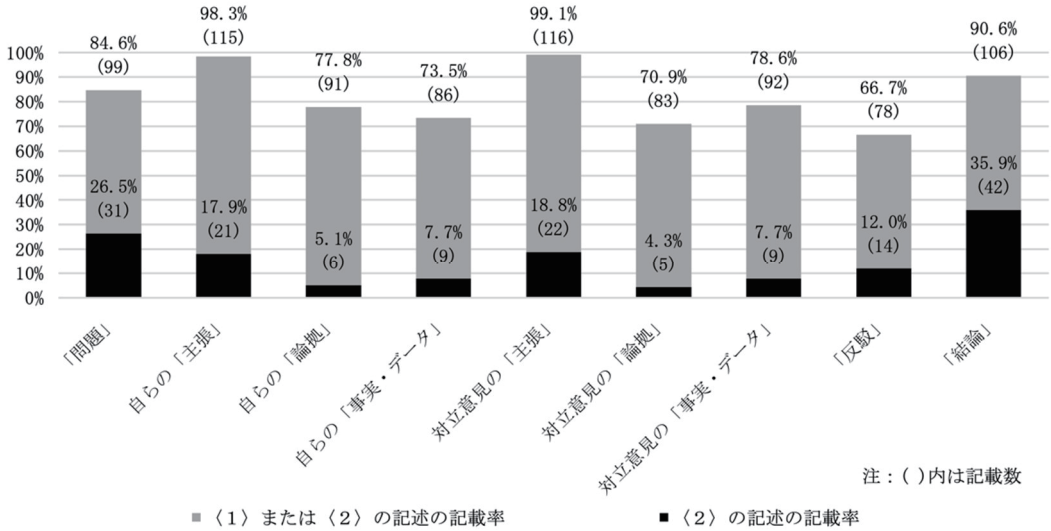


図 1　「ノート欄」に記述された対話型論証モデルの各要素に対応する記載率（杉山 印刷中, p.60）

また、一段階抽象化している記述〈2〉に限定すると、記載率は全体的に大きく減少し、特に「論拠」と「事実・データ」は 10%を下回った。この理由として、「問題」や「結論」は日常的に使われる用語であるため抽象化されやすいのに対し、「論拠」や「反駁」といった用語は学生に認知されていなかった可能性が考えられる。一方で、注目すべき点として、「反駁」という用語を知らないながらも、12%の学生が「意見の相違点」や「賛成派の意見の中でのズレ」といった独自の言葉でその要素を言語化・抽象化しようと試みていたことも明らかとなった。これは、適切な用語やその概念を教示することで、学生の対話的な論証に必要な要素への理解を深められる可能性を示唆している。

4. まとめと今後の課題

本研究は、初年次学生を対象に、対話型論証に必要な要素の認識状況を分析した。その結果、学生は「主張」や「結論」は認識しやすいものの、「論拠」や「事実・データ」といった主張を支える要素、さらには「問題」や「反駁」といった対話に不可欠な要素を、特に抽象的なレベルで捉えきれていないことが明らかとなった。この結果を踏まえ、今後のアカデミック・ライティング実践に向け、以下に 2 点の示唆を提示する。

第一に、「三角ロジック」を意識した実践の必要性である。「論拠」と「事実・データ」への認識が低いことから、まずはこれらの要素が主張を支えるものであるという構造関係を理解する必要がある。第二に、「対話的な活動」を取り入れることの重要性である。「問題」や「反駁」の意義は、そこにある単一の考えと向き合うだけでは認識されにくい。他者の意見や著作、あるいは自己との内的な対話といった、複数の意見を突き合わせる「対話的な活動」を通じて、これらの要素が論を深める上で不可欠であることを学生が実感する機会を設けるべきではないだろうか。

なお、本研究には、特定の課題文脈における分析である点や、論証の「型」の要素抽出の信頼性、

課題における各要素の記載率と実際のライティング能力との関係が未検証であるといった点で限界を有する。今後は、本研究の知見に基づき、ライティング実践まで研究対象を広げ、具体的な教育実践のデザインとその効果を検証していくことが課題として挙げられる。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 23K12805 の助成を受けたものである。

付記

本研究の一部は杉山（印刷中）で公開されている。また、本報告は当該科学研究費補助金採択課題に関する筆者のこれまでの研究資料をもとに、生成 AI（NotebookLM）が出力した文章を、筆者が吟味し、整理したり、取捨選択したりしてリライトしたものである。

参考文献

牧野由香里（2008）「議論」のデザイン．ひつじ書房

牧野由香里（2013）十字モデルで協同的に論文を組み立てる．関西 FD 地区連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター（編）思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント．ミネルヴァ書房，pp. 32-53

松下佳代（2021）対話型論証による学びのデザイン：学校で身につけてほしいたった一つのこと．勁草書房

丹原惇，斎藤有吾，松下佳代，小野和宏，秋葉陽介ほか（2020）論証モデルを用いたアカデミック・ライティングの授業デザインの有効性．大学教育学会誌, 41(2): 125-134

杉山芳生（印刷中）対話型論証モデルを軸とした初年次教育の実践．松下佳代（編）実践 ディープ・アクティブラーニング．勁草書房，pp. 53-68

―4 年間の学びの基盤として―

田中孝平（2022）対話型論証を取り入れた高校の探究学習に関する量的・質的研究：教科学習と探究学習への取り組み方に着目して．京都大学大学院教育学研究科紀要, 68: 357-370

Toulmin, S. E. (1958) The uses of argument. Cambridge, Cambridge University Press

Toulmin, S. E. (2003) The uses of argument (updated ed.). Cambridge, Cambridge University Press. (トゥールミン，S.（著）戸田山和久，福澤一吉（訳）(2011) 議論の技法：トゥールミンモデルの原点．東京図書)

〈研究紹介〉科学研究費補助金採択課題について
加齢による脳内ネットワークの変化－fMRI を用いた脳イメージング研究

作業療法学科　酒井　浩

1. 研究背景

我々はこれまでに認知症予防・進行予防にはどのような作業活動をどのように提供すべきかを検討するために，前頭前野（PreFrontal-Cortex, PFC）の賦活を効果的に行える活動を探求してきた。具体的には背外側前頭前野（Dorso-Lateral PreFrontal-Cortex, DLPFC）をターゲットとして，連続暗算課題（Paced Auditory Serial Addition Task, PASAT）[1－3]に着目し，課題難易度とDLPFC の賦活度との関係を調べた。

第一段階として，PASAT の課題難易度とDLPFC の賦活度との関係について検討するために，健常学生を対象としたfMRI 実験を行った。その結果，PASAT は高難易度ほどDLPFC を賦活させ，低難易度，つまり正解率が 85%を超えるような簡単な課題ではDLPFC が働かなくなることが明らかとなった[4]。

第二段階の研究としてPASAT の 0.5 秒用，1 秒用，1.5 秒用を作成し，高難易度の設定を加え，さらに統制課題として復唱課題を加えて同様の実験を行った。その結果，前述した第一段階の研究と同様の結果が得られ，健常者においては課題難易度の増加とともにDLPFC が賦活するものと考えられ，聴覚性暗算課題においては課題難易度の増加がDLPFC 賦活度を高めることが明らかとなった[5]。

しかし，これら二つの研究は聴覚性課題を用いたものであったため，第三段階では第二段階での疑問を解決するために視覚性PASAT（Paced Visual Serial Addition Task, PVSAT）を作成し，同様の研究を行った。その結果，DLPFC は難易度増加につれて賦活が高まり，高難易度では 100%の賦活率となった。つまり，聴覚性課題であるPASAT のみならず視覚性課題であるPVSAT においても難易度が高まるにつれてDLPFC を効率的に賦活しうるものと考えられた[6]。

しかし，以下の点で疑問が残された。すなわち，これらは脳の外側機能である中央実行ネットワーク（Central executive network, CEN）のみを観察した実験結果であり，近年に発見された残り2つの脳内ネットワーク[7]であるディフォルトモードネットワーク（Default mode network, DMN），顕著性ネットワーク（Salience network, SN）との関係を検討すべきではないか，という点である。

そこで第四段階（2015 年～2019 年の文科省科研採択課題）ではPASAT, PVSAT の難易度とDMN の活動との関連を検討することにした。この結果については現在分析を進めているところである。

一方，これらの研究を進める中でDMN がCEN と同期しながらも，異なる位相で賦活することが確認され，我々はこの位相の異なる2部位の働きについて以下のように推測した。つまり，活動時にはDMN が目前にある刺激と対応する過去の経験を海馬・後部帯状回（Posterior Cingulate Cortex；PCC）から抽出し，その活動に関係する予測情報（フィードフォワード情報）として利用され，CEN は外界での対象操作を通して，この予測情報の書き換えを行い，DMN は更新された情報を一時保存する。このようなDMN によって抽出される予測情報とCEN による情報の更新，さらにDMN による更新情報の保存が繰り返され，活動終了時には文脈にもっともそくした更新情報が再び記憶されるのではないかということである。

また，DMN・CEN にはそれぞれ内側前頭前野（Medial PreFrontal-Cortex, MPFC）とDLPFC という中央実行系の役割をする部位があり，DMN は活動計画とその過程にそったワーキングメモリーを動員し，DLPFC は活動の各過程における注意分配方針を表象するのではないかということも推察された。また，PFC は原則的に抑制性制御であるため，MPFC・DLPFC はそれぞれ抑制機能を利用して競合する選択肢を抑え込み，その結果，活動文脈に適した計画・過程のワーキングメモリーと注意分配方針を決定しているものと考え

られる。このことは，これまでワーキングメモリー機能を論じる研究に際して DLPFC のみが着目してきたことに警鐘を鳴らすものであると考えられた。また，MPFC・DLPFC がより多くのワーキングメモリーを紐付けできるような大きなネットワークを形成できる（容量が大きい）ほど，同時並行処理能力が高くなるものと思われた。おそらくは認知症変化はアミロイドタンパク等の蓄積によりこれらのネットワークがところどころ遮断され，いわゆる容量が減少することで，紐付けされるはずのワーキングメモリーが動員できないか，不安定となり，遂行機能や記憶に障害が生じるのではないかと考えられた。

以上のことから，我々はワーキングメモリーにおける同時並行処理を担保する注意容量は DLPFC のみならず DLPFC と MPFC の相互作用によって規定され，抑制課題における MPFC と DLPFC の賦活度が高い人ほど，注意容量が大きく，この部位の賦活度は加齢とともに低下するのではないかという予測を立てた。今回の研究ではこの点を「問い」とする。

2. 本研究の目的および学術的独自性と創造性

本研究の目的は前述したように，「抑制課題における MPFC と DLPFC の賦活度が高い人ほど，注意容量が大きく，それは加齢とともに低下する」という問いを明らかにする。前述したように近年に着目されてきた脳内ネットワークの交互作用を考えれば，MPFC にも着目すべきである。また，認知症者では CEN における DLPFC の活動低下のみならず DMN における MPFC の活動低下が，認知症者における遂行機能課題や記憶想起の困難さの原因であると考えられており，抑制課題における MPFC の賦活度が注意容量と関係することが明らかとなれば，CEN における DLPFC，DMN における MPFC の活動低下が認知症変化と関係し，これらの抑制機能を衰えさせないことが高齢者の QOL 向上に寄与することになる。

3. 本研究の着想に至った経緯

我々はこれまでワーキングメモリー機能を維持・強化することによって認知症予防あるいは認知症進行予防が可能であるという仮説をもとに，ワーキングメモリー機能の中央実行系である DLPFC をターゲットにして，DLPFC を効果的に賦活するための課題難易度を明らかにするための研究を行ってきた。しかし，近年，CEN，SN，DMN といった脳内ネットワークとその役割が明らかになり，DLPFC を効果的に賦活した後，DMN に情報を保存するためには，そのような難易度設定が効果的なのかを明らかにするが必要であると考え，2015 年からこのようなことを明らかにするための研究へと切り替えた。

近年，CEN における DLPFC の役割のみならず，DMN における MPFC の役割が中央実行系に含まれ，両部位の役割が重要であり，この両部位が認知症変化では減退することが示されるようになり，MPFC を効果的に賦活する活動とその難易度を明らかにすることが重要であると示唆された。これらのことから，今回はワーキングメモリーにおける同時並行性を担保する注意容量は DLPFC のみならず MPFC の効果的な活動によって規定され，抑制課題における MPFC と DLPFC の賦活度が高い人ほど，注意容量が大きく，この部位の賦活度は加齢とともに低下するのではないかという「問い」に至った。

4. 関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

近年，アルツハイマー型認知症（AD）および軽度認知症（MCI）において，DMN の結合性が低下することが指摘され，さらに認知機能障害出現前の段階で DMN の異常が起きることが指摘されている8）。また Zacks ら9）は，高齢者は無関係な刺激に対する抑制機能や注意制御機能が加齢によって低下し，不必要な情報を取り入れることによって処理能力が落ちることを指摘している。このような状況は DLPFC，MPFC が CEN，DMN の後方部で生じる環境依存的活動の競合を抑制できないことが要因と考えられ，とりわけ内的思考を想

起してしまう現象を抑制することや，刺激によって生じる不用意で，文脈と関係しないワーキングメモリー活動を抑制することは困難であると考えられる。また，このような不必要な活動が脳内で同時並行に生じていると注意容量は容易に減少するものと予測される。しかしながら，このような注意容量と抑制課題時における DLPFC，MPFC 賦活度の関係を MRI で検証した研究は見当たらない。以上のことから，本研究は独創的かつ創造的な研究といえる。

5. 本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

初年度は，研究代表者が所属する大学の近隣大学において，健常学生 25 名を選定し，注意容量を測定できるとされるリーディングスパン課題を実施し，注意容量の大きい群と小さい群に分別する。また，連携研究者が所属する ATR 脳活動イメージングセンターにおいて，ワ

ーキングメモリー課題（PVSAT）時と抑制課題（視覚刺激に対する反応抑制課題）時における DLPFC および MPFC の活動を測定可能な実験デザインと刺激の作成についての話し合いを行い，fMRI 実験用の負荷刺激を作成する。さらに，fMRI における予備的実験を実施する。

＜健常学生・中高年者における fMRI 実験デザイン＞

1. 実験の基本シークエンス

｛　安静⇒ワーキングメモリー課題（低負荷）⇒安静⇒反応抑制課題　｝

2. 解析デザイン

｛「反応抑制課題」－「ワーキングメモリー課題（低負荷）」｝

｛「反応抑制課題」－「安静」，「ワーキングメモリー課題（低負荷）－「安静」」

2 年目は前述した健常学生を対象とした fMRI 実験を行うとともに，中高年者を対象としたリーディングスパン課題を実施し，健常学生と同様に容量の大きい群と小さい群に分ける。

3 年目は健常学生における実験データ解析を行うとともに，中高年者を対象とした fMRI 実験を実施し，後半期には中高年における実験データの解析を行い，健常学生との比較を行う。

6. 本研究の目的を達成するための準備状況

文献に記載した4）から6）の研究を通して，これまでの実績がある。また，ATR 脳イメージングセンターとの関係構築は十分になされており，研究疑問とそれを実証するための3つの脳内ネットワーク，つまり CEN，SN，DMN を抽出するための技術と fMRI 測定環境は十分に有している。

文　献

1）D. Gronwall, H. Sampson: The psychological effects of concussion. Auckland University Press, Auckland, New Zealand (1974)

2）D. Gronwall　: Paced Auditory Serial Addition Task . A measure of recovery from concussion. Percept. Mot.Skills, 44 :367-373, 1977

3）加藤元一郎：CAT による評価とその結果. 日本高次脳機能障害学会編著，標準注意検査法・標準意欲評価法　新興医学出版社，29-64，2006

4）酒井浩：連続暗算課題の難易度と脳賦活部位の変化について. 大阪ガス福祉財団研究報告書 22：63-68, 2009
5）酒井浩, 他：PASAT の課題難易度と脳賦活部位の変化. OTJ48（12）：1255-1262, 2014
6）酒井浩, 他：視覚性 PASAT の課題難易度と脳賦活部位の変化. 未公表データ
7）虫明元,　他：運動にかかわる大脳皮質各領域の役割, リハビリテーションのためのニューロサイエンス, MEDICAL VIEW, 2015
8）山口修平, 小野田慶一：安静時機能的 MRI による認知症想起診断.高次脳機能研究 34：9-16,2014
9）Hasher,L & Zacks,R:Working memory,comprehension,and aging:A review and a new review.In G.Bower(Ed),The　psychology of learning and motivation.Sandiego,CA:Academic Press.493-325,1988

〈研究紹介〉「iPS/ES 細胞由来内耳オルガノイドの内耳移植による内耳再生研究」

臨床工学科　田浦晶子

本研究は、2021 – 2024 年に文科省研究科目「基盤研究（C）：ヒト多能性幹細胞（iPS 細胞）由来内耳オルガノイドの内耳移植による内耳再生研究」の助成を受けて行われた研究に関連したもので、京都大学医学部伊藤壽一名誉教授らとの共同研究についてご報告します。

【背景】

めまいやふらつきが持続する平衡障害者は数十万人以上存在するにも拘わらず、平衡障害に対する根本的治療は確立されていないのが現状である。平衡障害の主な原因として前庭障害があげられ、高度前庭障害に対する新規治療方法の開発は重要である。前庭障害に潜む転倒のリスクは数十倍以上と報告されているが、転倒による寝たきり高齢者の増加や、平衡障害による活動範囲の減少により認知症の進行も危惧される。日本はすでに超高齢化社会に突入し、今後さらに高齢者割合の増加が予想されることから、健康寿命の延伸の為にも平衡障害の治療は急務である。前庭有毛細胞は加齢に伴い感覚毛が消失し、細胞数が次第に減少することが知られており、加齢性平衡障害の一因と考えられる。これらの前庭機能低下が一側性であれば、前庭代償が可能であるが、両側性前庭機能低下(bilateral vestibulopathy,BVP)では、代償機能が働かずに平衡障害が持続するとされている。

【目的】

本研究の目的は、ヒト人工多能性幹細胞（ヒト iPS 細胞）もしくはマウス ES 細胞から誘導した内耳オルガノイドを内耳障害モデル動物の前庭に移植することにより、内耳を再生させ、前庭機能が回復するか検討することである。

【研究方法】

① モルモットの三半規管に耳毒性薬物を投与し、前庭障害モデルを作成した。
② ヒト iPS 細胞から内耳オルガノイドへの分化誘導方法を確立した。
(京都大学医学部大西先生よりご提供)
③ 前庭障害モデル動物の前庭に、内耳オルガノイドを移植した。

図 1　ロタロッド検査（2024 Aino Journal より）

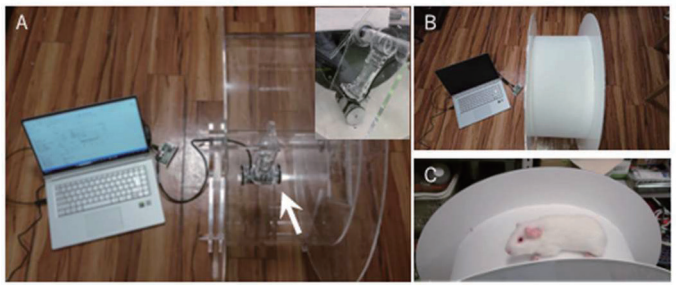
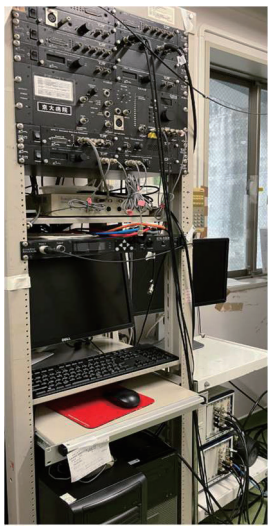
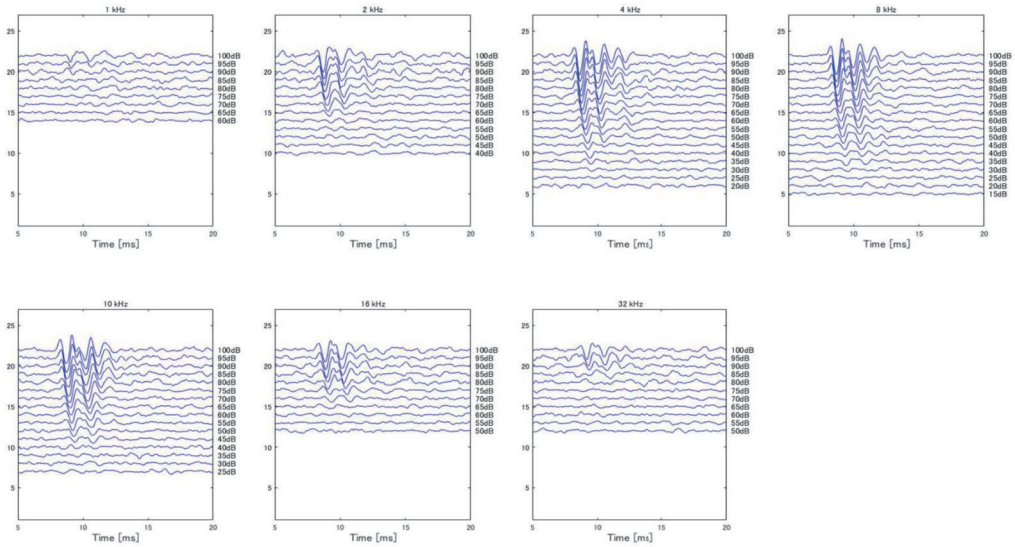


図 2　ABR 装置



④ 移植動物の内耳機能（聴覚及び前庭機能）を経時的に測定し、その後内耳の組織学的検討を行った。前庭機能について図 1 のロタロッド機器を作成し、落下までの時間を計測した。聴覚については図 2 のように ABR（聴性脳幹反応）を測定した。
⑤ 組織学的に前庭有毛細胞の障害について、免疫染色（Myosin7A）にて検討した。また移植したオルガノイドについては、抗 GFP 抗体にて移植組織の生着を確認した。

図 3
ABR 結果



【結果とまとめ】

モルモットの前庭にゲンタマイシンにて障害を与えた後に、内耳オルガノイドを移植したが、ABR 検査では明らかな聴力障害を認めなかった(図 3)。このことから今回使用した移植経路は将来的に臨床応用する際において、有力な候補になりうると考えられた。前庭と組織学的評価については移植動物において改善傾向が見られたが、サンプル数が少ないこともあるため、更なる検証が必要であると思われた。利益相反に該当する事項はありません。

上記の動物実験は、京都大学医学部附属動物実験施設にて実施しております。主に週末に実験を行っているため、体力的に厳しさを感じることもありますが、医学の発展に少しでも貢献したいという思いを原動力に、日々研究に取り組んでおります。

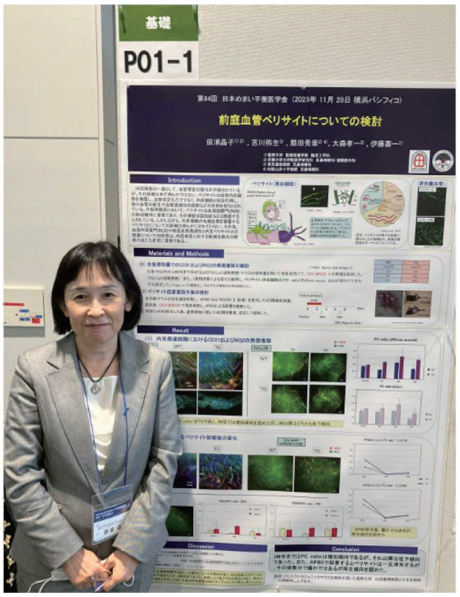
また、藍野大学における研究活動についても、日本耳鼻咽喉科学会よりご評価をいただき、「輝く女性賞」を受賞することができました。研究を継続できる恵まれた環境に心より感謝するとともに、日頃より温かいご指導とご支援を賜っている皆様に、深く御礼申し上げます。

めまい平衡医学会ポスター発表



←「輝く女性賞」授賞式





一塩基多型とアスリートの腱・靭帯損傷：系統的レビューとメタアナリシス
Single Nucleotide Polymorphisms and Tendon/Ligament Injuries in Athletes: A Systematic Review and Meta-analysis

理学療法学科　福山友見

令和 7 年度藍野大学優秀研究賞に本研究を選んでいただき，誠に感謝申し上げます．本研究は立命館大学の家光素行教授と村上晴香教授と共同で実施し，Int J Sports Med.に掲載されました．今回は研究内容の一部を紹介いたします．

1．研究背景

アスリートは競技パフォーマンスの最大化を目指す一方で，スポーツ傷害の予防にも常に取り組んでいる．しかし，競技特性や高強度のトレーニング・試合環境により，スポーツ傷害を完全に回避することは困難である．なかでも，腱および靭帯損傷はスポーツ傷害全体の約 20～30%を占めており[1]，アスリートの競技活動やキャリアに大きな影響を及ぼす．近年では，さらに腱・靭帯損傷の発生率が 20～40%増加していることも報告されており，その予防は重要な課題である[2-4]．注目すべきは，腱・靭帯損傷には「家族性」が認められることである．家族内に同様の傷害歴がある場合，発症リスクが約 2 倍に上昇することが知られており[5]，この事実は遺伝的要因が損傷リスクに関与している可能性を示唆している．

腱および靭帯は，乾燥重量の約 70～80%をコラーゲンが占めており，主にⅠ型，Ⅲ型，Ⅴ型などのコラーゲン線維から構成されている[6]．さらに，プロテオグリカン（デコリン，アグリカンなど）や，マトリックスメタロプロテアーゼ（matrix metalloproteinases：MMP）などが，組織の構造維持や再構築に重要な役割を果たしている[7]．近年では，腱・靭帯の構造や代謝に関連するタンパク質をコードする遺伝子配列の違い，すなわち一塩基多型（single nucleotide polymorphism：SNP）が，スポーツによる腱・靭帯損傷の発症と関連する可能性が示唆されている．

しかし，これまでの研究では，サンプルサイズや競技特性，性差などの違いにより，結果の一貫性に乏しいという課題があった．また，アスリート集団に特化し，複数の遺伝的因子と腱・靭帯損傷との関連を統合的に解析した研究は限られている．

2．研究目的

本研究の目的は，系統的レビューおよびメタアナリシスを用いて，アスリートにおける腱および靭帯損傷と遺伝的要因との関連を包括的に検討し，その科学的根拠を明らかにすることである．

3．方法

文献検索と研究の特徴

本研究は PRISMA（Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses：PRISMA）2020 ガイドラインに準拠して実施し，UMIN 臨床試験登録システム（UMIN000050485）に登録した．PubMed，Web of Science，EBSCO，Cochrane Library，MEDLINE の 5 つのデータベースを用い，2023 年 7 月 7 日以前に発表された文献を検索した．対象は，アスリートを対象とし，腱または靭帯損傷と遺伝子多型との関連を検討した研究とした．症例群および対照群はいずれも同等の活動レベルを有するアスリートであることを条件とした．

データ抽出および品質評価

抽出項目には，著者名，発表年，国・民族，競技種目，参加者数，遺伝子型分布，解析方法などを含めた．研究の方法論的質は，非ランダム化比較試験研究の評価に用いられるニューカッスル・オタワ尺度（Newcastle–Ottawa Scale：NOS）を用いて評価し，6 点以上を高品質研究と判断した[8]．

統計解析

メタアナリシスでは，COL1A1 rs1800012，COL5A1 rs12722，MMP3 rs679620，VEGFA rs699947 の各多型を対象とし，オッズ比（OR）および 95%信頼区間（CI）を算出した．解析にはランダム効果モデルを用い，異質性は I^2統計量で評価した．

３．結果

文献検索結果

文献検索の結果，合計 1,429 件の論文が抽出された．重複を除外後，タイトル・抄録スクリーニングおよび全文精査を経て，最終的に 31 件の論文が系統的レビューに含まれた（図 1）．このうち，遺伝子型頻度分布および損傷データが利用可能であった 12 件（症例 1,687 名，対照 2,227 名）がメタアナリシスの対象となった．

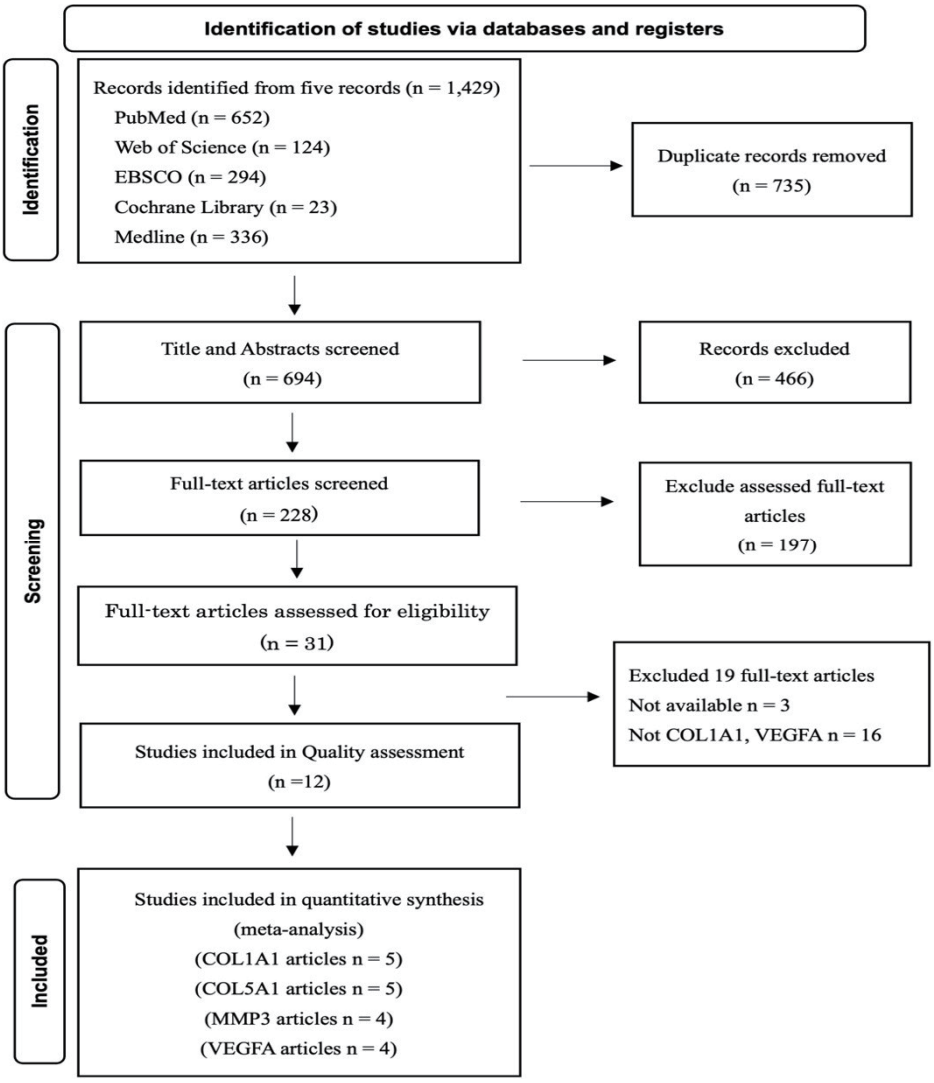


Figure 1: Summary flowchart of literature search.

メタアナリシスの結果

COL1A1 rs1800012，COL5A1 rs12722，MMP3 rs679620 の各多型については，いずれの遺伝モデルにおいても腱・靭帯損傷リスクとの有意な関連は認められなかった．一方，VEGFA rs699947 多型では，対立遺伝子モデルにおいて有意な関連が認められた（C vs. A：OR = 0.80，95% CI：0.65–0.98，I^2=3.82%，p=0.03）．これは，C 対立遺伝子を有するアスリートでは，A 対立遺伝子を有するアスリートと比較して，腱・靭帯損傷のリスクが約 20%低いことを示している（図 2）．出版バイアスは認められなかった．

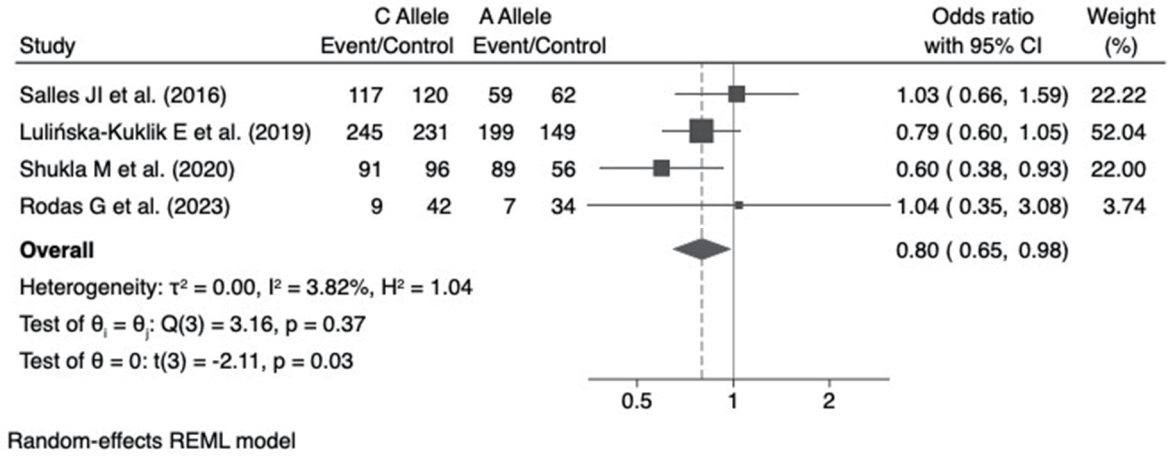


Figure 2: Forest plots of allele models of VEGF rs699947 for tendon and ligament injuries in all articles. Squares and horizontal lines correlate to ORs and 95% CIs for individual studies. The area of the squares indicates the weights of the studies. The diamonds indicate the combined ORs and 95% CIs. Event = injury, Control = non-injury.

4．考察

本研究は，アスリートにおける腱・靭帯損傷と遺伝的要因との関連を検討した初の包括的な系統的レビューおよびメタアナリシスである．31 件の論文から，22 種類の遺伝子が腱・靭帯損傷リスクと関連する可能性が示唆された．メタアナリシスでは，VEGFA rs699947 (– 2578 C/A) C 対立遺伝子が腱および靭帯損傷のリスクを 20%低下させることが示されました．VEGFA rs699947 多型は，プロモーター領域に位置し，VEGFA タンパク質発現量に影響を及ぼす．VEGFA は血管新生を介して損傷組織の修復に関与し，MMP や TIMP の発現調節を通じて腱・靭帯の再構築に影響を与える [13, 14]．本研究の結果は，VEGFA rs699947 の C 対立遺伝子が，こうした修復過程に有利に作用する可能性を示唆している．

一方で，研究数が限られていること，特定の地域・民族集団に偏っていること，トレーニング量や栄養などの後天的因子を十分に考慮できていない点が，本研究の限界として挙げられる．

5．結論

本系統的レビューおよびメタアナリシスにより，遺伝的要因がアスリートの腱および靭帯損傷リスクに影響を及ぼす可能性が示された．とくに VEGFA rs699947 多型の C 対立遺伝子は，腱・靭帯損傷リスクの低下と関連していた．しかし，エビデンスは限定的であり，今後はより大規模かつ多民族集団を対象とした研究が求められる．

6. 謝辞

本研究のデータ収集および分析にあたり，多大なるご協力を賜りました共同研究者の先生，ならびに本解析のためにデータ提供を頂いた著者の方々に心より深く御礼申し上げます．また，本研究の実施にあたり，科学研究費補助金（KAKENHI: 22K11515）の支援をいただき，心より深く感謝いたします．本研究により得られた成果を基盤とし，今後のアスリート支援およびスポーツ理学療法学に貢献できることを願っております．

7. 引用文献

1) Clifton DR, Hertel J, Onate JA et al. The First Decade of Web-Based Sports Injury Surveillance: Descriptive Epidemiology of Injuries in US High School Girls' Basketball (2005-2006 Through 2013-2014) and National Collegiate Athletic Association Women's Basketball (2004-2005 Through 2013-2014). J Athl Train 2018; 53: 1037-1048.
2) Zbrojkiewicz D, Vertullo C, Grayson JE. Increasing rates of anterior cruciate ligament reconstruction in young Australians, 2000-2015. Med J Aust 2018; 208: 354-358.
3) Herzog MM, Marshall SW, Lund JL et al. Trends in Incidence of ACL Reconstruction and Concomitant Procedures Among Commercially Insured Individuals in the United States, 2002-2014. Sports Health 2018; 10: 523-531.
4) Lemme NJ, Li NY, DeFroda SF et al. Epidemiology of Achilles Tendon Ruptures in the United States: Athletic and Nonathletic Injuries From 2012 to 2016. Orthop J Sports Med 2018; 6: 2325967118808238.
5) Flynn RK, Pedersen CL, Birmingham TB et al. The familial predisposition toward tearing the anterior cruciate ligament: a case control study. Am J Sports Med 2005; 33: 23-28.
6) Frank CB. Ligament structure, physiology and function. J Musculoskelet Neuronal Interact 2004; 4: 199-201
7) Stamenkovic I. Extracellular matrix remodelling: the role of matrix metalloproteinases. J Pathol 2003; 200: 448-464.
8) Wells GA, Wells G, Shea B et al. “The Newcastle-Ottawa Scale (NOS) for Assessing the Quality of Nonrandomised Studies in Meta-Analyses.” (2014).
9) Salles JI, Duarte ME, Guimarães JM et al. Vascular Endothelial Growth Factor Receptor-2 Polymorphisms Have Protective Effect against the Development of Tendinopathy in Volleyball Athletes. PLoS One 2016; 11: e0167717.
10) Lulińska-Kuklik E, Leźnicka K, Humińska-Lisowska K et al. The VEGFA gene and anterior cruciate ligament rupture risk in the Caucasian population. Biol Sport 2019; 36: 3-8.
11) Shukla M, Gupta R, Pandey V et al. COLIA1＋1245 G＞T Sp1 Binding Site Polymorphism is Not Associated with ACL Injury Risks Among Indian Athletes. Indian J Orthop 2020; 54: 647-654.
12) Rodas G, Cáceres A, Ferrer E et al. Sex Differences in the Association between Risk of Anterior Cruciate Ligament Rupture and COL5A1 Polymorphisms in Elite Footballers. Genes 2023; 14: 33.
13) Chen Y, Tai Z, Zhu C et al. Vascular Endothelial Growth Factor A VEGFA Inhibition: An Effective Treatment Strategy for Psoriasis. Int J Mol Sci 2023; 25.
14) Pufe T, Kurz B, Petersen W et al. The influence of biomechanical parameters on the expression of VEGF and endostatin in the bone and joint system. Ann Anat 2005; 187: 461-472.

2025 年度　看護研究会（ANA 会）の実践報告

看護学研究科　西上あゆみ

2023 年 4 月より藍野大学修士修了生や関係者を含めた災害看護・看護研究を勉強する研究会（通称 ANA 会）を立ち上げている。主に災害看護学専攻の学生にはなるが、在学生にとどまらず、修士修了生を含め、看護研究や災害看護に興味のある看護師・看護教員に声をかけ、本会を運営している。

主な内容は、１）修士生の研究計画の相談や研究計画発表会に向けた予行、２）修士生、修了生の学会発表の予行、３）参加した学会や研修会の情報交換、４）メンバー間で興味のある看護研究に関する勉強会である。加えて、本会を通じて在学生と修了生の間でネットワークができ、研究の進め方を教わったり、修士論文作成のアドバイス、SPSS の使い方など情報交換の場にもつながっている。各回における実施内容は表のとおりである。

本会ではメーリングリストを用いて ANA 会以外の時でも研究に関する良い情報があれば、メンバー間で情報交換、連絡を取り合うようにしている。会を通じて、本学の修士論文発表会へも積極的に参加されている。

2025 年度のトピックスとしては、参加者有志による病院の災害に関する調査を行った。参加者に病院勤務のものも多く、昨今、病院施設において災害対策はひとつの課題であるともいえ、本会のメンバーに声をかけ、調査を実施することができた。次年度以降で学会発表をめざしてまとめる予定である。

２つめに大学院生と「日本赤十字社合同災害訓練」ならびに「関西医科大学付属病院災害医療訓練」へ参加することができた。「日本赤十字社合同災害訓練」では屋外の災害現場を想定したトリアージや式対策本部設置、屋内では避難所を想定した災害医療の訓練を１日にわたって見学させていただいた。「関西医科大学付属病院災害医療訓練」では大学院に加え、学部生、本学教員も参加したが、被災患者役を体験させていただくことができた。いずれの訓練も ANA 会で情報を共有し、意見交換を行った。

表　2025 年度 ANA 会開催概要

2025 年度 ANA 会（2023 年 4 月発足）

現在参加者：17 名（2026 年 1 月現在）

開催月日と内容

第 1 回	4 月 12 日	9：00-12：00	①学会・研修会の報告
			②メンバーの今年度の抱負
第 2 回	5 月 17 日	9：00-12：00	①メンバーによる病院の防災に関する研究検討
			②研究論文の書き方・勉強会
第 3 回	6 月 14 日	9：00-12：00	①メンバーによる病院の防災に関する研究検討
			②日本赤十字社合同災害訓練参加の報告
			③修了生の学会発表の予行
第 4 回	7 月 27 日	9：00-14：30	看護理論勉強会（平山恵美子先生）
第 5 回	8 月 31 日	9：00-12：00	①学会発表の予行
			②メンバーによる病院の防災に関する研究検討
			③修士生の研究計画発表
第 6 回	10 月 18 日	9：00-12：00	①学会報告
			②修士生の研究計画発表
			③放医研での研修報告
			④メンバーによる病院の防災に関する研究・中間経過報告
第 7 回	11 月 3 日	13：00-16：00	①修士生の秋の研究計画発表の予行
			②修了生による学会発表の予行
			③能登半島地震後 10 月訪問の報告
			④日本災害看護学会まちの減災ナース指導者研修報告
第 8 回	12 月 13 日	9：00-12：00	①学会参加報告
			②関西医科大学付属病院災害医療訓練の報告
第 9 回	1 月 12 日	13：00-16：00	①まちの減災ナースに関する情報提供
			②修士生による現在の研究の進捗状況報告
			③災害看護に関する情報提供
第 10 回	2 月 14 日	9：00-12：00	①修士論文発表会予行
			②研究に関する情報交換

医療法人恒昭会藍野病院 実習指導者対象の研修会実施報告

本多容子、西田千夏、齋藤祥乃、岩佐美香、真鍋由希
阿部宏史、加藤裕規、神田栄美子、高橋えり、山中知子
天野美玖、榮口響大、川端慶子、田中由紀、宮岡裕香、三宅光代

1. はじめに

医療法人恒昭会藍野病院と本学教員の連携強化と、双方の学生指導力の向上を目的として、実習指導者20名対象の研修会を通年で実施した。研修会では看護学部の教員が講師をつとめ、若手教員も聴講した。初めての試みであったが、互に手ごたえを感じ、次年度以降もさらに発展させた形で継続していく事となった。初年度の取り組みを報告する。

2. 研修会の計画

研修会は、藍野病院で実施していた実習指導者研修の日程を利用した。概ね月に一度の講義・演習を本学にて実施した。年間スケジュールを表１に紹介する。

表 1. 研修計画と結果（講師記録）

日程	テーマ	内容／担当者	参加人数	担当者の事後記録
2/14（金）	臨地実習指導者の役割①	ガイダンス 臨地実習の位置づけと成り立ち 担当：藍野大学教授 齋藤祥乃・本多容子	18	最初は固い雰囲気で緊張していた。プリント配布時に、病院管理職が率先して動いたり私事を出したりするため、自主性育成のために見守るよう依頼した。
3/14（金）	臨地実習指導者の役割②	教育心理学 担当：精神看護学教授 河野由理	19	
5/9（金）	実習の指導技術①	教育方法論 担当：教職課程教授 岩佐美香	17	座席指定で開催。グループワークは全員が参加できていた。積極的に質問する参加者がいた。
6/13（金）	実習の指導技術②	「困った学生」への関り方 担当：小児看護学教授 西田千夏	19	（欠席者が多いため）グループワークで 2 人になってしまうグループがあった。ファイルまとめの時間を取ったが、最後まで時間を使った方が良いかもしれない。
9/12（金）	臨地実習指導者の役割③	実習における情報共有 担当：統合看護学講師 真鍋由希	14	実習指導をする中で、情報共有で困ったことを上げてもらい、他病棟のやり方も紹介してもらいながら共有やアドバイスを互いにできた。
10/10（金）	実習の指導技術③	看護倫理 担当：統合看護学講師 真鍋由希	14	倫理についてどのように学びを深めたら良いか体験してもらいながら学びを深めた。※2 名産休、2 名業務多忙で出席困難
11/14（金）	指導技術④	指導案の作成 担当：小児看護学教授 西田千夏	15	学生が何が出来たか考える難しさがあった。言語化することで、自身が学生に何を求めるかをはっきりできたと考える。
12/11（金）	振り返り	茶話会 担当：齋藤祥乃 講義担当教員	18	コーヒーとクッキーを提供、教員も入って茶話会を行った。

なお、参加者には個別のファイルを用意し、研修会毎に感想と学びを記載してもらった。

3. 結果

毎回の研修会で振り返り記録とともに、研修内容の感想を質問形式で尋ねた。振り返りについては、自由に記載しファイルに閉じて提出後、担当者がコメントを書いて返却した。なお、データの提供については、初回に高騰と文書で説明し、毎回同意を得ている。

1)研修内容の質問について

質問内容は、「興味のもてるテーマだった」、「内容が理解できた」、「期待していた内容だった」、「担当者の教え方は分かりやすかった」、「資料は分かりやすかった」、「今日の研修に満足している」の 6 項目であった。回答は、「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」の4件の選択とした。

6 項目全てを同じ数字で答える参加者が半数を超えており、解答の信頼性に疑問がある形となった。しかし、同じ数字ばかりでも、研修会によって数字が違う例や、時に項目毎に回答が異なっていることもあった。次年度以降は質問紙の形式事態を検討する必要があるものの。参考として結果を記す。

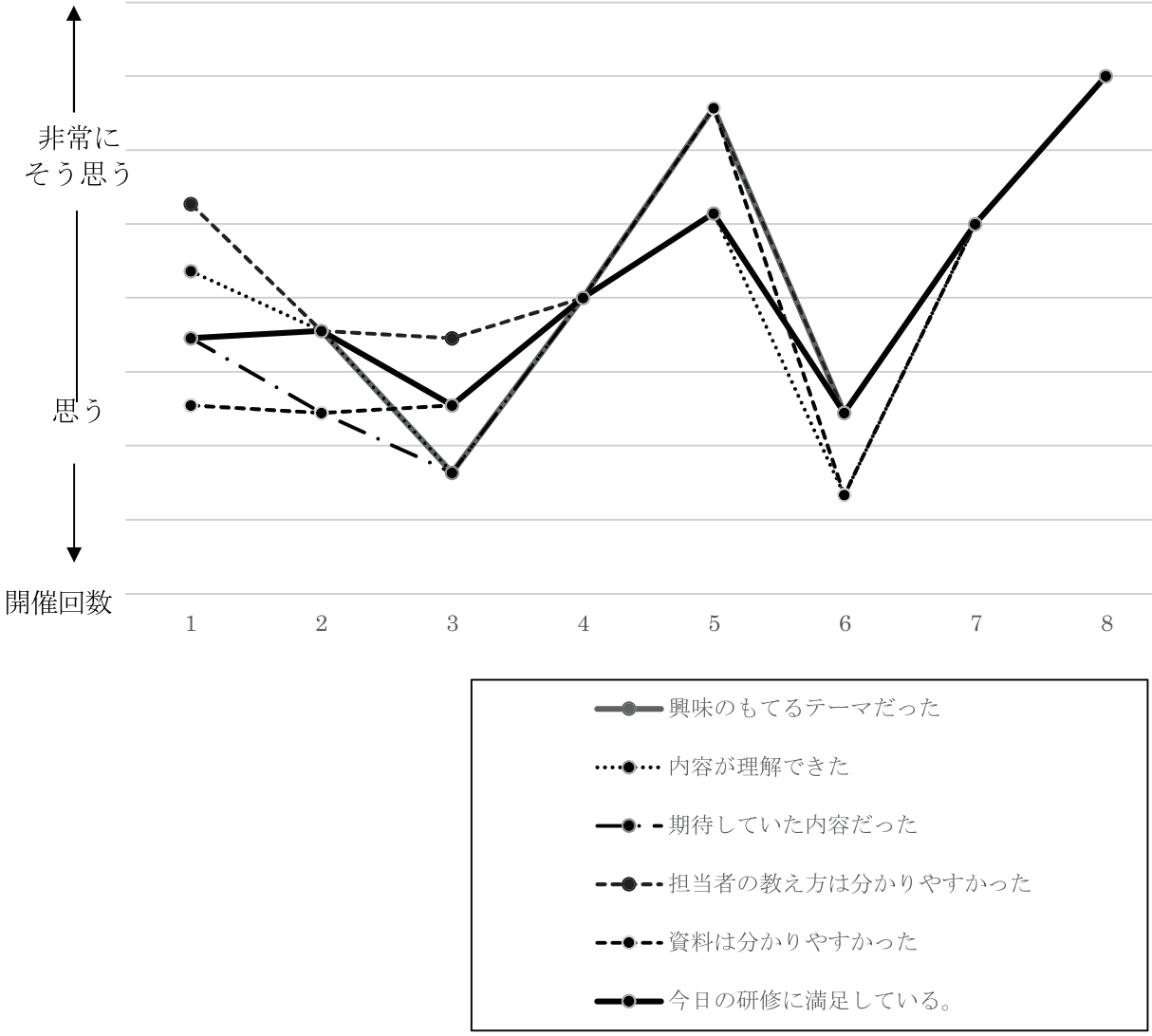


図1.　研修会の感想

2)研修会の感想

研修最終日の振り返りを紹介する。

◎1 年間を通してこの研修を受けることができてとても満足しています。自分自身の考え方が少し変わりました。すぐに行動に移すことは難しいですが、実習の指導中に研修内容を思い出すことは多々ありまし。沢山の学びを得ることができ、とても嬉しいです。

◎これまでの講義を意識して指導に当たることで、学生との関りや教員との関わり方が少しずつ変化してきたように思います。ただ、指導者としてどうかの評価を受けたことはないので、自身の指導やかかわりが良いのか自身は持てずにいます。今後も指導に就く際は、研修での学びを活かして取り組んでいきます。

◎1 年間の講義を通して実習指導者としての役割、学生さんの特性などを学ぶことができた。グループワークなどで他病棟のスタッフと交流することで、悩みを相談し解決方法などを考えることもできて良かった。茶話会では 1 年を通して感じたこと、成長したこと、困ったこと、今後の課題を話すことができて良かった。

◎1 年間を通して実習指導者として関わり、とても良い経験ができた。学生との関り、ひとつひとつを患者に寄り添ってケア内容やカンファレンスでは倫理を考えるテーマがあり、学ぶことが沢山あった。

◎外来では教員の先生とは話す機会があまりないので、貴重な機会でした。年々、学生さんの意欲が高まっていると感じます。病棟実習とは違った実習にはなりますが、今後も興味を持ってもらえるよう実習を受けさせていただきます。スタッフ間でも共有して指導していけたらと思います。

◎この 1 年、様々な講義を通して実習指導者として学びを深めることができました。とても充実した講義時間でした。





4. まとめ

研修会の試みは概ね好評であった。今年度は、講義形式での研修が中心であったが、今後は演習や、指導者と教員の交流をかねたカンファレンスの導入なども取り入れていきたい。また実施結果を厳格に評価できるように、質問紙の導入や、忖度せず記入できるような配慮についても考えていく必要がある。

令和６年（2024）度看護学科卒業生のための看護技術演習実践報告

看護学部　看護学科
西上あゆみ　本多容子　中野玲子　林周子　真鍋由希　松本晃子　齋野貴史　堀川尚子
黄波戸航　松本七十子　髙橋えり　阿部宏史　吉川美和子　山中知子　神田栄美子
宮岡裕香　天野美玖　三宅光代　川端慶子　松浦則子　榮口響大　生藤由紀子
入江里帆

Ⅰ．背景

令和２年度より新型コロナウィルスで影響を受けた看護基礎教育の補填を目的として、本学看護学科において、卒業前看護技術演習実践の企画を行ってきた（文中最後の文献に示すとおり）。令和６年度の実施で５年目となる。また、少しでも臨床に近い状況を作るために藍野病院看護部の協力を得て、臨床から看護師の方にも参加いただき、研修を行った。その実践について報告する。

表１　過去の卒業前看護技術演習

年度	実施	合同開催	参加学生（本学）	参加教員（本学）	発表先、特記事項
令和２年（2020）	2021 年 3 月 9 日、10 日	梅花女子大学	延べ 48 名	17 名	2021 青藍（2022 年発刊） 当日 TV でもニュースで取り上げられる
令和３年（2021）	2022 年 3 月 11 日、14 日	梅花女子大学	延べ 37 名	16 名	藍野大学紀要（2024 年発刊） 藍野大学だけでなく、梅花女子大学でも実施 取材が行われる
令和４年（2022）	2023 年 3 月 9 日	梅花女子大学	32 名	17 名	2023 青藍（2024 年発刊） 藍野病院看護部参加（以後継続）
令和５年（2023）	2024 年 3 月 14 日	摂南大学	第１部 29 名 第２部 49 名	20 名	藍野大学紀要（2025 年発刊） 災害看護学会で発表 私立看護系大学協議会 地区活動プロジェクトモデル事業採択 災害看護演習を取り入れる

Ⅱ．令和６年度祝卒業看護技術フォローアップ研修の概要

1．研修の企画

１）研修日時

2025 年 3 月 13 日 13：00～16：00

２）研修の環境

2024 年度は本学だけでの開催となったこと、卒業式が 3 月 11 日となったため、その 2 日後の 3 月 13 日に企画し、これまで「卒業前看護技術フォローアップ研修」としていたが、「祝卒業看護技術フォローアップ研修」と名称を変更した。また、新人看護師として緊張をもって演習に取り組めるよう、藍野病院看護部に協力を求め、臨床から看護師を派遣していただいた。前年度までのように他大学との共同開催も検討したが、実施には至らなかった。

３）企画した研修内容と各所要時間（表 2）

内容は、過去の学生の希望や反応を踏まえ、3 時間の研修の中で 4 項目の演習ができるようにした。（1）採血・静脈注射、（2）筋肉・皮下注射、(3)経鼻経管栄養、（4）酸素投与・吸引、（5）導尿、(6)職場でのマナー、（7）フィジカルアセスメントであった。(1)採血・静脈注射に関しては例年希望が多いことから、全員が体験できるようにすることとし、残りの 6 項目から 3 項目の演習ができるようにプログラムを作成した。

2. 研修の準備

国家試験前の激励会等でプログラムの説明を行い、manaba を通じて、申し込みができるようにした。藍野病院看護部との調整も行った。看護シミュレーションルーム、母子看護演習室、基礎看護演習室の 3 部屋を使用して実施した。

表 2　演習のタイムスケジュール

時間	内容
13：00～13：05（5）	全体説明
13：05～14：05（60）	採血・点滴（母子演習室で全員で行う）
14：05～14：40（35）	演習①
14：40～15：15（35）	演習②
15：15～15：50（35）	演習③
15：50～16：00（10）	アンケート記入

Ⅲ. 祝卒業看護技術フォローアップ研修に関する調査結果と評価（表 3）

33 名の学生が参加した（当日欠席 4 名）。教員 22 名と藍野病院より臨床看護師 8 名にご協力頂き、学生指導をしていただいた。

学生からのアンケート結果を表 2 に示す。「かなり期待通り」が 15 件、「期待通り」が 7 件で、「少し期待外れ」「期待外れ」と回答した者はいなかった。概ね満足度の高い研修となったと考えられる。

自由記述には、「現場ならではの実践的な話が聞けた」「現場の雰囲気が聞けてよかった」「教科書にないリアルな話が聞けた」など臨床ならではの話を聞くことができたという意見がほとんどであった。幅広い年齢の特徴を捉えた話が聞けてよかったという意見もあり、今後は複数の施設からの臨床看護師に依頼するのも良いのかもしれない。

表 3　祝卒業看護技術フォローアップ研修に関する調査結果

	看護技術の項目名	①期待通り	②かなり期体通り	③少し期待外れ	④期待外れ	⑤実施していない
1	採血・静脈注射	15	5	0	0	0
2	筋肉・皮下注射	12	5	0	0	4
3	経鼻経管栄養	14	3	0	0	4
4	酸素投与・吸引	7	4	0	0	4
5	導尿	13	3	0	0	4
6	職場でのマナー	11	3	0	0	1
7	フィジカルアセスメント	6	1	0	0	4

Ⅳ．参加学生の就職後の不安と研修の意義

参加学生の就業の不安は、ほとんどが人間関係（とくに先輩の記述が多い）であった。その他は少数で、看護技術、ナースコール対応などであった。

今回の看護技術演習は、就職前の支援になったかに関しては、「支援になった」が 20 件、「支援にはならなかった」「どちらともいえない」と回答したものはいなかった。その理由では、「演習から期間があいているため思い出す機会になった」「知識や技術の復習の機会になった」という臨床に出るまえのタイミングに授業での振り返りを行ったことへの満足度や達成感が示唆されるような意見であった。また、「1 対 1 で質問しやすかった」といった良い雰囲気に対する高評価もあり、教員や臨床指導者が多数いることでの手厚さにより満足度が高くなったことも推察される。

Ⅴ．祝卒業看護技術フォローアップ研修の意義と今後の課題

研修中は穏やかな雰囲気であったが、最初の時点では髪をまとめるなどの身だしなみが整っていなかったり、時間ギリギリに来たりするなどめりはりのない態度があったため、事前アナウンスの徹底の必要性がある。

学生からは「時間がほしかった」という意見が数件あった。しかし、おそらく途中で帰宅した学生もおり、学生のニーズによって必要な時間が異なると考えられる。採血と静脈注射は時間が 20 分押したので、次年度以降の課題とする。

臨床看護師からは「新卒として入職する学生の様子が見られてよかった」「学生は積極的な姿勢があり印象が良かった」といった意見が聞かれた。また、「今の看護基礎教育の環境を見ることが出来たことも良い機会であった」という意見も聞かれ、とくにシミュレーターなどは指導者レベルが経験した教育と現在で異なっているとのことであった。

謝辞

本研修を実施するにあたり、ご参加いただいた藍野病院看護部の看護師の皆様におかれましては、研修中の指導で大変お世話になりました。ご支援いただきましたことに御礼を申し上げます。

文献

中山由美、重年清香、渡邉敦子（2021）COVID-19 禍における看護学生への卒業直前看護技術フォローアップ研修、梅花女子大学紀要、12、pp26-32

松本晃子(2021) コロナ禍の看護大学 4 年生への実習に対する取り組み、日本災害看護学会 HP「What's New 災害看護メッセージ-備え-」、http://www.jsdn.gr.jp/CMS/wp-content/uploads/ff0e0d16a20c0fd76cd84ecd43b199a8.pdf(2021/9/28)

西上あゆみ他（2022）令和 2 年度看護学科卒業生のための卒業前看護技術演習実践報告、青藍、pp44-48

松本晃子他(2023)4 年生の入職前の不安を払拭！卒業前フォローアップ研修前編、看護人材育成 Vol.20、№4、pp44-48

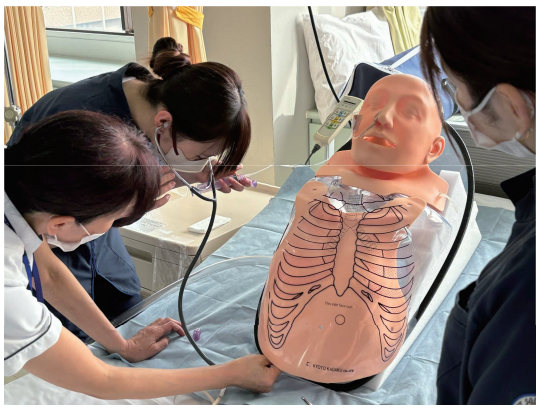
松本晃子他(2023) 4 年生の入職前の不安を払拭！卒業前フォローアップ研修後編、看護人材育成 Vol.20、No.5、pp56-61

米澤知恵他(2023)新型コロナウィルス感染症流行下における卒業前技術フォローアップ演習に関する実践報告、藍野大学紀要 Vol.35、pp9-15

西上あゆみ他（2024）令和 4 年度看護学科卒業生のための卒業前看護技術演習実践報告、青藍、pp48-51

松本晃子他（2025）看護基礎教育における他大学と臨床を交えた就業前研修の取り組み －祝卒業フォローアップ研修アンケートの分析－、藍野大学紀要、Vol.37 、p.71-77









AinS-Lab.完成内覧会および看護学部開設記念イベントの開催

看護学部看護学科　藤本智美・古澤朗子・和田恵美子・本多容子

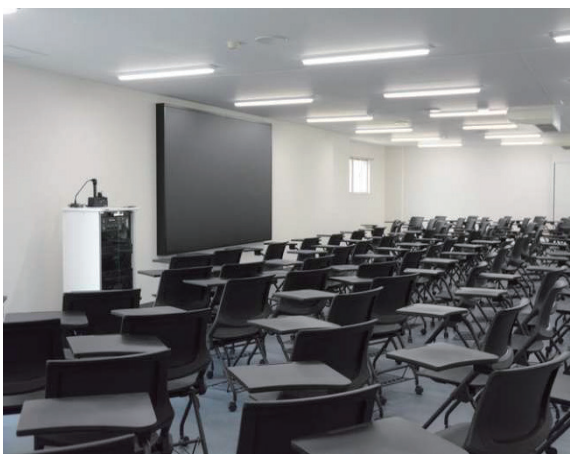
2025 年度の看護学科における主な出来事の一つとして、環境再現に特化した演習室「AinS-Lab.」の完成内覧会および看護学部開設記念イベントを開催した。AinS-Lab.は、コロナ禍において制約を受けた看護教育を見直し、より質の高い教育環境を整備したいという思いを契機として構想が始まり、約 5 年にわたり検討が重ねられてきた環境再現型シミュレーション施設である。

本施設の整備にあたっては、看護教育の充実にとどまらず、地域の方々にも還元できる場とすることを目指し、既存建物を活用したリノベーション計画が立案された。従来、小分けにされていた複数の部屋の壁を取り払い、多くの人が利用可能な広い空間とすることで、教育・交流の双方に資する施設づくりが行われた。

AinS-Lab.は、学生および医療従事者の臨床判断力、技術力、コミュニケーション能力の育成・強化を目的としたシミュレーション施設であり、実際の現場に限りなく近い環境を再現することに特化して整備されている。地域で生活する対象者の暮らしを想定した居住空間を再現するとともに、4 台の大型電子黒板を活用し、病室や屋外の風景など多様な環境を映像で再現できるシミュレーションスペースを備えている。また、演習の様子をカメラで録画し大型 LED モニターに投影することで、学生が自身の関わりを客観的に振り返る学習環境を整備している点も本施設の特徴である。









AinS-Lab.完成内覧会および看護学部開設記念イベントは、2025 年 8 月 5 日（火）に AinS-Lab.において開催された。当日は記念講演として、岩渕亜希子先生（追手門大学地域創造学部地域創造学科）、勝部麗子先生（大阪府豊中市社会福祉協議会）を講師として迎え、「地域と大学の共創―未来を拓くパートナーシップ―」をテーマにご講演をいただいた。続いて開催された記念シンポジウムでは、本学教員の原田小夜先生が座長を務め、岩渕亜希子先生、勝部麗子先生に加え、本多容子先生（本学看護学部長）がシンポジストとして登壇し、看護教育や地域と大学との協働、人材育成の在り方について多角的な視点から意見交換が行われた。









当日は、学内外の大学教員、地域の医療機関に勤務する医療従事者、行政関係者など 47 名が参加し、参加者からはシンポジウムの内容が興味深かったとの声が寄せられた。また、施設見学会では、今後の施設活用の可能性について活発な意見交換が行われ、本施設の教育的・実践的意義、地域と大学との協働について理解を深める機会となった。

今後、AinS-Lab.は、病棟や在宅療養環境を再現した看護学生向けシミュレーション演習、保健師による家庭訪問や健康診査を想定した演習への活用をはじめ、看護師、保健師、ケアーマネージャー、社会福祉士、介護福祉士、ホームヘルパー等を対象とした現任教育の場としての活用を予定している。さらに、精神疾患患者とのコミュニケーション研修、認知症サポーター養成研修やゲートキーパー養成研修、地域ケア会議の開催拠点、地域住民とのリスクコミュニケーションや健康教育の場としても活用を広げていく予定である。

本施設の活用を通して、教育・実践・地域を有機的に結び付け、人々の心と身体の健康を支える看護人材の育成に一層寄与していくことが期待される。

反復末梢磁気刺激（rPMS）の導入による
パーキンソン病患者の QOL 向上と地域連携構築への試み

作業療法学科　宮本陳敏

本プロジェクトは藍野大学地域連携プロジェクトの助成を受けて行われた活動です。

はじめに

パーキンソン病（Parkinson's Disease: PD）は、中脳黒質のドパミン神経細胞の脱落を主徴とする進行性の神経変性疾患である。運動症状（振戦、筋強剛、無動、姿勢反射障害）は患者の日常生活動作（ADL）を著しく制限し、介護を担う家族への負担も大きい。現在、薬物療法や深部脳刺激療法（DBS）が一般的であるが、リハビリテーション領域における新たな非侵襲的介入手段の確立が急務となっている。

目的

本プロジェクトは、藍野病院リハビリテーション科との緊密な連携のもと、新たな介入技術である「反復末梢磁気刺激（Repetitive Peripheral Magnetic Stimulation: rPMS）」を導入することを目的とした。rPMS による PD 患者の症状緩和および QOL 向上を目指すとともに、病院が実施する「パーキンソン教室」や教育入院を通じた、セラピスト（OT・PT）・患者・家族間の包括的な地域連携モデルの構築を目標とする。

事業内容と実施計画

本プロジェクトは、新規技術の安全な定着から臨床的エビデンスの確立、そして地域社会への還元までを視野に入れ、以下の二期にわたる段階的な計画に基づき遂行している。

第一期プロジェクトでは「基盤構築」を主眼に置き、反復末梢磁気刺激装置の円滑な導入を推進した。具体的には、医療現場における機器の物理的なセットアップに加え、臨床に携わる医療従事者に対して、高度な機器操作の習熟および禁忌事項を含む安全管理体制の徹底を図った。これにより、次段階の臨床応用に向けた確実な運用基盤を整備した。

第二期プロジェクトにおいては「臨床応用とエビデンス構築」へと展開を広げている。最新の文献抄読や症例報告を通じて先行研究における治療エビデンスを深く探求するとともに、実際の症例研究から得られる臨床データの収集と解析を並行して実施する。さらに、これらの活動を通じて得られた専門的知見を、単に学術的な成果に留めるのではなく、地域の医療機関や患者・その家族へと積極的にフィードバックしていく。この一連のプロセスにより、地域全体でのケアの質の向上と、最新技術に基づいた包括的な支援体制の確立を目指す。

第一期プロジェクトの結果報告

医療従事者への研修実施

2025 年 9 月 10 日、藍野病院リハビリテーション科において、磁気刺激装置の適切な運用と安全管理を目的とした実技研修会を開催した。参加者は藍野病院のリハビリテ―ション科のリハビリ医師・作業療法士・理学療法士・言語聴覚士の 30 人程度であった。

研修の前半では、機器メーカーの技術者より、磁気刺激の物理的原理や解剖学的な刺激ターゲット、さらにはペースメーカー装着者に対する禁忌事項といった安全上の留意点について詳細な講義が行われた。

後半の技術指導では、機器メーカーの技術者と本学作業療法学科の津田・宮本が主導し、参加者を対象とした実技訓練を実施した。そこでは、実際の臨床場面を想定したプローブの適切な貼付部位や、患者の筋緊張状態に応じた出力設定の微調整など、治療効果を最大化するための具体的な操作技術について踏み込んだ指導が行われた。これにより、受講したセラピストは基礎知識から臨床応用までを体系的に習得する機会を得た。

装置の導入と試験的運用の現状

現在、磁気刺激装置は病院内に配備され、リハビリテーション科医師の処方と監督のもとで試験的な運用が開始されている。

利用状況については、当初主軸として想定していた作業療法（OT）領域に留まらず、理学療法（PT）の場面においても、歩行訓練の前処置や筋緊張緩和のための補助的手段として積極的に活用が進んでいる。

対象疾患はパーキンソン病患者を中心に据えつつも、意思疎通が良好な中枢神経系疾患患者や、自主的な運動が困難な廃用症候群患者など、幅広い症例に対して適応範囲を拡大している。このように、多職種が連携して活用することで、各疾患の特性に応じた磁気刺激の有効な介入プロトコルについて、現在多角的な検討を行っている。

第二期プロジェクトの展開（これからの課題）

症例研究とデータ収集の実施体制

第二期プロジェクトの核心となる症例研究においては、リハビリテーション科医師による医学的判断に基づき、磁気刺激の導入許可を得た患者を対象としている。実際の介入にあたっては、前述の研修を修了し習熟した作業療法士が担当し、リハビリテーション科長の厳密な監督体制のもとで安全かつ効果的な適用を図っている。

効果検証のためのモニタリング項目は、多角的な視点から設定した。具体的には、パーキンソン病の総合的な病態を評価する UPDRS（パーキンソン病統一スケール）を主指標とし、身体機能の客観的指標として関節可動域（ROM）および筋緊張度（Modified Ashworth Scale）を計測する。さらに、患者自身の主観的な症状変化や満足度を定量化するため、VAS（視覚的評価スケール）を用いた自覚的改善度の評価を併せて実施する。これらのデータを継続的に集積・解析することで、磁気刺激が患者の身体機能および生活の質（QOL）に与える影響を、科学的エビデンスに基づいて検証していく。

地域連携の強化と啓発活動の展開

本プロジェクトでは、単なる技術導入に留まらず、得られた知見を地域へ還元するためのフィードバック体制の構築を重視している。具体的には、臨床現場で蓄積されたデータを詳細に解析し、リハビリテーション会議や患者・家族指導の場を通じて多職種および家族間での情報共有を図っている。こうしたプロセスを経て、病院内での治療成果を在宅生活のケアプランへ反映させることで、シームレスな支援体制の構築と在宅ケアの質的向上を目指している。

また、最新療法の普及と正しい理解を促すため、患者およびその家族を対象とした啓発活動を積極

的に展開している。病院が主催する「パーキンソン教室」の枠組みを活用し、磁気刺激の作用機序や期待される臨床的効果について、専門用語を避け平易な表現で解説するセミナーを定期的に開催できることを期待したい。こうした活動を通じて、患者自身が治療の選択肢を正しく理解し、前向きにリハビリテーションに取り組める環境を整備するとともに、地域全体における最新知見の普及に努めていきたい。

考察と期待される成果

臨床的有効性の検証

rPMS は深部筋肉や神経根を直接刺激できるため、従来の電気刺激療法（TENS 等）で課題となっていた皮膚の痛みや不快感を軽減しつつ、高い筋収縮を誘発できる利点がある。PD 特有の筋強剛に対する改善効果が実証されれば、運動療法の効率化に大きく寄与する。

セラピストの技術向上と教育的意義

大学（教員）と病院（臨床現場）が共同で新規技術の導入に取り組むことで、療法士のクリニカル・リーズニング（臨床推理）能力が高まり、最新のエビデンスに基づいたリハビリテーションの提供が可能となる。

包括的支援体制の構築

末梢磁気刺激という「新たな介入手段」を共通言語とすることで、医師・療法士・患者・家族のコミュニケーションが活性化される。これは、単なる技術導入に留まらず、地域全体で PD 患者を支える包括的なケアシステムのモデルケースになればと期待したい。

おわりに

本プロジェクトは、最先端の工学的技術を臨床現場へ橋渡しする試みであり、第一期における導入プロセスは極めて円滑に進行した。今後は第二期のデータ集積を加速させ、学術大会等での発表を通じてその成果を広く社会に還元していく所存である。

謝辞

本活動は地域連携プロジェクト助成金を受け、藍野病院リハビリテーション科の全面的な協力のもと行われています。ここに深く感謝の意を表します。


開催時間：
2025.9.10
（水）
16:00-17:00
開催場所：
藍野病院
リハビリ科
作業療法室
参加対象者：
医療職の方はどなたでも参加可能
（飛び入り参加可能）
2025.9.10（水）
反復末梢磁気刺激装置
（PATHLEADER）の
開発の背景と臨床応用
主催者：
藍野大学作業療法学科
藍野病院







藍野大学医療保健学部臨床工学科における模擬手術室を活用した実習の取り組み

臨床工学科　山﨑康祥

１．はじめに

近年、臨床工学技士の役割は拡大しており、特に手術分野においては、手術支援ロボットや手術ナビゲーションシステムの操作など医療機器の進歩ともに扱う機器の種類が増えている。2021 年度の臨床工学技士法改正では、麻酔補助業務や鏡視下手術における清潔野でのカメラ操作、末梢静脈路の確保および輸液ポンプやシリンジポンプを用いての薬剤投与などが認められ、外科手術や全身麻酔の一翼を担う位置づけとなっている（表 1）。

表１．2021 年度の法改正により臨床工学技士の業務に追加された項目

手術室等で生命維持管理装置や輸液ポンプ・シリンジポンプに接続するために静脈路を確保し、それらに接続する行為
輸液ポンプやシリンジポンプを用いて薬剤（手術室等で使用する薬剤に限る。）を投与する行為、投与終了後に抜針及び止血する行為
心・血管カテーテル治療において、身体に電気的負荷を与えるために、当該負荷装置を操作する行為
手術室で行う鏡視下手術において、体内に挿入されている内視鏡用ビデオカメラを保持し、術野視野を確保するために操作する行為

２．模擬手術室　クリニカル・スキル・ラボ（C-Lab.）

本学では、令和 7 年 4 月にクリニカル・スキル・ラボ（C-Lab.）として模擬手術室が開設された。全国的にも希少な本格的な設備を有する手術室で、専有面積は 82.2 ㎡と一般的な手術室よりもかなり大きく、臨床工学技士と関わりの深いロボット支援手術やハイブリッド手術といった最先端医療にも対応できる規格を有している。二方向に見学窓を有しており外部から手術中の様子を見学できるようになっており、これによって手術進行や医療機器の操作や動きも把握できるようになっている。

手術室内は、患者や医療従事者に安心感を与え、リラックス効果をもたらすように配慮した自然な配色となっている。全身麻酔のための設備である医療ガス配管（酸素・空気・吸引）と医用規格の３P コンセントが設備されており、麻酔器や人工呼吸器、人工心肺装置、閉鎖式保育器、補助循環装置（経皮的心肺補助装置・大動脈バルーンパンピング装置）といった手術室で用いられる医療機器が稼働させることができるほか、アイソレーションモニタ（絶縁監視装置）により、24 時間体制で医療機器の絶縁不良を常時監視しており、電気設備の絶縁状態を可視化できるシステムや麻酔余剰ガス排出装置なども備えており、実習に適した環境を提供している。

無影灯は、ダブルアームで、高演色 LED（Ra96）を使用したリフレクター方式で、太陽光に極めて近い均質な光で術野を照射できるようになっており様々な手術に対応できる（図３）。



図３．模擬手術室の無影灯

３．模擬手術室で運用できる医療機器

模擬手術室では、設備だけでなく豊富な医療機器を取り揃えており、ガウンテクニックや清潔不潔の概念などの基本的な実習から、人工心肺装置や麻酔器、内視鏡システムの運用が可能であり、これらを用いた専門的かつ高度な実習に対応できる（表２）。

表２．模擬手術室に設置されている医療機器

名称	数量
麻酔器 GE healthcare 600	1
手術台　DR-2600	1
患者監視装置　BSM-5700	1
電気メス　ZERUK-W	1
除細動器　TEC-5600	1
吸引器（壁掛け式）	1
人工心肺装置　HAS-Ⅱ	2
心筋保護装置　HCP-5000	1
冷温水槽　HHC-21	2
手術用鋼製小物（胸部外科一般）	1
手術用鋼製小物（腹部外科一般）	1
3 連メーヨー台	1
手術用手洗い装置（2 人用）	2
超音波診断装置	2
手術用内視鏡システム	1
硬性鏡（0°30°）	2
内視鏡映像共有ディスプレイモニタ	1
閉鎖式保育器	1

４．模擬手術室でおこなう実習科目の活用事例と効果

模擬手術室では、各種の医療機器が実際に臨床で使用している状況を想定して実習できることに大きな利点を有している。実際の手術室では多種多様な医療機器が同時に使用されており、また術野の妨げにならないように配置、運用することは医療従事者にとって大変重要なスキルとなる。また多くの医療機器は互いに干渉することもあり、ときに事故につながる危険性もある。単に医療機器を学ぶだけでなく、実際の臨床を想定した運用方法の修得には、模擬手術室のように実際の臨床での使用環境が必要である。これらの背景から臨床工学科では多くの科目で、模擬手術室を使った実習をおこなっている（表３）。また看護学部では、手術室での帝王切開での看護や基礎看護学実習での輸液ポンプやシリンジポンプの使用に関する実習で活用されている。

表３．臨床工学科における活用事例

科目名	模擬手術室の活用内容	効果
（1）臨床工学概論Ⅰ	手術室の患者や機器の配置についてのオリエンテーションに使用	手術室内でどのような使われ方を知ることができ、運用にフィードバックすることができる
（2）医用治療機器学実習Ⅰ・Ⅱ	電気メスの実習	電気メスを手術室で使用する際に発生する熱傷事故や対極板と機器本体の位置、手術台（患者）との位置関係を把握することができ実践的な実習ができる。
（3）臨床支援技術学	ガウンテクニックおよび清潔不潔の器具の取り扱いについて実習 手術用内視鏡システムの実習	手術室内での立ち振る舞い、清潔介助を行う場合の移動や手技、間接介助者との間隔の把握 内視鏡システムについては、清潔と不潔との境界を理解したうえでの取り扱い
（4）生体機能代行装置学実習Ⅰ・Ⅱ	補助循環装置・人工心肺装置の実習	患者を中心に可動域を考えて運用する実習がおこなえる。
（5） 手術実践実習	麻酔器・患者監視装置・電気メス・除細動器・体外式ペースメーカ、手術直接介助・間接介助、人工心肺装置・心筋保護装置を実際の心臓血管外科手術を模擬して実践的実習をおこなう	各種の医療機器との相互干渉を考えてシミュレーションができ、また術者との位置関係を把握しながら実践的な実習ができる。

（1） 臨床工学概論Ⅰ

臨床工学概論Ⅰは１年前期に開講され、臨床工学技士がどのような仕事をしているかを学ぶ講義である。そのためには多くの医療機器の種類や役割を学んでいく必要があり、実際にどのような環境で使われているかをイメージすることが重要となる。模擬手術室では、電気メスや患者モニタ、麻酔器、人工心肺装置といった臨床工学技士が扱う主要な機器があり、実際に触れて操作を体感することができ、今後、理論を理解していくうえで重要なエッセンスとなっている。医療機器の配置やセッティングなども臨床工学技士の重要な業務のひとつであり、各医療機器の使用状況を考えての移動や配置することなどについて深い理解が得られている。

（2） 医用治療機器学実習Ⅰ・Ⅱ

医療治療機器学実習で扱う電気メスは、手術室で用いられる代表的な医療機器である。運用上でしばしば問題となるのは、感電事故や熱傷事故である。これらの実習は実際に手術台や周辺機器を配置した状況でおこなうことで理解に結び付く。また清潔器械台や術野の立ち位置によってメス先電極の脱落や対極板が引き剝がされるなどの事例も模擬手術ならではの再現が行なえることで、より高いレベルでの実習ができる。

（3） 臨床支援技術学

臨床支援技術学は、清潔不潔の概念と滅菌グローブの装着、手術用ガウンの着脱などに模擬手術室を活用している。臨床工学技士業務のうち、清潔介助業務は近年増加傾向にあり、まさに実践力を身に着ける科目のひとつとなっている。手術室では、清潔者、清潔野に背を向けないなどの間接介助者の基本的な立ち振る舞いが学べるとともに、清潔者が手術室内でどのように術野に入るかなどについてもレクチャーすることができている。実際の手術と同じ環境ができることで、手術器械の取り扱い、受け渡し、不潔野からの清潔物品の受け取りなど幅広い技術を学ぶことができている。

内視鏡システムについては、実際に手術台に腹腔モデルを配置し腹腔鏡手術を模擬した実習がおこなえる。内視鏡の操作および間接介助者と連携して本体との接続、ホワイトバランスの設定など、実践的な実習が展開できている。内視鏡カメラと本体、ディスプレイの位置関係は、清潔部位に配慮した配置が必要で、かつ内視鏡カメラの稼働制限がかからないようにする必要があるが、このような運用上の技術も模擬手術室だからこそ実現できている。

（4） 生体機能代行装置学実習Ⅰ・Ⅱ

この科目では、血液浄化装置、人工呼吸器、人工心肺装置の実習をおこなっていくが、そのうち人工心肺装置の実習を模擬手術室でおこなっている。人工心肺装置は、通常、心臓血管外科手術で使用されるものであるため、実際の現場と同じような環境で実習ができることになる。周辺機器として、冷温水槽や心筋保護装置といった機器も同時に操作していくため、手術台を中心に配置したうえで、すべての機器が同時に動かせるようにレイアウトしていく必要がある。またこれらの装置は、幾本もの血液が通るチューブによって患者と接続されているため、手術台に近い位置で操作する必要があるが、そこには麻酔器や術者などがひしめいており、限られたスペースでの操作をおこなうには高い技術力が必要となる。これらの実習には模擬手術室の環境が必須であり、実践力の獲得に結びついている。

（5） 手術実践実習

手術実践実習では、3 年後期までに修得した知識理論の集大成ともいえる位置付けの科目である。麻酔器をはじめとして、患者監視装置・電気メス・除細動器・体外式ペースメーカ、手術直接介助・間接介助、人工心肺装置・心筋保護装置など、手術室で用いられる、あらゆる医療機器を自分達の手で操作・運用をおこなう内容となっている。ここで学生達は実習時間のみならず、課外でも自己練習に使用している。模擬手術室の環境があることで、実際の現場に近い形で練習がおこなえることで、操作技術のみならず、使用上のトラブルや合併症に対する対処などの安全性の向上、効率的運用までをも付加的に身に着けていくことができている。

5．まとめ

臨床工学技士の手術室における役割は拡大しつつある。藍野大学医療保健学部臨床工学科における模擬手術室を活用した実習の取り組み事例について報告した。手術室で活躍する臨床工学技士の教育環境として模擬手術室の有益性は高く、さらに通常の実習室では得られない付加的な技術を身に着けることができると考えている。

臨床工学技士職業体験　in あいの祭

藍野大学医療保健学部臨床工学科　新田佳伯

臨床工学技士の行う仕事内容が増え、今まで以上に医療現場で重要な役割を担っていますが、臨床工学技士の認知度が低く、養成校の定員数と国家試験受験者数に乖離が生じています。本学では、オープンキャンパスや高校訪問、SNS を用いて本学の特徴だけでなく、臨床工学技士の認知度を広める活動を行なっています。毎年 10 月に行われる大学祭（あいの祭）は、年齢層問わず来校できることから臨床工学技士を広く知ってもらえる機会と考えることができるため、臨床工学技士の認知度を高めることを目的として、本学の施設紹介も含めた臨床工学技士職業体験を実施しました。

臨床工学技士職業体験 in あいの祭を開催するにあたり、広報活動として臨床工学技士職業体験のチラシを作成、配布しました。また茨木市教育委員会、大阪府臨床工学技士会の後援をいただきました。大阪府臨床工学技士会からは 3 名の臨床工学技士の方に来ていただき、職業体験だけでなく、実際の医療現場における臨床工学技士の役割や活躍などを話していただきました。本学からも教員が 5 名参加し、教育現場の話や実習の必要性などを話しました。職業体験内容と担当講師を表 1 にまとめます。

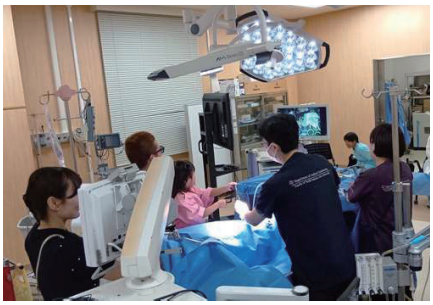
表 1 臨床工学職業体験内容と担当講師

肺モデルの工作	藍野大学医療保健学部臨床工学科　教員
内視鏡の取り扱い体験	藍野大学医療保健学部臨床工学科　教員
BLS 体験	大阪府臨床工学技士会　臨床工学技士
人工心肺装置の操作	大阪府臨床工学技士会　臨床工学技士
透析の原理および機器展示の説明	藍野大学医療保健学部臨床工学科　教員

あいの祭の来場者には、作成した臨床工学技士職業体験のチラシを配布し、肺モデルの工作、内視鏡の取り扱い体験、BLS 体験、人工心肺装置の操作体験、透析の原理および機器展示の説明を聞いてもらいました。また臨床工学技士会のマスコットキャラクター（シープリン）も参加していただき、アットフォームな雰囲気の中、開催することができました。参加者へのアンケートはとっていませんが、職業体験後、「臨床工学技士という医療職を覚えておきます。」「これからの医療に必要な職業ですね。」「人工心肺装置の大きさに驚きました。」「医療機器に触れて楽しかった。」「内視鏡の扱い方が難しかった。」という声をいただきました。また保護者には、藍野大学の施設の充実さに感銘された方も多くおられました。保護者含め約 80 名の方に参加していただき、当初の予定である 100 名には届きませんでしたが、大変意義のある機会となりました。

来年度は、広報活動を今年よりも早い時期に行えるよう企画運営していこうと考えております。

イベントの様子



内視鏡操作体験



人工心肺装置操作体験



シープリンと手術室



臨床工学技士職業体験のチラシ

学年暦・学生の状況

2025（令和 7）年度　学年暦

事　　項	2025 年度
始業	4 月 1 日（火）
入学式	4 月 2 日（水）
前期各種ガイダンス	4 月 1 日（火）～ 4 月 4 日（金）
前期授業開講	4 月 7 日（月）
履修登録締切（新入生） 履修登録締切（在校生）	4 月 4 日（金） 3 月 21 日（金）
創立記念日	5 月 1 日（木）
前期履修中止申請期間	①　4 月 23 日（水）～ 4 月 24 日（木） ②　6 月 25 日（水）～ 6 月 26 日（木）後半科目のみ
補講 試験日を含む	5 月 10 日（土）、 5 月 31 日（土）、 6 月 21 日（土）、 7 月 5 日（土）、7 月 19 日（土） 8 月 4 日（月）～ 8 月 8 日（金）
前期授業終了 試験日を含む	8 月 1 日（金）
夏期休暇	8 月 10 日（日）～ 9 月 20 日（土）
後期履修ガイダンス	9 月 22 日（月）
後期授業開講	9 月 24 日（水）
後期履修登録修正期間	9 月 9 日（火）～ 9 月 11 日（木）
あいの祭	10 月 18 日（土）～10 月 19 日（日）
後期履修中止申請期間	①　10 月 8 日（水）～10 月 9 日（木） ②　12 月 10 日（水）～12 月 11 日（木）後半科目のみ
冬期休業	12 月 27 日（土）～ 1 月 7 日（水）
後期授業再開	1 月 8 日（木）
補講 試験日を含む	10 月 11 日（土）、11 月 1 日（土）、 11 月 29 日（土）、12 月 20 日（土） 1 月 10 日（土）、1 月 28 日（水） 2 月　4 日（水）～ 2 月 20 日（金）
後期授業終了 試験日を含む	2 月 3 日（火）
学位記授与式	3 月 10 日（火）
春期休業	3 月 14 日（土）～ 3 月 31 日（火）
終業	3 月 31 日（火）

収容定員および在学する学生数等（藍野大学ホームページより）

(1)　収容定員および在籍学生数（2025 年 5 月 1 日現在）

医療保健学部

学部・学科等	入学定員	収容定員	学年別在籍者数				在籍者数	収容定員充足率
			1 年	2 年	3 年	4 年		
看護学科	―	345	―	119	124	129（11）	372	1.08
理学療法学科	80	380	105	99	109	119（10）	432	1.14
作業療法学科	40	160	39	24	44	44（9）	151	0.94
臨床工学科	30	150	18	27	20	32（8）	97	0.65
健康科学科	30	30	11	―	―	―	11	0.37
医療保健学部	180	1,065	173	269	297	324	1,063	1.00

看護学部

学部・学科等	入学定員	編入定員	収容定員	学年別在籍者数				在籍者数	収容定員充足率
				1 年	2 年	3 年	4 年		
看護学科	115	2	115	128	―	―	―	128	1.11

臨床工学専攻科

学部・学科等	入学定員	収容定員	学年別在籍者数	在籍者数	収容定員充足率
			1 年		
臨床工学専攻科	10	10	―	―	0

※4 年次の（　）は、留年者内数。1～3 年次における留年制度を設けていないため 4 年次までは自動的に進級し、必要な必修科目の単位を修得していないと 4 年次で留年となる。

看護学研究科

学部・学科等	入学定員	収容定員	学年別在籍者数		在籍者数	収容定員充足率
			1 年	2 年		
看護学研究科	6	12	6	10（6）	16	1.33

健康科学研究科

学部・学科等	入学定員	収容定員	学年別在籍者数		在籍者数	収容定員充足率
			1 年	2 年		
健康科学研究科	6	12	9	6	15	1.25

※2 年次の（　）は、留年者内数。1 年次における留年制度を設けていないため 2 年次までは自動的に進級し、必要な必修科目の単位を修得していないと 2 年次で留年となる。

(2)　退学者数および除籍者数等

退学者数

年度	学科	1年	2年	3年	4年	合計
2022（令和4）	看護	2	0	0	5	7
	理学療法	2	7	3	1	13
	作業療法	0	4	1	5	10
	臨床工学	2	2	2	2	8
	合計	6	13	6	13	38
2023（令和5）	看護	2	2	2	0	6
	理学療法	4	4	5	0	13
	作業療法	1	3	0	0	4
	臨床工学	0	3	4	2	9
	合計	7	12	11	2	32
2024（令和6）	看護	7	2	1	2	12
	理学療法	3	4	3	1	11
	作業療法	0	0	2	0	2
	臨床工学	1	2	3	3	9
	合計	11	8	9	6	34

退学の理由（複数回答あり）

年度	学科	就学意欲の低下	進路変更（他学校）	進路変更（就職等）	経済的困難	学力不足	身体疾患	心身衰弱	海外留学	その他
2022（令和4）	看護	2	3	1	1	0	0	0	0	0
	理学療法	4	5	1	0	3	0	0	0	0
	作業療法	3	7	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	2	3	1	1	1	0	0	0	0
	合計	11	18	3	2	4	0	0	0	0
2023（令和5）	看護	3	3	0	0	0	0	0	0	0
	理学療法	3	7	0	0	2	0	1	0	0
	作業療法	3	1	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	1	3	3	0	1	0	1	0	0
	合計	10	14	3	0	3	0	2	0	0
2024（令和6）	看護	2	5	0	3	2	0	0	0	0
	理学療法	3	7	0	1	0	0	0	0	0
	作業療法	0	1	0	1	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	5	1	0	1	0	1	0	1
	合計	5	18	1	5	3	0	1	0	1

除籍者数

年度	学科	1年	2年	3年	4年	合計
2022（令和4）	看護	1	0	0	0	1
	理学療法	0	1	0	0	1
	作業療法	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	1	0	0	1
	合計	1	2	0	0	3
2023（令和5）	看護	0	0	0	0	0
	理学療法	0	0	0	0	0
	作業療法	0	0	0	0	0
	臨床工学	1	1	0	0	2
	合計	1	1	0	0	2
2024（令和6）	看護	0	1	0	0	1
	理学療法	0	0	0	1	1
	作業療法	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0
	合計	0	1	0	1	2

除籍の理由

年度	学科	就学意欲の低下	進路変更（他学校）	進路変更（就職等）	経済的困難	学力不足	身体疾患	心身衰弱	海外留学	その他
2022（令和4）	看護	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	理学療法	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	作業療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	3
2023（令和5）	看護	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	理学療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	作業療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	2
2024（令和6）	看護	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	理学療法	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	作業療法	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	臨床工学	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	2

看護学研究科

退学者数

年度	研究科	1年	2年	合計
2022 （令和4）	看護学	0	0	0
2023 （令和5）	看護学	0	1	1
2024 （令和6）	看護学	0	0	0

除籍者数

年度	研究科	1年	2年	合計
2022 （令和4）	看護学	0	1	1
2023 （令和5）	看護学	0	0	0
2024 （令和6）	看護学	0	0	0

健康科学研究科

退学者数

年度	研究科	1年	2年	合計
2024 （令和6）	健康科学	0	－	0

除籍者数

年度	研究科	1年	2年	合計
2024 （令和6）	健康科学	0	－	0

看護学研究科

大学院に入学した者のうち標準修業年限以内で修了した者、退学した者、修了していない左記以外の者の占める割合

	入学者数	標準修業年限以内で 修了した学生数(割合)	修了せずに退学した 学生数（割合）	修了年限以内で修了していない 左記以外の学生数（割合）
2022 （令和4）	7	1（14%）	1（14%）	5（71%）
2023 （令和5）	8	2（25%）	0（ 0%）	6（75%）

標準修業年限以内で修了していない原因

	長期履修	就業先の事情	就学意欲の低下	その他
2022 （令和 4）	5 （83%）	0 （ 0%）	1 （17%）	0 （ 0%）
2023 （令和 5）	5 （83%）	1 （17%）	0 （ 0%）	0 （ 0%）

修了した者のうち、学位を取得するために要した年数ごとの修了者の割合

	修了者数	2 年（標準修業年限）	3 年（長期履修・留年等）	平均修了年数
2023 （令和 5）	4	1 （25%）	3 （75%）	2.75 年
2024 （令和 6）	7	2 （29%）	5 （71%）	2.58 年

（3） 社会人学生数（2025 年 5 月 1 日現在）

医療保健学部

学科	社会人学生数
看護	3
理学療法	0
作業療法	0
臨床工	0
健康科学	0
学部合計	3

看護学部

学科	社会人学生数
看護	0
学部合計	0

研究科

学科	社会人学生数
看護学	6
健康科学	9
研究科合計	15

※ここでいう社会人学生とは、25 歳以上の者、または職に就いている者。

卒業者数および国家試験の状況（藍野大学ホームページより）

看護学科

年度	卒業者数	看護師国家試験			保健師国家試験		
		受験者数	合格者数	不合格者数	受験者数	合格者数	不合格者数
2022（令和 4）	93	92	92	0	20	20	0
2023（令和 5）	108	107	101	6	17	16	1
2024（令和 6）	115	115	114	1	19	18	1

※編入生含。保健師国家試験は選択制。

理学療法学科

年度	卒業者数	理学療法士国家試験		
		受験者数	合格者数	不合格者数
2022（令和 4）	88	88	88	0
2023（令和 5）	90	90	89	1
2024（令和 6）	104	104	103	1

作業療法学科

年度	卒業者数	作業療法士国家試験		
		受験者数	合格者数	不合格者数
2022（令和 4）	36	36	36	0
2023（令和 5）	44	44	43	1
2024（令和 6）	32	32	32	0

臨床工学科

年度	卒業者数	臨床工学技士国家試験		
		受験者数	合格者数	不合格者数
2022（令和 4）	35	35	34	1
2023（令和 5）	26	26	23	3
2024（令和 6）	50	50	38	12

看護学研究科

研究科	年度	修了者数
看護学	2022（令和 4）	5
	2023（令和 5）	4
	2024（令和 6）	7

研究業績と社会貢献

（2025 年 12 月 31 日まで）

科学研究費助成事業について（2025 年度）

※研究代表者。研究種目別、学科別、研究代表者五十音順

◎基盤研究（B）

医療保健学部健康科学科

課題番号	研究課題	研究代表者
24K00386	往還するネパール人：家族の生存戦略と教育課題	榎井 縁

◎基盤研究（C）

看護学部看護学科

課題番号	研究課題	研究代表者
22K11077	学校で働く看護師のコンピテンシーモデルに基づく教育プログラムの構築	岩佐 美香
22K10889	1型糖尿病患者の療養と社会生活の両立を支援するソーシャルサポートの開発と評価	梅田 英子
21K10900	妊婦の会陰部裂傷と産後の QOL に対する会陰部マッサージの効果検証と手技の確立	齋藤 祥乃
25K14053	卵巣がん早期発見プログラムの開発ー婦人科系サイレントキラー特性の撲滅に向けてー	齋藤 祥乃
25K14263	中高年の社会貢献に関する心理的要因の検討：未来時間展望と社会参加動機の関連	髙橋 えり
24K14103	日本における病院看護部の備えと看護師の防災リテラシーの進展	西上 あゆみ
23K10051	高齢精神障害者に対応したクライシス・プランシートの開発	原田 小夜
24K14130	ダブルケアの負担軽減への支援を可能にするダブルケアアセスメント尺度の開発	堀川 尚子
24K14211	カラーテープを用いた「いつでも・どこでも・誰にでも」できる高齢者の転倒予防対策	本多 容子
25K14155	在宅がん終末期ケアの訪問看護師の予後予測の観察・アセスメントツールの開発	和田 恵美子

医療保健学部理学療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
24K15854	「いつ、どこでも、ひとりで」骨盤介助型歩行練習車の基盤技術構築	青山 宏樹
22K11328	超音波画像診断装置を用いた中間広筋の効果的なトレーニング方法の検討	熊部 翔
23K10573	地域在住高齢者の転倒に及ぼす筋量・筋力の複合影響についての追跡研究	髙田 昌寛
22K11515	日本人アスリートのスポーツ損傷における発症頻度の個人差に遺伝子多型が及ぼす影響	福山 友見
25K14207	子どもたちとの遊びを通じた高齢者の呼吸筋力強化プログラムの開発と持続可能性の検証	山科 吉弘

医療保健学部作業療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
25K14443	加齢における脳内ネットワークの変化について	酒井 浩
24K06182	書字困難児支援のための ICT を用いた質的評価・支援プログラムの開発研究	高畑 脩平
25K14523	生化学的解析による脊損度別機能的電気刺激の神経再生促進のリハビリプロトコール策定	宮本 陳敏

医療保健学部臨床工学科

課題番号	研究課題	研究代表者
24K12686	血液迷路関門(BLB)障害による平衡障害の病態解明と新規治療法の開発	田浦 晶子

◎若手研究

看護学部看護学科

課題番号	研究課題	研究代表者
23K12757	発達障害児の両親支援に向けたリフレクティブ・インタビュー実践プログラムの開発	西田 千夏

医療保健学部理学療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
23K16831	高齢者の抑うつ症状改善のためのナッジを活用した身体活動プログラムの開発と効果検証	安藤 卓
25K20890	変形性膝関節症の保存治療における安全な大腿四頭筋筋力強化法の開発と効果検証	田中 貴広
23K12805	アカデミック・ライティングにおける論証の「型」の特徴と可能性	杉山 芳生
21K17521	腸内環境のエース「短鎖脂肪酸」をいかに増やすか、運動処方の開発	森田 恵美子
22K17528	下肢に慢性的な痛みを有する高齢者の呼吸筋力増強のための水中運動プログラムの作成	山科 吉弘

医療保健学部作業療法学科

課題番号	研究課題	研究代表者
23K16596	ひきこもり当事者の自宅内活動と主観的価値の解明	真下 いずみ

医療保健学部健康科学科

課題番号	研究課題	研究代表者
24K20454	NIRS バイオフィードバック抵抗運動が筋組織内酸素代謝に及ぼす影響と臨床への応用	後藤 昌弘

◎研究活動スタート支援

看護学部看護学科

課題番号	研究課題	研究代表者
23K19815	認知症患者の終末期における家族の準備と希望に関する混合研究	加藤 裕規

著書・教科書

著者，共著者	書名または章名	(左欄が章名のとき)In: 編者名, editors. 書名. 発行地: 出版社; 出版年. ページ (左欄が書名のとき)発行地: 出版社; 出版年
法橋尚宏, 今井江里, 岩佐美香, 岩本真紀, 王志霞, 太田浩子, 岡本綾子, 岡本洋一, 角野あおば, 河合晴美, 小出淳貴, 佐藤美樹, 佐藤由恵, 徐速, 庄野亜矢子, 杉原美音, 鈴木智子, 高木良重, 高田安由美, 竹内千夏, 寺尾奈歩子, 土岐弘美, 戸高理恵, 永吉円, 並川聖子, 西元康世, 平谷優子, 平野延子, 藤澤盛樹, 藤原尚子, 北條妙子, 本田裕美, 三木佳子, 宮原真二, 村川園美, 森口由佳子, 森光優, 守屋薫, 山口未久, 横山奈美, 渡邉幹生	看護師国家試験ラピッドスタディ2026	神奈川県:有限会社EDITEX;2025. 76-85
山田和子, 古澤朗子	自分たちが暮らす市区町村について調べてみよう！	In: 平野かよ子, 山田和子, 守田孝恵, 福田吉治 編集, ナーシンググラフィカ 健康支援と社会保障② 公衆衛生. 大阪: 株式会社メディカ出版; 2025. 21
高畑脩平	発達障害の作業療法	In: 山川 百合子ら（編）. みんなで学ぶ臨床精神医学　東京: 医学出版社; 2025. 138-148
高畑脩平	① 3章10節: 注意機能 ② 3章11節: 視機能 ③ 6章11節: 読み書きスクリーニング	In: 楠本 泰士（編）.PT・OTのための子どものリハビリテーション評価マニュアル　東京: 医学書院; 2025. ①78-79, ②80-81, ③220-221
高畑脩平	①感覚過敏への支援 ②不器用への支援	通常学級でできる, 使える, 特別支援教育のアイデア・アイテム　東京: 明治図書; 2025. ①86-87, ②88-89.
真下いずみ	III 疾患別精神障害作業療法 22 心的外傷および精神病発症危険状態群，ストレス因関連症群	In: 早坂友成, 最新作業療法学講座 精神障害作業療法学. 東京: 医歯薬出版; 2025
真下いずみ	第13章 作業の力を活用した事例 事例5 作曲に没入することで強迫症から回復し，社会参加に至った事例	In: 東 登志夫, 齋藤佑樹, シンプル作業療法学シリーズ 基礎作業学テキスト 東京: 南江堂; 2025
田浦晶子	第3章 耳 A 検査法 3 平衡機能検査	In: 監修 伊藤壽一・大森孝一, 編集 楯谷一郎. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科レジデントマニュアル 第2版. 東京; 2025. 73-82
田浦晶子	「イラスト」めまいの検査 （固視抑制検査）	日本めまい平衡医学会（編）, 東京: 診断と治療社; 2025. 54-55

学術論文(原著論文・総説等)

著者，共著者	タイトル	雑誌名　出版年；巻（号）：ページ
吉田麻美、八木愛、永田浩志、山本直宗、佐々木惠雲	AHCL療法が有用であった肥満を伴う1型糖尿病の1例	糖尿病　2025；68（5）：179
前川麻記, 齋藤祥乃	乳幼児を子育て中の共働き夫婦のワーク・ファミリー・コンフリクトに関連する要因―ソーシャル・キャピタルに着目して―.	日本公衆衛生看護学会誌, 13(1), 2-12
Furusawa A, Maekawa M, Kawabata K, Saito Y.	Association between the urinary sodium-potassium ratio and self-reported dietary habits of pregnant women in early pregnancy	AINO JOURNAL 2025; 22: 43-47
堀内真弓, 倉島梨花, 長本摩耶, 田中愛子, 兵頭麻利, 實村誉子, 川端慶子, 前川麻記, 齋藤祥乃	当院における産後ケア利用者のニーズ特性 対象別の比較検討	大阪母性衛生学会雑誌 2024; 59(1): 54-58
杉本陽子, 本多容子	認知症の予防と啓発を目的とした地域活動を行うボランティアグループ11年間の実践報告	藍野大学紀要 2025; 37: 51-58
松本晃子, 西上あゆみ, 本多容子, 中野玲子, 真鍋由希, 宮岡裕香, 天野美玖, 三宅光代, 林周子, 藤本智美, 岩佐美香, 齋野貴史, 古澤朗子, 前川麻記, 阿部宏史, 黄波戸航, 吉川美和子, 松本七十子, 生藤由紀子, 松浦則子	看護基礎教育における他大学と臨床を交えた就業前研修の取り組み －祝卒業フォローアップ研修アンケートの分析－	藍野大学紀要 2025; 37(1): 71-77
岩佐美香, 川﨑裕美, 中村亜紀, 本多容子	Examining the Importance of Pre-test Analysis in Lesson Design	京都女子大学養護・福祉教育学研究 2025; (3): 35-41
西田千夏, 松本七十子, 黄波戸航	親の体験を聴講する授業前後における看護系大学生の小児エンドオブライフケア観の変化	藍野大学紀要 2025; 37(1): 13-20
黄波戸航, 西田千夏	入院している子どもに付き添う家族への看護実践に関する国内文献検討	日本健康医学会雑誌 2025; 33(4): 566-575
松本晃子, 西上あゆみ, 宮岡裕香, 山﨑達枝	病院看護部が捉える外来患者への防災教育に関する実態調査 ―300床以上の病院への質問紙調査を実施して―	藍野大学紀要 2025; 37(1): 109-117
Amano M, Manabe Y, Nishigami A, Matsumoto A, Miyaoka Y, Nakano R	The Sense of Burden Factors for Japanese Ward Nurses after COVID-19's Transition to Class V Infectious Diseases	AINO JOURNAL 2025; 22(1): 35-41
Tomomi FUJIMOTO, Manabu FUKUI, Jun IKARI, Noriko MATSUURA	Aspects of Posttraumatic Growth in Families of Persons with Mental Disabilities	AINO JOURNAL 2025; 22: 15-24
原田小夜, 後藤広恵, 西垣里志	地域包括支援センターの高齢精神障害者の救急・緊急対応事例の分析	日本健康医学会雑誌 2025; 34(2): 205-211
古澤朗子	肺結核診断時の病態および発見経路に影響する患者因子の検討	藍野大学紀要　2025; 37: 21-27
黄波戸航	男性看護師の育児休業の現状と課題	藍野大学紀要 2025; 37: 41-49

鬼頭泰子, 長谷川由香, 井上寛子, 早川りか, 高間さとみ, 黄波戸航	特別支援学校で看護師が担う医療的ケアの現状	佛教大学保健医療技術学部論集 2025; 19: 15-24
長谷川由香, 鬼頭泰子, 早川りか, 井上寛子, 高間さとみ, 黄波戸航	特別支援学校で働く看護職のワーク・エンゲージメントと職場環境の関係	日本看護学会誌 2025; 20(1): 5-11
堀川尚子, 加藤真紀, 原祥子	高齢者介護におけるファミリーレジリエンスに関する文献検討	藍野大学紀要 2025; 37: 1-11
杉山芳生, 平山朋子, 斎藤有吾	ジグソー法の要素を加えた医療系多職種連携PBLの実践	日本教育工学会論文誌 2025; 49(1): 145-152
田中一孝, 平山朋子, 他	高等教育におけ る生成AI 導入の深化 ― 科目から分野・機関レベルへの展開―	大学教育学会誌 2025; 47(2): 180-185
Yoshihiro YAMASHINA, Sho KUMABE, Masaki IWAMURA, Suguru ANDO, Emiko MORITA, Kazuyuki TABIRA	The Effect of Aquatic Exercise on Respiratory Muscle Strength and Knee Extensor Muscle Strength in a Patient with Osteoarthritis of the Knee: A Case Report	The Journal of the Japanese Society of Balneology, Climatology and Physical Medicine 2025; 88 (2): 83-87
Suguru Ando, Yoshihiro Yamashina, Masaki Iwamura, Yosuke Yamato, Emiko Morita, Wataru Nanikawa, Yui Kikuchi, Sho Kumabe	Factors influencing moderate-to-vigorous physical activity intensity across different living arrangements in older adults	Health Promotion and Physical Activity 2024; 29(4): 18-26 Published: 2025-03-31
Emiko Morita, Suguru Ando, Yumi Fukuyama, Yui Kikuchi, Sho Kumabe, Yoshihiro Yamashina	Habitual daily walking of at least 8,000 steps increases fecal acetate but not muscle mass in healthy young adults: A 3-month intervention study	Health Promotion & Physical Activity 2025; 31(2): 7-13
Yui Kikuchi, Yumi Fukuyama, Sho Kumabe, Akihiro Takada, Suguru Ando, Masaki Iwamura, Emiko Morita, Yoshihiro Yamashina	Acute Effects of Aroma Exposure and Breathing Patterns on Physiological Responses: A Controlled Experimental Study	Open Journal of Therapy and Rehabilitation 2026; 14(1)Dec 26, 2025: 1-9
青山宏樹, 堤大治朗, 小川勝史, 鄭聖熹	歩行車歩行における骨盤支援制御の呈示力波形の導出とシミュレーション	リハビリテーション・エンジニアリング 2025; 40(1): 38-46
Katsushi Ogawa, Akihiro Yamada, Fumikazu Suwa, Hiroki Aoyama, Seonghee Jeong	Proposal of a gait measurement and evaluation method using an IoRT care-walker	Robomech J 12, 30, DOI: https://doi.org/10.1186/s40648-025-00319-0
Hiroki Aoyama, Daijiro Tsutsumi, Katsushi Ogawa, Seonghee Jeong	Evaluating Pelvic External Forces and Moments in Assisted Walking: Implications for the Development of Robotic-Assisted Walkers	Robomech J 12, 31, DOI: https://doi.org/10.1186/s40648-025-00318-1
Tanaka T, Hase K, Mori K, Wakida M, Arima Y, Kubo T, et al.	Stair-descent phenotypes in community-dwelling older adults determined using high-level balance tasks	Aging Clinical and Experimental Research 2025; 37:34

大和洋輔	筋血流と理学療法ーストレッチングや筋収縮，マッサージの影響	理学療法ジャーナル 2025; 59(7): 790-796
Sugimoto A, Hori H, & Matsushita M	Evaluation of Classification Accuracy for Abnormal Gait Patterns Using Quaternion Waveforms.	物理治療（Formosan Journal of Physical Therapy） 2025; 50（4）: 367-367（国際学会抄録・短報）
Satoshi Nobusako, Taeko Tsujimoto, Ayami Sakai, Teruyuki Yokomoto, Yusuke Nagakura, Nami Sakagami, Tomochika Fukunishi, Emiko Takata, Harumi Mouri, Michihiro Osumi, Akio Nakai, Shu Morioka	The use of motor imagery in 6–7-year-old children is not robust:Evidence from two motor imagery tasks	Human Movement ScienceHuman Movement Science 2025; 101
Kumiko O, Katsuyasu K, Katsumasa M, Tomoki M, Yuki F, Akihiro T, Yoshimitsu O, Harunobu N	Association between anthropometric indices and body fat for identifying excess body fat in elementary school children: a population-based cross-sectional study	Journal of Physiological Anthropology 2025; 44(1)
Soulattana V, Kumiko O, Yuki F, Akihiro T, Katsuyasu K	Household wealth index is associated with stunting among children under 5: a cross-sectional analysis of the Lao Social Indicator Survey II	Journal of Physiological Anthropology 2025; 44(1)
Akihiro T, Katsuyasu K, Yuki F, Kumiko O, Takahiro T, Junko T, Jong-Seong M, Etsuko K, Jun K, Nozomi O, Masayuki I	Association between leg-to-trunk lean mass ratio measured by dual-energy X-ray absorptiometry and later falls in older Japanese men: the Fujiwara-kyo Osteoporosis Risk in Men (FORMEN) cohort study	Maturitas 2025; 198
宮本陳敏, 尾藤祥子, 徐磊, 楊文貴, 酒井浩	中国成都市におけるリハビリテーション学術交流	藍野大学紀要 2024; 37: 59-64
尾藤祥子, 高畑脩平, 丹葉寛之, 小池伸一, 大西満, 酒井浩	小学生の体力向上に向けて-「茨木っ子運動II」の継続と新体力テスト結果への影響	作業療法ジャーナル 2025; 59(5): 513-518
中井秀昭, 中島嘉威, 尾藤祥子, 川崎一平, 山根伸吾	パラスポーツ学習が作業療法学生の障がい理解に与える影響の予備的検討	リハビリテーション教育研究 2025; 31: 30-35
中井秀昭, 中島嘉威, 尾藤祥子, 山根伸吾	パラスポーツの学びが作業療法学生に及ぼす影響 - 障がい者観と作業療法の学びについてのインタビューを通じた予備的検討 -	作業療法 2025; 44(5): 495-503
林部美紀, 井口知也, 石田眞由, 足立一	作業療法士が企画・実施した就労に向けての身だしなみ講座の実践報告	作業療法ジャーナル 2025; 59(1): 88-92
S.Takahata, H.Hagihara, H.Ishihara, D.Enomoto, N.Ienaga, H.Noda, S.Ishida, K.Terayama	Comprehensive search for assessment indicators that influence the level of handwriting difficulties among children in educational settings.	SCIENTIFIC REPORTS 15(1)
高畑脩平	読み書き困難の理解と支援-作業療法の視点から	発達教育 2025; 44(3): 4-11

鈴木璃土, 高畑脩平, 寺山慧	Graph Convolutional Networkを用いた子どもの姿勢制御能力の評価	人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会, 103
真下いずみ	生活行為向上マネジメントを用いた訪問支援を利用した統合失調症圏・気分障害圏の人々の生活行為と時間使用の変化	藍野大学年報, 2025; 52-53
真下いずみ	ひきこもり当事者の自宅内活動に着目した訪問支援法確立：基盤研究	Medical Science Digest 2025; 51(7): 398-399
真下いずみ, 三好加奈, 山根伸吾	ひきこもりからの回復プロセスと支援の在り方に関する質的研究―10年のひきこもりを経て対人援助職として勤務する人の語りから―	作業療法 2025; 44(4): 438-445
Izumi Mashimo, Kana Miyoshi	Relationship between Home-activities and QOL in Individuals with Severe Social Withdrawal (Hikikomori)	Occupational therapy in mental health, Advance online publication, 2025; 1-18
真下いずみ	ひきこもり状態にある人への精神科作業療法士による訪問支援	地域ケアリング, 2025; 27(10): 48-50
真下いずみ, 三好加奈, 山根伸吾	不登校からのリカバリープロセス：質的研究	精神障害とリハビリテーション 2025; 29(2): 171-178
Akira Ikarashi	Development of Respiration Measurement Methods Using Wearable Gyroscope and Acceleration Sensors	Sensors and Materials 2025; 37(2): 643-648
Hideaki OHGITA, Akiko TAURA, Koji NISHIMURA, Yosuke TONA, Tomoko TATEYA, Hiroe OHNISHI, Koichi OMORI, Juichi ITO	Development of the New Rotarod Treadmill Test of Guinea Pigs	AINO JURNAL 2025; Vol.22: 49-52
中山昌明, 伊丹儀友, 植村進, 中澤了一, 鈴木穂孝, 高田譲二, 森淑江, 坂下惠一郎, 岡村基弘, 尾形佳昭, 畦倉久紀, 辻本吉広, 和田篤志, 久慈弘士, 早川英明, 石川幸広, 影山慎二, 塚本功, 片山浩司, 右田敏郎, 畑中由佳, 樺山繁, 尾田虎二郎, 前田憲志, 宮崎真理子, 一般社団法人電解水透析研究会	電解水血液透析の現状報告	日本透析医学会雑誌 2025; 58(2): 93-101
田邉晃史, 原地絢斗, 山本祐輔, 村松歩, 長原一, 武村紀子, 下條真司, 降簱大介, 水野(松本)由子	軽度認知障害における脳波のtimelag解析による脳機能評価	電気学会論文誌 C 145(4) 2025.4: 467-473
Akifumi Tanabe, Kento Harachi, Yusuke Yamamoto, Ayumi Muramatsu, Hajime Nagahara, Noriko Takemura, Shinji Shimojo, Daisuke Furihata, Yuko Mizuno-Matsumoto	Brain Function Assessment of EEG in Mild Cognitive Impairment using Timelag Analysis	IEEJ Transactions on Electronics, Information and Systems 2025.4; 145(4): 467-473

坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 奥谷研, 平上尚吾, 水野(松本)由子	ヘッドマウントディスプレイを使用した運動イメージ時の脳波の機能的結合性の評価	作業療法　2025.10; 44(5): 504-512
坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 奥谷研, 平上尚吾, 水野(松本)由子	心電図および光電式指尖容積脈波を用いたVirtual Reality環境下における運動模倣が自律神経活動に与える影響の評価	日本バーチャルリアリティ学会論文誌　2025.6; 30(2): 163-172
中井良育, 部行宏, 丸田秋男, 渡邉敏文, 河野聖夫, 佐藤洋, 青木茂, 鈴木昭, 渡邊豊, 渡辺恵	「質」が保証されたケアマネジメントモデルの構築－地域ケア会議における助言とコーディネート機能が与える影響－	新潟市医師会報　2025；648：2-9
中井良育, 渡邉敏文, 青木茂, 丸田秋男	地域ケア会議における専門職の助言及びソーシャルワーカーによるコーディネーションがケアマネジメントの質に与える影響 ―新潟市多職種合同介護予防ケアプラン検討会に着目した調査結果から―	日本地域政策研究　2025; 34: 100-109

学会発表等(含座長)

発表者，共同発表者	タイトル	学術集会名・会議名，場所，日程，雑誌名等(雑誌名は任意)
Yoshino Saito, Akiko Furusawa, Maki Maekawa, Keiko Kawabata, Kiyoko Naito, Sanae Ninomiya, Hisayo Okayama	Association of urinary sodium-potassium ratio with self-reported dietary habits of pregnant women in early pregnancy.	16th Congress of the European Society of Gynecology.RIGA,LATVIA,MARCH 19-22 2025
前川麻記, 齋藤祥乃	学術奨励賞（優秀論文部門） 乳幼児を子育て中の共働き夫婦のワーク・ファミリー・コンフリクトに関連する要因 ―ソーシャル・キャピタルに着目して― 日本公衆衛生看護学会誌 13巻1号 p.2-12	第14回日本公衆衛生看護学会学術集会　学術奨励賞表彰式・報告会, 金沢, 2025.12.13
姫野稔子, 本多容子（座長）	フットケアと転倒予防	日本看護技術学会第23回学術集会・キーセッション, 京都, 2025.10.11-12
中井良育, 本多容子（座長）	社会的健康を増進するには-社会科学の視点から-	日本健康行動科学学会第24回学術集会・教育講演, 大阪, 2025.11.29
杉本陽子, 本多容子	「カルタ」を用いて地域で認知症の啓発活動を行ったボランティアグループの実践報告	日本看護研究学会第51回学術集会, 金沢, 2025.8.30-31
三宅光代, 阿部宏史, 本多容子	DLBカフェの取り組みから生まれた学生ボランティア活動	日本健康行動科学会第24回学術大会, 大阪, 2025.11.30
西田千夏, 合田友美	病気や障害のある子どもの医療・福祉・教育系支援者研修会 <スペシャルキッズサポーターの集い> 実践報告	日本小児看護学会第35回学術集会, 宮城, 2025.7.5-6
森下愛月, 横山雛子, 坂口翔一, 中野隆史, 中田裕二	IMP-6型MBL産生大腸菌AUH-310の多剤耐性因子解析	第98回日本細菌学会総会, 石川, 2025.5.29-31
A Morishita, H Yokoyama, S Sakaguchi, T Nakano, Y Nakada	Multiple drug-resistant factor analysis of IMP-6 MBL producing E. coli AUH-310	The 98th Annual Meeting of Japanese Society for Bacteriology, Kanazawa, May 29-31, 2025, Abstract P42 P1-143
梅田英子, 矢代かん奈, 榮口響大, 神田栄美子	20歳未満発症の1型糖尿病患者の成人期医療への移行の実態とセルフケア能力	第30回日本糖尿病教育・看護学会学術集会、つくば国際会議場, 茨木, 2025.9.20-21
宗廣謡子, 西上あゆみ	自然災害時の人的受援対策に関する調査～大阪府下101 の透析施設へのアンケート結果から～	第70回日本透析医学会学術集会・総会, 大阪
西上あゆみ, 渡邊智恵, 松本晃子, 宮岡裕香	看護系学会において交流集会に参加した看護師による病院看護師向け防災リテラシー82項目の精練	日本災害看護学会第27回年次大会, 東京
瀬川浩子, 西上あゆみ	在宅高齢者の防災に関する文献検討	日本災害看護学会第27回年次大会, 東京
下村実邦子, 西上あゆみ	妊婦と乳児を育てる母親の災害への認識と備えの実態	日本災害看護学会第27回年次大会, 東京
池端優樹, 西上あゆみ	近畿圏の血液内科病棟に所属する看護師の防災意識と防災教育の実態	日本災害看護学会第27回年次大会, 東京
西上あゆみ	一般演題（口演） 2 「災害管理体制・備え②」座長	日本災害看護学会第27回年次大会, 東京, 2025.9.6

原田小夜, 後藤広恵, 西垣里志	地域包括支援センターが抱える精神症状を呈する高齢者の救急・緊急対応における他機関との連携上の課題	第84回日本公衆衛生学会総会, 静岡, 2025.10.29
原田小夜, 後藤広恵	COVID-19 感染症蔓延下に採用された新任期保健師の現任教育の現状と課題～滋賀県における新任期保健師のキャリアラダー評価結果から～	第34回日本健康医学会総会（山口）
原田小夜	一般演題座長	日本健康医学会総会（山口）
古澤朗子, 門田文, 西信雄, 奥田奈賀子, 尾島俊之, 早川岳人, 大久保孝義, 岡山明, 岡村智教, 三浦克之	等価家計支出と長期間の死因別死亡リスクとの関連：NIPPON DATA90の25年追跡結果	第61回日本循環器病予防学会学術集会, 佐賀, 2025.5.24-25
黄波戸航	小児看護学の講義を体験しよう！	高大連携授業, 大阪府立千里青雲高校, 2025.8.1
黄波戸航	もしもの時に備える！子どもの事故予防とAED体験講座	こどもの健やかな発育のためのあそび・運動・健康の実践講座, 山善福祉会さんすい学園, 2025.11.29
堀智子	看護基礎教育における多職種連携をゲーミフィケーションで学ぶ意義　－コミュニティコーピングボード®ゲームを教育に用いて－　第2報	第7回在宅医療連合学会大会, 長崎, 2025.6.14-15
堀智子	看護学の臨地実習早期にチャプレンとの対話がその後の実習に及ぼした影響について	仏教看護・ビハーラ学会　第21回年次大会, 東京, 2025.6.28-29
Naoko Horikawa, Misa Marushima, Yukiko Akai	Stress Coping Practices by Double Caregivers	International Council of Nurses Congress 2025, Helsinki, Finland, 9-13 June 2025
Misa Marushima, Naoko Horikawa, Yukiko Akai	A Study of Current Conditions and Issues for Mothers at High Risk for Postpartum Depression at the One-Month Postpartum Health Examination	International Council of Nurses Congress 2025, Helsinki, Finland, 9-13 June 2025
Misa Marushima, Naoko Horikawa, Yukiko Akai	Characteristics of mothers who incorrectly perceive body size in non-pregnant women	28th East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS2025), COEX, Seoul, Korea, 13-14 Feb 2025
前川麻記, 楠木泉, 松原千晴, 北岡由衣, 小芝明美, 藁谷深洋子, 森泰輔	京都府の産科医療機関における妊産婦メンタルヘルスケアの現状と今後の課題	第40回日本女性医学学会学術集会, 東京, 2025.11.1-2
Emiko Kanda	Canser Patients' Thoughts On End-Of-Life-Care	International Council of Nurses Congress 2025, Helsinki, Finland, 9-13 June 2025
髙橋えり, 森尾博昭	自由意志・決定論信念と未来時間展望	日本心理学会第89回大会, 宮城, 仙台市, 東北学院大学, 2025.9.5-7
Eri Takahashi, Hiroaki Morio	The mediating effect of FTP on attitudes toward aging and positive attitudes toward the future	The 16th Biennial Conference of the Asian Association Social Psychology, at Monash University Malaysia, 10-12 July 2025

Yoshihiro Yamashina, Wataru Nanikawa, Masaki Iwamura, Suguru Ando, Hiroki Aoyama, Emiko Morita, Sho Kumabe, Tomoko Hirayama	Effect of Differences in Knee Extensor Muscle Strength on Expiratory Muscle Strength Improvement through Underwater Walking: A 12-Week Intervention Study in Older Adults	APPW（第130回日本解剖学会・第102回日本生理学会・第98回日本薬理学会）合同大会, 千葉, 2025.3.18
田中一孝, 平山朋子, 羽倉尚人, 斎藤有吾, 杉山芳生, 坂田信裕	参加者企画セッション 高等教育における生成AI活用の戦略と課題整理：科目・分野・機関レベルでの導入の在り方を考える	第31回大学教育研究フォーラム, オンライン, 2025.3.13
平山朋子, 杉山芳生	理学療法学の臨床推論授業における利活用と課題	第31回大学教育研究フォーラム、参加者企画セッション2　高等教育における生成AI活用の戦略と課題整理　―科目・分野・機関レベルでの導入の在り方を考える―, 京都大学, 2025.2.17-18
平山朋子, 杉山芳生	PBL型の臨床推論授業における・生成 AI 活用の可能性と課題	大学教育学会第47回大会ラウンドテーブルⅠ（テーブル11）, 桐蔭横浜大学, 2025.6.7-8
平山朋子, 杉山芳生	藍野大学理学療法学科の取組―パフォーマンス評価でつながるカリキュラム―	シンポジウム　長期的な学生の学びと成長を評価する―PEPAの理論と実践―, 2025.10.18 科学研究費基盤研究（B)「コンピテンシーの形成・評価の検討-統合性・分野固有性・エージェンシーに着目して-」（23K22236，研究者：京都大学・松下佳代）
山科吉弘, 熊部翔	変形性膝関節症患者への水中歩行プログラムが呼吸筋力および膝伸展筋力に与える影響	第90回日本温泉気候物理医学会総会・学術集会, 横浜, 2025.5.24
山科吉弘	子どもたちとの遊びを通じた高齢者の呼吸筋力強化プログラムの開発と持続可能性の検証	第15回呼吸・循環リハビリテーション研究大会, 三重, 2025.8.9
山科吉弘, 田平一行	膝関節痛を有する高齢者における水中歩行が呼吸機能および下肢筋力，歩行能力に与える影響	第35回日本呼吸ケアリハビリテーション学会学術集会, 新潟, 2025.10.24
大谷明日輝, 森広輔, 平田智弘, 高田雄太, 吉村拓真, 藤田美奈子, 入山圭司, 小河秀郎, 山科吉弘	介助を要しないパーキンソン病患者に呼吸機能および呼吸筋力測定は必要か？	難病支援学術コンソーシアム2025, 2025.11.28
Misaki Shinmyo, Sho Sekimoto, Tetsuo Tsujioka, Hitoshi Watanabe, Yoshimasa Matsuura, Hisayo Yokoyama, Haruka Kawabata, Yoshihiro Yamashina.	"Development of a Lung Age Estimation Device Using Electronic Fukimodoshi Blowouts,"	Proc. ICETC2025, P2-22, Osaka, Nov. 2025
山科吉弘	膝痛による活動性低下と呼吸筋力低下の悪循環を改善する水中歩行の可能性	第40回日本健康科学学会学術大会, 東京, 2025.12.13
山科吉弘	座長（一般演題　多面的介入）	第35回日本呼吸ケアリハビリテーション学会学術集会, 新潟, 2025.10.24
山科吉弘	座長（一般演題　肺炎・誤嚥性肺炎）	第11回日本呼吸理学療法学会学術大会, 京都, 2025.11.29

山科吉弘	座長（教育講演　息切れの評価）	第11回日本呼吸理学療法学会学術大会, 京都, 2025.11.29
山科吉弘	座長（一般演題）	第40回日本健康科学学会学術大会, 東京, 2025.12.13
安藤卓, 岩村真樹, 山科吉弘, 大和洋輔, 森田恵美子, 菊池唯, 何川渉, 熊部翔, 福山友見	地域在住高齢者の身体活動量と時間帯別活動時間の性差について	第67回日本老年医学会, 千葉, 2025.6.27-29
安藤卓, 岩村真樹, 山科吉弘, 大和洋輔, 森田恵美子, 菊池唯, 何川渉, 熊部翔, 福山友見	時間帯別座位行動時間に基づくクラスタリングによる地域在住高齢者の健康特性	第27回日本運動疫学会, 大阪, 2025.7.4-5
安藤卓, 山科吉弘, 岩村真樹, 大和洋輔, 森田恵美子, 菊池唯, 何川渉, 熊部翔, 福山友見	地域在住高齢者に対するナッジ介入による効果：身体活動量の変化と抑うつ症状に関するクロスオーバー試験	第12回日本地域理学療法学術大会, 北海道, 2025.10.11-12
青山宏樹, 堤大治朗, 小川勝史, 鄭聖熹	歩行支援ロボティクス開発に向けた骨盤への外力・モーメント制御の汎用化 ー理学療法士はどのように骨盤を制御し、歩行を支援しているか?ー	第30回ロボティクスシンポジア, 愛媛, 2025.3.18-19
Hiroki Aoyama, Katsushi Ogawa, Seonghee Jeong	Design and Simulation of Sinusoidal Assist Pattern Generator for Robotic Gait-Training Walker Based on Physical Therapist Force Profiles	The 18 th International Convention on Rehabilitation Engineering and Assistive Technology (i-CREATe 2025), Bangkok, Thailand, 24-26 November 2025
岡本祐輔, 西浦里咲, 大塩祐子, 岩村真樹, 荒木妙子, 染谷颯太, 重清太郎, 山根一志	パーキンソン病教育入院実施者におけるBerg Balance Scale変化量とMDS-UPDRS part Ⅲ変化量との関連性の検証	第19回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス，東京，2025.7.24-26
染谷楓太, 岩村真樹, 荒木妙子, 大塩祐子, 西浦里咲, 岡本祐輔, 重清太郎, 山根一志	中等度以上の重症度のパーキンソン病患者における運動症状と生活の質の関係性	第19回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス，東京，2025.7.24-26
岩村真樹, 染谷楓太, 荒木妙子, 大塩祐子, 西浦里咲, 岡本祐輔, 重清太郎, 山根一志	パーキンソン病患者への教育入院によるMDS-UPDRS part Ⅲの変化に関連する入院時の要因	第19回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス，東京，2025.7.24-26
田中貴広	口演 19（一般演題） 股関節	第13回日本運動器理学療法学会学術大会, 大阪, 2025.11.22-23
大和洋輔	ストレッチングと血管機能：ストレッチングの可能性と課題	第79回日本体力医学会大会 シンポジウム, 滋賀, 2025.9.18
Sugimoto A, Hori, H, & Matsushita M	Evaluation of Classification Accuracy for Abnormal Gait Patterns Using Quaternion Waveforms	The 50th Anniversary Congress & the 90th Scientific Conference of TPTA, Taipei, Taiwan, 2025 sep. 6-7(Abstract published in Formosan Journal of Physical Therapy)
杉山芳生	個人研究発表１ 部会２ 準正課活動、学生・学習支援 座長	第31回大学教育研究フォーラム, オンライン, 2025.3.12
菊池唯, 阪上奈巳	森林浴とストレッチ運動を用いた健康保持増進活動の取り組みー大阪府茨木市と大学における共同事業をと通じてー	日本森林保健学会, 大分, 2025.6.28-29, 森林保健研究　第6号
阪上奈巳, 菊池唯, 近森聡	森林浴とストレッチ運動を用いた健康保持増進活動の取り組み	第15回日本森林保健学会学術総会, 大分, 2025.6.28-29

髙田昌寛, 甲田勝康, 藤田裕規, 小原久未子, 立木隆広, 玉置淳子, 文 鐘聲, 岡本希, 伊木雅之	地域在住高齢男性における体組成および運動能力と要介護状態との関連	第84回日本公衆衛生学会総会, 静岡, 2025.10.29-31
堀小雪, 福山友見, 廣瀬藍里, 浅野陽菜, 南堀悠人, 大和洋輔	月経周期の時期の違いが関節弛緩性および膝関節機能に及ぼす変化	第12回日本スポーツ理学療法学会学術大会, 北海道, 2025.11.29-30
松原祐樹, 藤田晃史, 福山友見, 高鳥毛沙紀, 加藤彩, 菅沼みのり, 合田莉子, 森内宏充	前十字靱帯再建術における移植腱の違いが術後膝屈曲能に与える影響 ー半腱様筋腱vs薄筋腱ー	第3回日本膝関節学会, 兵庫, 2025.12.5-6
林部美紀, 橋元和泉, 山田隆人, 早崎亜悠美, 徳永紀実子	動作の誘導が手がかりとなり動作獲得につながった乳児	第39回大阪府作業療法学会, 大阪国際交流センター, 2025.12.7
川本絢未, 高畑脩平	感覚統合療法を用いたASD児の偏食改善の試みとその効果	第59回日本作業療法学会, サンポートホール高松, 2025.11.8
真下いずみ	ライフステージに応じた支援とは	全国ひきこもり学会, まるいクリニック, 2025.1
Izumi Mashimo, Tomomi Tsujimoto	The usefulness of Employment Experience Through Metaverse: A Preliminary Study	PRCP&WACP2025 Joint Congress Tokyo, Hamamatsucho Convention Hall & Hybrid Studio, 2025.9
真下いずみ, 小林麻里, 児島亮, 脇田俊一郎, 平井万紀子	ひきこもり状態にある人々の外出頻度は主観的QOLに影響する	第59回日本作業療法学会, サンポートホール高松, 2025.11
真下いずみ	10 年後の作業療法の透視図（シンポジスト）	第59回日本作業療法学会, サンポートホール高松, 2025.11
真下いずみ, 荒川美佐, 山本健心, 宮村真央	就労支援プログラムの有効性：システマティックレビュー	第39回大阪府作業療法学会, 大阪国際交流センター, 2025.12
平井敦登, 松田匡弘, 真下いずみ	パラレルな場を用いた作業療法により就労移行支援事業所への通所に至った摂食障害患者の一例	第39回大阪府作業療法学会, 大阪国際交流センター, 2025.12
長尾将利, 立山清美, 丹葉寛之	学校生活に関する保護者の語りからダウン症児の支援ニーズを探る-SCAT分析を通じて-	第39回大阪府作業療法学会, 大阪国際交流センター, 2025.12.7
田浦晶子, 扇田秀章, 大森孝一, 伊藤壽一	Lyl1過剰発現マウス蝸牛の血管構造と低酸素応答についての検討	第126回　日本耳鼻咽喉科・頭頸部外科学会総会, 横浜, 2025.5.28
田浦晶子(座長)	第2群　臨床研修医・学生セッション2	第87回耳鼻咽喉科臨床学会, 奈良, 2025.6.26
Akiko Taura	[The Challenge of Inner Ear Regeneration] “Possible application of regenerative medicine to vestibular disorders”	52nd Congress of the international Neurootological & Equilibriometric Society KAWAGOE, JAPAN, Aug 27-29, 2025
田浦晶子, 吉川弥生, 扇田秀章, 大森孝一 , 伊藤壽一	前庭血管ペリサイトについての検討	第84回日本めまい平衡医学会, 横浜, 2025.11.28
扇田秀章, 田浦晶子, 伊藤壽一	モルモット前庭障害モデルに対する内耳オルガノイド移植 ― 自作ロータロッド装置を用いた前庭機能評価	第84回日本めまい平衡医学会, 横浜, 2025.11.28
田浦晶子(座長)	シンポジウム1「医工学との接点」	第84回日本めまい平衡医学会, 横浜, 2025.11.28

畑中晃, 畑中由佳, 郡慎平, 竹澤眞吾, 合志桂太郎	静脈リザーバーのパルス応答法による流動解析装置の試作	第63回日本人工臓器学会大会, グランドニッコー東京ベイ舞浜, 2025.11.22
畑中由佳, 鈴木郁斗, 内藤尚, 北島信治, 酒井宣彦, 岩田恭宜, 小川充洋, 田中志信	【2024年度論文賞受賞記念講演】 近赤外LEDを光源とした簡易光学式透析排液モニタシステムの開発ーFT-IR分光器による透析排液尿素濃度推定の基礎的検討	第100回医療機器学会大会, パシフィコ横浜会議センター, 2025.6.14
坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 田邉晃史, 小林隆司, 水野(松本)由子	作業療法介入による課題遂行時における心理状態および脳波変化の評価	第47回Fmθ研究会, 2025.3.22
坂口雄哉, 村松歩, 山本祐輔, 田邉晃史, 平上尚吾, 奥谷研, 水野(松本)由子	脳波の機械学習を用いた映像デバイスの違いによる運動イメージ内容の判別の比較	第55回日本臨床神経生理学会学術大会, 2025.11
佐藤彩子, 中井良育	個別報告 第2セッション 行政・福祉(司会)	日本地域政策学会第24回全国研究【愛知・名古屋】大会, 愛知, 2025.6.28-29
中井良育	教育講演「社会的健康を増進するには ～社会科学の視点から～」	日本健康行動科学会 第24回学術大会, 大阪, 2025.11.29-30

社会貢献(1)講演等

講演者、担当者，役職者等の氏名	講演のタイトル，内容等	講演会・組織等の名称，開催場所，日付等
佐々木惠雲	日本人の死生観とグリーフケア　－医師・僧侶の視点から－	第15回日本皮膚科心身医学会、大阪医科薬科大学医学部、2025.1.26
梶本浩之, 後藤昌弘, 熊田仁, 前田智香子, 中島嘉威	追手門学院高等学校バレーボール部の部員を対象にした体力測定	藍野大学（Fitness-Lab.）, 2025.8.4
齋藤祥乃	“自分を大切に”	性教育・滋賀県立八幡高等学校2年生, 9.24
西田千夏	発達障害の特性とかかわり方を学ぼう - 子どもから成人まで発達障害傾向も含む多様な特性を活かすことができる社会の実現に向けて -	奈良県看護協会研修会, 2025.2.27
西田千夏	スペシャルキッズ家族（親）から「話を聴く」 - インタビューの実践 -	スペシャルキッズ支援士養成講座　基礎コース, 2025.2.2
植田陽子, 岩佐美香, 菅井裕行, 宇野理沙, 小篠史郎	3学期終了定例集会	Nurse Fight; Nurse@Scool研究会, Web, 2025.3.22
植田陽子, 岩佐美香, 菅井裕行, 宇野理沙, 小篠史郎	夏季休暇前の定例集会	Nurse Fight; Nurse@Scool研究会, Web, 2025.7.26
植田陽子, 岩佐美香, 菅井裕行, 宇野理沙, 小篠史郎	年度終わりの定例集会	Nurse Fight; Nurse@Scool研究会, Web, 2025.12.20
梅田英子	慢性疾患をもつ青年期患者への看護	大阪大学医学部保健学科, 2025.12.12
梅田英子	慢性病看護学特講 慢性病看護学特講演習 統合保健看護科学特別研究Ⅰ	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻看護実践開発科学慢性疾患看護学研究室
西上あゆみ	災害時に向けた看護職の備えと支援のあり方	公益社団法人徳島県看護協会, 徳島県, 2025.1.20
西上あゆみ	災害支援ナース育成研修	公益社団法人滋賀県看護協会, 滋賀県, 2025.11.25
西上あゆみ	認定看護管理者　セカンド研修「災害看護」	公益社団法人滋賀県看護協会, 滋賀県, 2025.10.20
西上あゆみ	認定看護管理者　セカンド研修「災害看護」	藍野大学キャリア開発・研究センター, 大阪府, 2025.8.1　8.7
西上あゆみ	認定看護管理者　セカンド研修「災害看護」	公益社団法人兵庫県看護協会, 兵庫県, 2025.7.18
西上あゆみ	認定看護管理者　セカンド研修「災害看護」	公益社団法人広島県看護協会, 広島県, 2025.9.4
西上あゆみ	災害時の看護を考える	公益社団法人滋賀県看護協会, 滋賀県, 2025.9.2
西上あゆみ	災害看護 ～病院看護部としての備えを考える～	大阪府看護部長会, 大阪府, 2025.9.16
西上あゆみ	特別セミナー「災害に向けた医療職の備え～いざという時に動ける医療職を目指して～」	藍野大学キャリア開発・研究センター, 大阪府, 2025.10.18

中野玲子	認定看護管理者教育課程ファーストレベル「組織管理論」「統合演習」講師	藍野大学キャリア開発・研究センター, 2025.11-12
林周子	高大連携授業　兵庫県立宝塚高等学校	藍野大学, 2025.7.15
林周子	認定看護管理者教育課程ファーストレベル講師　「人材管理・コミュニケーション・ファシリテーション」	藍野大学キャリア開発センター, 2025.10.31
原田小夜	指導者に必要な人材育成の基礎知識	滋賀県健康医療福祉部主催　令和7年度滋賀県保健師現任教育研修会, 2025.4.30
原田小夜	高島保健所管内保健師連絡会　研究発表会の助言・研究の進め方の講話	滋賀県高島保健所主催, 2025.11.13
原田小夜	東近江保健所管内保健師連絡会　研究発表会の助言	滋賀県東近江保健所主催, 2025.11.21
原田小夜	甲賀保健所管内保健師連絡会　研究発表会の助言	滋賀県甲賀保健所主催, 2025.12.5
原田小夜	ピアサポートとは？・相談を受けるときに大切にしたいこと	滋賀県難病相談支援センター主催　ピアサポーター養成研修会, 2025.12.10
古澤朗子, 阿部宏史, 吉川美和子	保健師と一緒に赤ちゃんとの暮らしを考えよう	地域子育て世代への健康教育プロジェクト, さんすい学園, 2025.2.15
阪上奈巳, 黄波戸航, 前川麻記	子どもの足の発達～靴選びのポイント～	こどもの健やかな発育のためのあそび・運動・健康の実践講座, さんすい学園, 2025.1.11
堀智子	「第9回スペシャルキッズサポーターの集い」実行委員支援スタッフ	第9回スペシャルキッズサポーターの集い, 大阪, 2025.3.16
堀智子	インターアクト年次大会プログラムでコミュニティコーピングのファシリテーター	開明中学校・開明高等学校 コミュニティコーピング体験会, 大阪市城東区, 2025.7.22
堀川尚子	藍野病院 経年3年目（ステップⅡb）講師『看護師の倫理綱領』と私の行動	藍野病院, 2025.7.4
神田栄美子	zibuかふぇ 「自分らしくいきる」をテーマに語る会	zibuかふぇ実行委員会, 昭和ファクトリー, 大東市氷野, 9.15　11.29
神田栄美子	介護・施設整備ボランティア	ホームホスピス一般社団法人　あゆ実（2024.2～現在）
天野美玖	職業講和「看護師の仕事とは」	枚方市立蹉跎中学校, 2025.11.23
山科吉弘	スタッフへの運動方法指導	社会福祉法人珠寿会ケアハウス池田（月1回）, 2025
山科吉弘	吸引の基本と実際－人工呼吸器を用いて－講演 「人工呼吸器の概要」 講師	奈良県理学療法士協会, 2025.2
田中俊典, 山科吉弘	パーキンソン病を正しく知っていきいきと暮らそう	第1回藍野大学・藍野大学短期大学部市民公開講座, 2025.6.28
山科吉弘, 辻岡哲夫	肺年齢測定会実施（ケアハウス）	大阪公立大学×藍野大学肺年齢測定会, 2025.7.24

山科吉弘, 安藤卓, 岩村真樹, 森田恵美子, 何川渉, 大和洋輔, 菊池唯, 熊部翔, 福山友見, 近森聡	藍野大学×茨木市南保健福祉センター測定会および講義	茨木市南保健福祉センター, 2025.8-10月
山科吉弘	ストレッチ体操	茨木市太田地区敬老会, 2025.9
山科吉弘, 安藤卓, 大和洋輔	茨木市健康フェア2025に出展．測定会実施	大阪府茨木市, 2025.10.26
山科吉弘	招待講演（肺の健康を守るための呼吸筋トレーニングと肺年齢の活用）	第37回情報伝送と信号処理ワークショップ, 三重, 2025.11.6
千住秀明, 山科吉弘	滋賀県甲賀市肺年齢測定会	滋賀県甲賀市, 2025.12.6
山科吉弘, 青山宏樹, 安藤卓, 岩村真樹, 梶本浩之, 菊池唯, 熊部翔, 阪上奈巳, 田中貴広, 平山朋子, 福山友見, 前田智香子, 森田恵美子	社会貢献事業「みんなで！健康促進館内ウォーキング＆健康測定会」	イオン茨木, 2025.1.29
梶本浩之, 山科吉弘, 田中貴広, 講演者：講師：君浦隆ノ介	藍野大学理学療法学科交流会　卒後研究会テーマ：MRI画像の見方と脳の構造と働き	zoom, 2025.11.5, 19:00-21:00
梶本浩之, 山科吉弘, 田中貴広, 講演者：講師：君浦隆ノ介	藍野大学理学療法学科交流会　卒後研究会テーマ：デバイス併用療法（痙縮治療・rTMS・装具療法）	zoom, 2025.12.10, 19:00-21:00
梶本浩之, 山科吉弘, 田中貴広, 講演者：講師：森英人	藍野大学理学療法学科交流会　卒後研究会テーマ：人工骨頭置換術後の歩行・ADL獲得における治療戦略とリハビリテーション	zoom, 2025.11.13, 19:00-21:00
梶本浩之, 山科吉弘, 田中貴広, 講演者：講師：森英人	藍野大学理学療法学科交流会　卒後研究会テーマ：大腿骨転子部骨折術後の歩行時痛に対する治療戦略とリハビリテーション　講師：森英人先生（河内総合病院）	zoom, 2025.12.4, 19:00-21:00
安藤卓	理学療法士によるからだづくり教室 「今日から始める！続けられる健康づくり運動」	茨木市東保健福祉センター・茨木市西河原公園屋内運動場, 2025.10.28
森田恵美子	糖尿病？症状ないから大丈夫？	藍野大学×茨木市南保健福祉センター共同研究, 南いばらき保健福祉センター, 2025.8.19
岩村真樹	藍野大学×沢池多世代交流センター体力測定会「フィードバック講座」	沢池多世代交流センター，2025.2.1
岩村真樹	いば北（忍頂寺）測定会「フィードバック講座」	忍頂寺スポーツ公園　竜王山荘，2025.2.26
熊田仁, 梶本浩之, 前田智香子	追手門高等学校、運動部体力測定	藍野大学理学療法学科高大連携, 藍野大学, 2025.8.4
熊田仁	臨床実習指導者講習会　講義5「臨床実習における学生評価」講師	藍野大学主催：臨床実習指導者講習会, Web開催, 2025.9.6-7
熊田仁	2025年度認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器分野） 必須科目3「医学的診断と治療介入」講師	藍野大学主催：認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器分野）, Web開催, 2025.9.4

熊田仁	2025年度認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器分野） 必須科目4「関節可動域制限の要因と治療手技」講師	藍野大学主催：認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器分野）, Web開催, 2025.9.4
熊田仁	2025年度認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器分野）選択（実技） 科目：2「肩関節疾患の機能解剖と理学療法」講師	藍野大学主催：認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器分野）選択（実技）科目２, 対面開催, 2025.11.30
田中貴広	正常な構造・機能と疾病の基礎	公益社団法人 日本理学療法士協会　認定理学療法士制度カリキュラム, 藍野大学, 2024.10.5
田中貴広	姿勢・歩行の評価・分析と理学療法	公益社団法人 日本理学療法士協会　認定理学療法士制度カリキュラム, 藍野大学, 2024.10.27
梶本浩之, 前田智香子	Aino de まちトレ『体の調子はどうですか？―からだをきたえて健幸生活』2024年度第6回 自重トレーニング&セラバンドトレーニング	藍野大学地域連携プロジェクト, 藍野大学, 2025.2.13
梶本浩之, 前田智香子	Aino de まちトレ『体の調子はどうですか？―からだをきたえて健幸生活』2024年度第7回 心身機能測定会	藍野大学地域連携プロジェクト, 藍野大学, 2024.3.14
梶本浩之, 前田智香子	Aino de まちトレ『体の調子はどうですか？―からだをきたえて健幸生活』2025年度第1回 心身機能測定会	藍野大学地域連携プロジェクト, 藍野大学, 2025.9.30
梶本浩之, 前田智香子	Aino de まちトレ『体の調子はどうですか？―からだをきたえて健幸生活』2025年度第2回 自重運動＋バランス運動	藍野大学地域連携プロジェクト, 藍野大学, 2025.10.21
梶本浩之, 前田智香子	Aino de まちトレ『体の調子はどうですか？―からだをきたえて健幸生活』2025年度第3回 自重運動＋バランス運動	藍野大学地域連携プロジェクト, 藍野大学, 2025.11.18
梶本浩之, 前田智香子	Aino de まちトレ『体の調子はどうですか？―からだをきたえて健幸生活』2025年度第4回 自重運動＋バランス運動＋マシンエクササイズ	藍野大学地域連携プロジェクト, 藍野大学, 2025.12.23
杉山芳生	実習生の学びを分析する	藍野大学医療保健学部理学療法学科臨床実習指導者会議, ホテルグランヴィア大阪, 2025.2.28
杉山芳生	初年次教育科目「学びの基盤」における教育実践研究	2024年度 中央研究施設シンポジウム, 藍野大学, 2025.3.3
杉山芳生	大学教育・大学院教育におけるPBLの可能性と課題	令和６年度 新潟大学全学FD・SD, オンライン, 2025.3.27
杉山芳生	新たな認証評価制度の動向と教学IR	藍野大学・びわこリハビリテーション専門職大学共催教学IRセミナー, オンライン, 2025.9.18
杉山芳生	シラバス作成によるコースデザイン	令和７年度　藍野大学短期大学部FD, オンライン, 2025.12.10
福山友見	高校陸上選手に特化したトレーニング内容の指導	対象:立命館高校陸上部 藍野大学 FITNESS-LAB, 2025.12.13
尾藤祥子	教室の環境整備と個別の指導計画・教育支援計画の重要性について	茨木市立中条小学校研修, 茨木市立中条小学校, 2025.7.25
尾藤祥子	リーディングチーム研修	茨木市教育委員会　学校教育部　学校教育推進課, ローズWAM, 2025.5.23

尾藤祥子	全ての生徒が安心して学べる環境づくり	茨木市立彩都西中学校教職員研修, 茨木市立彩都西中学校, 2025.6.10,17
尾藤祥子	配慮の必要な児童の手立て	茨木市立春日丘小学校校内研修会, 春日丘小学校, 2025.6.20
尾藤祥子	茨木市地域子育て支援者研修 「遊びながら・体と手先をきたえよう」	茨木市立こども育成部子育て支援課, 茨木市文化・子育て複合施設オニクル, 2025.7.25
尾藤祥子	遊びを通したからだの育ちについて	高槻市子ども未来部子ども保健課, 高槻市子ども未来館, 2025.9.8
尾藤祥子	自立活動について	吹田市立古江台中学校区教職員研修, 吹田市立津雲台小学校, 2025.10.31
尾藤祥子	茨木市通級担当者への合理的配慮についての研修	茨木市教育委員会　学校教育部　学校教育推進課, クリエイトセンター, 2025.11.13
尾藤祥子	不登校児童支援研修	高槻市土室小学校PTA, 高槻市立土室小学校, 2025.12.19
宮本年也	産学連携支援活動	就労支援・アセスメント、（株）ナリコマエンタープライズ、2025年10月～毎月第4曜
津田勇人	「いつまでもしなやかな筋肉でいるためのストレッチ・筋トレ」 講演	NPO法人元気いばらき体操普及会, シニアプラザいばらき, 2025.11.1, 13:30～15:00
津田勇人	「元気はつらつ体操」教室　トレーナー	茨木市太田地区福祉委員会, 太田公民館, ①2025.4.17　②5.15 ③6.19 ④7.17 ⑤8.21 ⑥9.18 ⑦10.16 ⑧11.20 ⑨12.18 （各回13:30-15:00）
林部美紀	「引きこもり・不登校支援の実際」企画運営担当者（社会貢献委員会　地域連携プロジェクト助成金）	藍野大学作業療法学科, 藍野大学MLC棟アクティブコモンズ, 2025.2.15
林部美紀	「引きこもり・不登校支援の実際」企画運営担当者（社会貢献委員会　地域連携プロジェクト助成金）	藍野大学作業療法学科, 藍野大学MLC棟アクティブコモンズ, 2025.8.23
林部美紀	「引きこもり・不登校支援の実際」企画運営担当者（社会貢献委員会　地域連携プロジェクト助成金）	藍野大学作業療法学科, 藍野大学MLC棟アクティブコモンズ, 2025.11.30
林部美紀	「明浄学院へのメイクセラピー講座」	明浄学院高等学校, 2025.9.5
宮本陳敏	小児リハビリテーション支援事業　講演	中国西安市Hopeリハビリテーションセンター, 2025.6.21
宮本陳敏	反復末梢磁気刺激装置（PathLeader）臨床応用に関する講習会　担当者	藍野大学と藍野病院連盟主催, 2025.9.10
白井雅子	2025年度第２回現職者共通研修「実践のための作業療法研究」講師	大阪府作業療法士会, オンライン研修, 2025.9.7
白井雅子	高槻市地域ケア会議OT助言者	高槻市, 五領・上牧地域包括支援センター, 2025.7.18
白井雅子	滋賀県立八幡高等学校、高大連携、模擬授業	滋賀県立八幡高等学校, 2025.10.30, 12.15

高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法の視点から～	京都市保育士会主催 保育士向け講演会, 2025.1.15
高畑脩平	子どもの発達と感覚統合	帝塚山大学・附属幼稚園主催 保護者・支援者向け講演会, 2025.1.22
高畑脩平	本人視点で捉える発達障害の理解とサポート	茨木市あけぼの学園主催, 療育スタッフ・保育者向け講演会, ①2025.1.29, ②2025.6.12
高畑脩平	学習障害の理解とサポート	川崎市主催講演会,web, ①2025.2.5, ②2025.9.19
高畑脩平	書字困難の理解とサポート	奈良県難聴言語発達障害研究会主催講演会, 奈良県教育研究所, 2025.2.21
高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	大阪市福島区役所主催 講演会, 2025.2.28
高畑脩平	発達障害の理解とサポート ～ ASD・ADHDを中心に～	京都市立はなぶさ保育園主催研修会, 2025.3.10
高畑脩平	乳幼児の運動発達 ほか	（株） CoDMON, 五反田, 2025.4.11
高畑脩平	JPAN感覚処理行為機能検査	NPO法人オルケスタ主催研修会, 河内長野市, 2025.4.25
高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	Baseともかな主催 保護者・支援者向け講演会, 2025.4.27
高畑脩平	感覚過敏・鈍麻に合わせた遊び・環境設定	島本町公共サービスユニオン主催 学童保育指導員向け講演会, 島本町立ふれあいセンター, 2025.5.9
高畑脩平	子ども理解から始める感覚統合遊び	NARA感覚統合研究会主催研修会, 奈良県コンベンションセンター, 2025.5.31
高畑脩平	療育に活かす作業療法の視点	久御山町療育教室スタッフ向け講演会, 久御山町役場, ①2025.6.23, ②2025.6.30
高畑脩平	保育実践に対する助言 （構造化・感覚統合の視点から）	第39回近畿地区私立幼稚園研究大会, 2025.7.24
高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	京都市保育のつどい講演会, 2025.7.27
高畑脩平	通常学級の子どもの行動・学習のサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	御所市教育委員会主催講演会, 2025.7.28
高畑脩平	読み書き障害の理解とサポート	社会作業療法士協会主催講演会, web, 2025.7.31
高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	山崎保育園主催 保育士向け講演会, 2025.8.4
高畑脩平	作業療法士の視点から考える読み書き困難な児童生徒へのアプローチ	全国発達支援研究会主催web講演会, 2025.8.6
高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	三笠保育園主催保育士向け講演会, 2025.8.28
高畑脩平	子どもの発達と感覚統合 ～なぜ身体づくりが大切か～	久御山町役場主催保護者向け講演会, 2025.9.4

高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	木津川市主催 保育・療育スタッフ向け講演会, 2025.9.4
高畑脩平	学校現場におけるアセスメントを生かした指導・支援 ～感覚統合・作業療法の視点から～	奈良県特別支援教育研究所主催 教員向け研修会, 2025.9.5
高畑脩平	感覚過敏・鈍麻の理解とサポート	京都聖母学園小学校主催 教員向け研修会, 2025.9.26
高畑脩平	感覚統合療法 実践講座	京都国際社会福祉センター主催 実践講座, 2025.10.25-26
高畑脩平	子どもの行動理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	京都市下京保育研究会主催 保育士向け講演会, 2025.10.30
高畑脩平	子どもの特性理解とサポート ～作業療法・感覚統合の視点から～	奈良市通所支援連絡協議会主催 事業所スタッフ向け講演会, 2025.11.28
高畑脩平	感覚統合療法	大阪市児童福祉施設連盟 心理委員会主催 講演会, 2025.11.28
高畑脩平	子どもの困りごとを地域で支えるために ～発達障害を知る・支える～	YOU医療保健福祉フォーラム 2025, 2025.11.30
高畑脩平	感覚過敏・鈍麻に合わせた遊び・環境	京都市山科区保育協議会主催 保育士向け講演会, 2025.12.3
高畑脩平	子どものやる気スイッチを引き出す視点	奈良市特別支援者研修(公開保育), 2025.12.19
高畑脩平	読み書き障害に対する評価とアプローチ	ひょうご子どもと家庭福祉財団主催 PT・OT・ST向け研修会, 2025.12.20
真下いずみ	教育ツールとしての MTDLP活用の実践例紹介 ～学内教育編～ 教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①、講師	重点課題研修, 日本作業療法士会, web, 2025.1. 26
真下いずみ	現場で役立つ! 不登校・ひきこもり支援力向上研修、講師	茨木市子ども・若者支援地域協議会研修, 茨木市子ども・若者支援地域協議会, web, 2025.1. 31
真下いずみ	自傷や不登校・ひきこもりの訪問支援、講師	第6回 LAHPE研究会研修会: 児童思春期の自傷・自殺について, 関西医科大学, 2025.3.7
真下いずみ	ストレスの正体を知ろう、講師	京都府若者等就職・定着総合応援事業, 障害者生活支援センターはぴねす, 2025.7.18
真下いずみ	考え方をひとひねり！働き方が変わる認知リハ、講師	京都府若者等就職・定着総合応援事業, 障害者生活支援センターはぴねす, 2025.7.18
真下いずみ	不登校からはじまる未来づくり講演会	藍野大学, 藍野大学, 2025.11.30
真下いずみ	発達の偏り（特性）による生きづらさがある方に作業療法士ができること	重点課題研修, 日本作業療法士会, web, 2025.12.13-14
真下いずみ	ひきこもり状態の方へのアウトリーチの実例と支援システムの概要	サリヴァンの会 , 憩いの広場アイボリー, 2025.12.13
真下いずみ	MTDLP教育を理解する教員研修， 講師	重点課題研修, 日本作業療法士会, web, 2024.7. 28
中川法一, 橋本弘子, 小川泰弘, 真下いずみ	臨床実習教育の本質を学ぶ研修会、運営・司会	精神領域チーム研修, 大阪府作業療法士会, web, 2025.10.22

真下いずみ	教育ツールとしての MTDLP活用の実践例紹介 ～学内教育編～ 教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①、講師	重点課題研修, 日本作業療法士会, web, 2024.10.6
森元隆文, 小川泰弘, 真下いずみ, 他	精神科作業療法における評価尺度の活用 第二弾、運営	精神領域チーム研修, 大阪府作業療法士会, 2025.12.19
稲盛修二, 山﨑康祥, 菊池瞳, 林拓世, 畑中由佳	大学見学会，臨床工学技士の体験学習	高大連携講義, 明浄学院高等学校, 2025.09.17
稲盛修二, 菊池瞳, 新田佳伯	臨床工学科の紹介	高大連携講義, 汎愛高等学校普通科, 2025.12.11
稲盛修二, 山﨑康祥, 菊池瞳	高大連携　授業・実習　臨床工学分野	滋賀県立八幡高等学校, 2025.12.8
山﨑康祥、菊池瞳	大学見学会，臨床工学技士の業務紹介	高大連携講義, 東淀川高等学校, 2025.09.11
菊池瞳, 山本祐輔	臨床工学技士の紹介	明浄学院高等学校オープンスクール, 2025.10.25
新田佳伯	臨床工学技士の仕事内容の説明と本学の施設見学　大谷中学	高大連携事業, 藍野大学D棟, 2025.10.16
新田佳伯, 畑中由佳	臨床工学技士職業体験 in あいの祭	大阪府臨床工学技士会、茨木市教育委員会に後援あいの祭にて臨床工学技士職業体験会実施, 藍野大学, 2025.10.19
新田佳伯	臨床工学技士の仕事内容の説明　明浄学院高校総合キャリアコース　1年	高大連携事業, 明浄学院高等学校, 2025.11.27
山﨑康祥	アフリカ・ザンビアでの心臓手術技術移転事業における体外循環について	日本体外循環技術医学会, 50周年記念教育WEBセミナー, ZOOM, 2025.7.12
山﨑康祥	産学連携　学修プログラム研究会　技術指導・講師	産学連携学修プログラム研究会, 一般社団法人ふくしま医療機器産業推進機構　ふくしま医療機器開発支援センター, 2025.5.24-25
山﨑康祥	産学連携　学修プログラム研究会　技術指導・講師	産学連携学修プログラム研究会, 一般社団法人ふくしま医療機器産業推進機構　ふくしま医療機器開発支援センター, 2025.10.18-19
畑中由佳	ほっこりスクエア「おやこde-Ainoかふぇ」，運営	藍野大学主催ほっこりスクエア協力（全8回）, 藍野大学F棟1階, 2025.1-12月の毎月第3木曜日
畑中由佳	2024年度豊能三島ブロック交流会，運営	大阪府臨床工学技士会, 大阪府済生会千里病院, 2025.1.14
畑中由佳	2024年度第3回生涯教育セミナー「大学院のすすめ」Webセミナー，運営	大阪府臨床工学技士会, Web, 2025.2.1
畑中由佳	2025年度基礎教育セミナー「これから臨床工学技士として働く心構え」，Webセミナー，運営	大阪府臨床工学技士会, Web, 2025.4.18
畑中由佳	第35回日本臨床工学会，現地開催，運営	大阪府臨床工学技士会, 大阪国際会議場, 2025.5.17-18
畑中由佳	臨床工学体験	高大連携授業, 明浄高等学校総合キャリアコース2年生, 2025.6.6
畑中由佳	臨床工学技士の紹介	高大連携授業, 明浄高等学校看護メディカルコース2年生, 2025.9.3

畑中由佳	まちのおしごと体験	イオンモール茨木, 2025.9.20
畑中由佳	生命維持管理装置についての発表	高大連携授業, 明浄高等学校看護メディカルコース2年生, 2025.10.15
畑中由佳	2025年度学術教育セミナー心電図検定対策(2,3級程度），現地セミナー，運営	大阪府臨床工学技士会, 大阪ハイテクノロジー専門学校, 2025.10.26
畑中由佳	献血協力活動（豊能三島ブロック）	大阪赤十字血液センター, 大阪府臨床工学技士会, 箕面キューズモール, 2025.11.9
畑中由佳	大阪府城東区医師会市民公開講座&大阪府医師会フィルハーモニー・ウィンターコンサートにおける医療機器展示および来場者説明	大阪コミュニティ協会城東区支部協議会，大阪市城東区医師会，大阪府医師会フィルハーモニー, 大阪市立城東区民センター（城東スギタクレストホール），2025.11.29
中井良育	認定看護管理者教育課程ファーストレベル・セカンドレベル講師	藍野大学キャリア開発・研究センター（2024年4月～現在に至る）
中井良育	高大連携授業「健康科学とは」	千里青雲高等学校, 千里青雲高等学校, 2025.7.29
中井良育	高大連携授業「健康について～社会科学の視点から」	明浄学院高等学校，202510.9　11.27

社会貢献(2)役員，委員等

役職者等の氏名	役職・従事職務等	組織等の母体または名称，日付等
佐々木惠雲	顧問	内分泌糖尿病心理行動研究会
佐々木惠雲	顧問	西本願寺 医師の会
佐々木惠雲	顧問	＜身＞の医療研究会
佐々木惠雲	評議員	日本自律神経学会
佐々木惠雲	客員研究員	一般財団法人同和教育振興会
佐々木惠雲	評議員	一般財団法人本願寺ビハーラ医療福祉会
齋藤祥乃	査読委員	滋賀母性衛生学会誌　2011年より継続
本多容子	副代表	レビー小体型認知症カフェ大阪
本多容子	委員	大阪府地域福祉推進審議会
本多容子	会長	大阪府地域福祉推進審議会 福祉基金運営分科会
本多容子	会長	茨木市総合保健福祉審議会　高齢者施策推進分科会
本多容子	委員	茨木市地域包括支援センター協議会
本多容子	会長	茨木市社会福祉法人設立認可及び施設整備審査委員会
本多容子	委員	茨木市介護保険苦情調整委員会委員
本多容子	実行委員	日本看護技術学会第23回学術集会
本多容子	実行委員長	日本健康行動科学学会第24回学術集会
本多容子	評議員	日本健康行動科学学会
本多容子	大阪府公立学校教員採用選考テスト問題作成・採点委員	大阪府教育委員会
本多容子	委員	大学基準協会
本多容子	評価員（主査）	日本看護学教育評価機構

西田千夏	理事	NPO法人街かど福祉
西田千夏	理事	一般社団法人スペシャルキッズサポート振興協会
岩佐美香	事務局	Nurse Fight ; Nurse@Scool研究会
西上あゆみ	先遣隊	日本災害看護学会, 2013年～継続
西上あゆみ	学会誌査読委員	日本災害看護学会, 2009年～継続
西上あゆみ	副理事長、代議員、ネットワーク活動委員会委員長	日本災害看護学会, 2025年7月～継続
西上あゆみ	査読委員	日本災害看護学会第27回年次大会
西上あゆみ	和文誌専任査読委員	日本看護科学学会, 2021.10.1～継続
西上あゆみ	評議員	日本災害医学会, 2018.1.1～継続
西上あゆみ	演題査読	第31回日本災害医学会総会・学術集会
西上あゆみ	編集委員会、学会誌査読委員	日本リウマチ看護学会, 2021年9月～継続
西上あゆみ	災害連携委員	日本看護系大学協議会, 2021年6月～継続
西上あゆみ	災害支援対策委員	日本看護系大学協議会, 2022年7月～継続
西上あゆみ	防災・災害看護委員会	公益社団法人大阪府看護協会, 2023年～継続
西上あゆみ	倫理・利益相反委員会　外部委員	日本産業看護学会, 2024年4月～2027年3月
中野玲子	日本赤十字学園評議員会評議員	学校法人日本赤十字学園, 2020. 4 ～2025.6
中野玲子	日本バプテスト連盟医療団看護管理部顧問	日本バプテスト連盟医療団, 2023.11～
原田小夜	保健事業支援・評価委員会委員	滋賀県国保連合会
原田小夜	地域包括支援センター運営協議会　委員長	近江八幡市
原田小夜	野洲市ほほえみやす21健康プラン推進委員会　委員長	野洲市
原田小夜	滋賀県難病相談支援センター運営委員会委員	滋賀県難病相談支援センター

原田小夜	滋賀県保健師現任教育検討会委員	滋賀県健康医療福祉部
原田小夜	滋賀県がん対策推進協議会「がん登録専門部会」委員	滋賀県健康医療福祉部
原田小夜	日本公衆衛生学会モニタリングレポート委員会精神保健福祉分野委員	日本公衆衛生学会
原田小夜	代議員・査読委員	日本難病看護学会
原田小夜	評議員・活性化委員会委員	日本健康医学会
堀智子	茨木市障害認定支援区分等認定審査会委員	茨木市障害認定支援区分等認定審査会
天野美玖	ネットワーク活動・調査調整部メンバー	一般社団法人 日本災害看護学会, 2025.12.13-
三宅光代	事務局	レビー小体型認知症カフェ大阪
三宅光代	実行委員	日本健康行動科学会第24回学術大会
平山朋子	理事	保健医療学学会
平山朋子	障がい支援区分市町村審査会委員	豊中市
平山朋子	講師	交野女子学院
平山朋子	代議員	日本医学教育学会
平山朋子	大阪地区理学療法士委員	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士 養成施設教員等講習会
山科吉弘	日本呼吸理学療法学会学術大会 査読者	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	日本予防理学療法学会学術大会 査読者	日本予防理学療法学会
山科吉弘	日本呼吸理学療法学会　評議員	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	日本呼吸理学療法学会機関誌編集委員会事務局長	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	呼吸理学療法学　論文査読委員	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	第11回日本呼吸理学療法学会学術大会2025準備委員（プログラム集作成部門責任者）	日本呼吸理学療法学会
山科吉弘	社会福祉法人珠寿会　評議員	社会福祉法人珠寿会

山科吉弘	The Journal BIOPHILIA Reviewer	International Biophilia Rehabilitation Academy
山科吉弘	BMJ Open Reviewer	BMJ Open
安藤卓	評議員	日本地域理学療法学会, 2025.4-
安藤卓	機関誌「地域理学療法学雑誌」 査読者	日本理学療法学会連合 日本地域理学療法学会
安藤卓, 何川渉, 大和洋輔, 菊池唯, 熊部翔	第1427回臨床実習指導者講習会運営	公益財団法人日本理学療法士協会, 藍野大学, 2025.9.6-7
安藤卓	学術大会演題、機関誌「総合理学療法学雑誌」 査読委員	大阪府理学療法会生涯学習センター, 2025.10-
安藤卓, 岩村真樹, 山科吉弘, 菊池唯, 何川渉, 熊部翔	太田地区住民のための健康測定会	藍野大学, 2025.11.23
熊田仁	大阪府理学療法士会　茨木市理学療法士会　監事	公社）大阪府理学療法士会　H30.10～現職
熊田仁	第37回大阪府理学療法学術大会　査読委員	公社）大阪府理学療法士会
熊田仁	第65回近畿理学療法学術大会の演題査読委員	近畿理学療法学術大会
熊田仁	理学療法教育 (Journal of Physical Therapy Education （Japan）)の査読委員	日本理学療法教育学会
田中貴広	日本運動器理学療法学会　評議員	一般社団法人 日本運動器理学療法学会
田中貴広	学術大会委員会 委員	一般社団法人 日本運動器理学療法学会
田中貴広	機関誌調整委員	運動器理学療法学
大和洋輔	大阪府理学療法士会　広報部副部長	大阪府理学療法士会
杉本明文	理事	大阪府理学療法士会
杉本明文	委員	大阪府理学療法士会　組織率向上・人材育成特別委員会
杉本明文	委員	大阪府理学療法士会　登録理学療法更新促進特別委員会
杉本明文	監事	日本理学療法推論学会
何川渉	第14回日本筋骨格系徒手理学療法研究会学術大運営委員	日本筋骨格系徒手理学療法研究会
何川渉	日本筋骨格系徒手理学療法学編集委員	日本筋骨格系徒手理学療法学

熊部翔	運営スタッフ	第11回日本呼吸理学療法学会学術大会, 2025.11.29
阪上奈巳	特別非常勤講師（福祉医療）	大阪府立高槻特別支援学校
阪上奈巳	非常勤理学療法士	中村病院
新保健次	会長	近畿SCD・MSA友の会
新保健次	共同代表	全国SCD・MSA患者連絡協議会
髙田昌寛	一般社団法人大阪府理学療法士会生涯学習センター 大阪府理学療法学術大会における応募演題の査読	一般社団法人大阪府理学療法士会生涯学習センター（令和7年10月30日から令和9年度定時総会の終結の時まで） ※任期満了後であっても、新たに選任された者が就任するまで任期伸長
福山友見	第12回日本スポーツ理学療法学会学術大会 演題査読	日本スポーツ理学療法学会, 2025.5.19-2025.6.3
尾藤祥子	特別教育相談員	茨木市教育センター
尾藤祥子	合理的配慮協力員	茨木市教育委員会学校教育推進課
尾藤祥子	支援を要する令和6年度新小１児童の見立てと指導　協力員	豊中市教育委員会児童生徒課
尾藤祥子	母子保健事業　高槻市長期療養児訪問リハビリ事業　派遣作業療法士（アドバイザー）	高槻市こども未来部
尾藤祥子	子ども発達サポートチーム　チーム員	大阪府作業療法士会
尾藤祥子	子育て支援団体連絡会C地区担当者	茨木市こども支援センター
宮本年也	大阪府作業療法士会学術局教育部老年期領域チーム・代表	大阪府作業療法士会
宮本年也	第39回大阪府作業療法学会・査読委員	大阪府作業療法士会
宮本年也	レビー小体型認知症サポートネットワーク大阪・運営役員	レビー小体型認知症サポートネットワーク大阪
宮本年也	大阪市立大学共生社会研究会・理事	大阪市立大学共生社会研究会
津田勇人	第52回（令和7年度）理学療法士・作業療法士・言語聴覚士　養成施設教員等講習会 大阪地区、大阪地区運営委員	【共催】厚生労働省　医療研修推進財団 【主管】日本リハビリテーション医学会 【運営】日本理学療法士協会・日本作業療法士協会・日本言語聴覚士協会 【協力】全国リハビリテーション学校協会 リモート, 2025.8.18-9.10
津田勇人	日本作業療法士協会　教育部　委員	一般社団法人日本作業療法士協会

津田勇人	第58回日本作業療法学会演題査読委員	一般社団法人日本作業療法士協会
小谷（林部）美紀	副会長	大阪府北摂地域里親の会、愛＆夢
林部（小谷）美紀	理事	NPO法人日本学び協会
林部美紀	学術委員	第39回大阪府作業療法学会
林部美紀	論文査読	日本作業療法研究学会
林部美紀	口述発表査読	第39回大阪府作業療法学会
林部美紀	大阪関西万博救護員	2025.9.25, 2025.10.9
宮本陳敏	理事	中国リハビリテーションセラピスト協会, 2019.8
宮本陳敏	研究員	神戸大学大学院, 2025.4.1-2026.3.31
宮本陳敏	顧問	成都西南児童リハビリテーション病院, 2025.4.1-2026.3.31
宮本陳敏	理事	アジア小児リハビリテーション研究会, 2025.8.1
白井雅子	大阪府作業療法士会学術局教育部新人教育チーム部員	一般社団法人　大阪府作業療法士会
高畑脩平	日本作業療法士協会 制度対策部員	日本作業療法士協会
高畑脩平	研究助成委員会　委員長	奈良県作業療法士会
高畑脩平	論文査読委員	臨床作業療法学会
高畑脩平	口述発表査読	第38回大阪府作業療法学会
高畑脩平	論文査読委員	三輪書店　作業療法ジャーナル
高畑脩平	校閲委員	医歯薬出版
高畑脩平	理事	NPO法人はびりす
高畑脩平	理事	日本学校作業療法研究会
真下いずみ	日本作業療法士協会, 教育関連審査会	日本作業療法士協会

真下いずみ	日本作業療法士協会, 学術部委員	日本作業療法士協会
真下いずみ	大阪府作業療法士会, 学術局教育部　精神領域チーム	大阪府作業療法士会
真下いずみ	大阪府作業療法士会, 臨床実習委員会	大阪府作業療法士会
真下いずみ	京都府作業療法士会, ひきこもり支援OTチーム	京都府作業療法士会
真下いずみ	障害支援区分等認定審査会委員	茨木市
真下いずみ	障害支援区分等認定審査会委員	大阪市（2025年3月まで）
真下いずみ	校閲委員	医歯薬出版
真下いずみ	全国ひきこもり学会，実行委員，運営委員	ひきこもり支援OTチーム
真下いずみ	会員	南山城ひきこもり支援会
真下いずみ	うつ病治療ガイドライン ー精神科作業療法ー執筆班	日本作業療法士協会
長尾将利	教育部　発達領域チーム　代表	大阪府作業療法士協会
長尾将利	学術部　指定研究チーム	大阪府作業療法士協会
長尾将利	大阪府作業療法学会　実行委員	大阪府作業療法士協会
長尾将利	不登校支援講演会	藍野大学　作業療法学科
五十嵐朗	学会抄録査読者	48th Annual Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, 2025.7.26-30
五十嵐朗	査読者	Physiological Measurement
五十嵐朗	査読者	Biomedical Physics & Engineering Express
五十嵐朗	査読者	Advanced Biomedical Engineering
五十嵐朗	学科代表者	一般社団法人日本臨床工学技士教育施設協議会
五十嵐朗	養成施設代表者	Clinical Engneering
田浦晶子	学術委員会　委員長	日本耳鼻咽喉科学会京都府地方部会（2015.4.1-）

田浦晶子	めまい相談医制度運営委員会　担当理事	日本めまい平衡医学会（2023.10.28-）
田浦晶子	日本めまい平衡医学会査読委員	日本めまい平衡医学会（2017.12.17-）
田浦晶子	日耳鼻会報査読委員	日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会（2022.8.22-）
田浦晶子	京都大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学教室同窓会幹事	京都大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科学教室同窓会（2021-）
田浦晶子	一般社団法人日本めまい平衡医学会理事	日本めまい平衡医学会（2023.10.28-）
田浦晶子	めまい平衡医学会　専門会員資格審査委員会(医師講習会）担当理事	日本めまい平衡医学会（2023.10.28-）
田浦晶子	めまい平衡医学会　学会のあり方委員会　担当理事	日本めまい平衡医学会（2023.10.28-）
畑中由佳	学術委員	一般社団法人大阪府臨床工学技士会（2012年～現在）
畑中由佳	代議員	一般社団法人大阪府臨床工学技士会（2018年～現在）
畑中由佳	幹事	一般社団法人電解水透析研究会（2020年～現在）
畑中由佳	理事	一般社団法人大阪府臨床工学技士会（2024年～現在）
畑中由佳	第35回日本臨床工学会実行委員	一般社団法人大阪府臨床工学技士会
畑中由佳	第35会日本臨床工学会査読委員	一般社団法人大阪府臨床工学技士会
林拓世	第2種ME技術実力検定試験・作問委員	日本生体医工学会
林拓世	一般社団法人オルファクトリーフレイル学会・理事	一般社団法人オルファクトリーフレイル学会
山本祐輔	査読者	電気学会論文誌C
山本祐輔	入試作問者	藍野大学
中井良育	日本年金機構・年金委員	日本年金機構（2024年2月～現在に至る）

専門的学術講演（企業，研究施設，病院，班会議等）

著者，共著者	タイトル	学術集会名・会議名，場所，日程
本多容子	看護研究について	職員研修会，社会福祉法人京都社会事業財団 京都桂病院，2025.6.6
本多容子	看護研究について	医療法人恒昭会藍野病院
中田裕二，横山雛子，板垣博之，福留むつみ，水野友美子	医療施設内および検体検査分離薬剤耐性菌の解析	藍野大学・藍野病院共同研究，2025年
西上あゆみ	大規模災害における病院が備えておくべきこと	一般社団法人京都地域医療学際研究所，京都府，2月
西上あゆみ	看護研究支援	社会医療法人 東和会 第一東和会病院
和田惠美子	看護研究支援	京都府済生会病院
和田惠美子	看護学研究科　研究分析方法助言	滋賀県立大学大学院 人間看護学研究科
堀川尚子	科目「老年看護学概論」全14回講義および試験問題の作問，非常勤講師	独立行政法人 労働者健康安全機構　関西労災病院看護専門学校，2025.8-2026.2
山科吉弘	講演：口腔ケアについて	社会福祉法人珠寿会，2025.10.16
山科吉弘	講演：呼吸筋力について	社会福祉法人珠寿会，2025.12.16
山科吉弘	講演：研究方法論	公立甲賀病院web研修会，2025.12.3
熊田仁，田中貴広，前田智香子	2025年度 認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器）、運営	認定理学療法士臨床認定カリキュラム（運動器），藍野大学，2025.10.4-11.30
熊田仁	「肩関節の評価と理学療法」	院内勉強会，高村病院，2025.6.23
熊田仁	「肩の評価と治療～臨床症状から考える～」	医療法人医誠会セラピスト研修会，医誠会国際病院，2025.7.27
熊田仁	『肩の評価と治療』	医療法人財団共済会　清水病院，2025.10.11
田中貴広	姿勢・歩行分析のQ＆A	宇治おうばく病院　院内研修会，2024.8.6
新保健次	脊髄小脳変性症の病態と障害の理解	大阪電気通信大学特別講義，大阪電気通信大学四条畷キャンパス，2025.5.14
尾藤祥子	教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①「教育ツールとしてのMTDLP活用の実践例紹介　③卒前～卒後教育の連携」	日本作業療法士協会重点課題研修　MTDLP委員会，zoom開催，2025.1.26
尾藤祥子	教員と実習指導者のためのMTDLP教育法①「教育ツールとしてのMTDLP活用の実践例紹介　③卒前～卒後教育の連携」	日本作業療法士協会重点課題研修　MTDLP委員会，zoom開催，2025.10.5

宮本年也	共生社会研究における研究倫理を考える～「人を対象とする医学系研究倫理指針」を手がかりに～	大阪市立大学共生社会研究会教育セミナー, zoom開催, 2025.7.28
宮本年也	老年期の基礎	（一社）大阪府作業療法士会令和7（2025）年度現職者選択研修（老年期領域）, zoom開催, 2025.10.26
宮本陳敏	臨床アドバイザー	藍野病院, リハビリ科作業療法室, 2025.4.1-2026.3.31
宮本陳敏	作業療法士	芦屋市障害福祉課機能訓練室, 2025.4.1-2026.3.31
真下いずみ	精神科領域におけるMTDLPを活用した臨床実習	横浜リハビリテーション専門学校, 26)オンライン臨床実習セミナー, 2025.3.7

新聞、雑誌、放送等

該当者	見出し・題名	媒体、期日
佐々木惠雲	「藍野大学は医療保健学部に「健康科学科」を開設します」	茨木市医師会報、第269号（2025.1）、19-24
佐々木惠雲	「つながる医療と仏教⑥　西本願寺医師の会便り」	ブディストマガジン大乗、第906号（2025.11）38-39
佐々木惠雲	「つながる医療と仏教⑦　西本願寺医師の会便り」	ブディストマガジン大乗、第907号（2025.12）38-39
佐々木惠雲	「キャンパスNOW　トップに聞く」インタビュー	毎日新聞、2025.2.1
中田裕二	藍野大学－「生きる」こと、「健康である」ことを支える人材となる素養（協働力・思考力）を評価－	大学入試解体新書, アロー教育総合研究所 June edition　P92（2025）
和田惠美子	多職種連携に活かされるホームヘルパーの観察項目 ―ケアマネジャーの連携課題の解決に向けて－	月間ケアマネジメント, 2025.3
安藤卓	特集1　このままじゃこのままかも？今日から始めるプラス10分ウォーク（監修）	広報いばらき令和7年（2025）10月号
高畑脩平	でこぼこポン！ 監修	NHK 教育テレビ　Eテレ
高畑脩平	① 作業療法士って何者？ ②「子ども理解に活かす「感覚統合」の視点」	私幼時報 ①vol482, 2025年4月号 ②vol483, 2025年5月号
高畑脩平	感覚統合遊び	保育雑誌 PriPriパレット 2025年8・9月号, 世界文化社
田浦晶子	「輝く耳鼻咽喉科頭頸部外科女性賞2024」の受賞	第126回　日本耳鼻咽喉科・頭頸部外科学会総会, 横浜, 2025.5.28

年報編集後記

本年も年報をお届けすることができ慶びに耐えない。教育・研究活動や地域貢献等の様々な本学教員の活動が記されている。毎年、一年の活動をふりかえりあらたな年にむけて計画を立てていくことは、どの教員にとっても有意義であろう。近年、我が国の研究活動の低迷がさまざまな場で論議されている。研究活動はなかなか社会からは評価されにくい活動であり“低迷”の真の原因の分析はきわめてむつかしかろうと想像される。研究にはある種の楽しさが必須のコンポーネントだと思われる。楽しさのない研究は他人がみても面白みがない。わが国からうまれる研究にはまだまだ接して面白いものが多く、編者は低迷についてはあまり心配していない。

山田義博（藍野大学中央図書館長）

令和 8 年 1 月 20 日

【題字揮毫】

佐々木真美

2015 年　2016 年　2022 年　日展入選

2019 年　日本芸院展　大賞　受賞

2017 年　小野市展　小野市長賞　受賞

2018 年　三木市展　三木市長賞　受賞

藍野大学年報　2025

発行日　令和８年４月１日
編　集　藍野大学年報編集部会
　　藍野大学中央図書館事務センター
発　行　学校法人 藍野大学　藍野大学
　　〒 567−0012 大阪府茨木市東太田４丁目５番４号
　　電話　072−627−1711（代表）　FAX　072−627−1753
印　刷　株式会社プリント大阪



学校法人 藍野大学　藍野大学
大阪府茨木市東太田4丁目5番4号
072−627−1711（代表） https://univ.aino.ac.jp